白銀の鎧と黄金の剣

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の鎧と黄金の剣

【Ｎコード】

Ｎ３４８３Ｙ

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

主人公がヒロインと出会い、そこからさまざまな事件に巻き込まれる話です。色々な神話や伝説の武器やらが登場します。楽しんでもらえれば幸いです。

プロローグ（前書き）

どこかパクリ臭のような物がしても、どうか気にせずに読んでください。

プロローグ

神話――――――それは様々な神や英雄などが生き、そして散って行った世界。

その力は人間界に生きるあらゆる生物にちりばめられた。その力は様々な者によってふるわれた。だが、その力を持つ者は人間だけではなかった。

馬や狼などの生物もその力を持った。だが、その多くはある理由により死んでいった。それは――暴走だ。そもそも、この力は神などの上位種がふるっていたものだ。それを生物がふるうのはおこがましいという事なのだろうか？

それを見かねたある男はとある組織を作り上げた。

その組織の名前は『神にはむかう者達』≪フェンリル≫

プロローグ（後書き）

初めて書いた作品ですので、どんどん問題点等を教えてもらえるなら幸いです。
これから、いろいろとよろしくお願いします！

世界は始まりを奏でる（前書き）

取り敢えず始めてみました。プロローグは意味不明かもしれませんが、どうかご容赦ください。

世界は始まりを奏でる

ある陽気な日に仕事場をのぞいてみると、支部長に呼ばれているということなので俺こと、乾慎也は通路を歩いていた。

≪神にはむかう者達≫（ここからはフェンリルとする）は、本来各地で勃発する犯罪とかに駆り出されている。ま、ぶっちゃけ警察の裏組織的な？そんな感じだ。

だから支部長に呼ばれるなんてことはめったにない。仕事をさぼっていない限りは。

コンコン――――

「乾です。支部長、入室してもよろしいですか？」

「構わんよ。早く入りたまえ」

自分で呼び出して、何言ってんだ？あの爺は。もう年なんだから退職なりなんなりすりゃいいのに。もちろんそんなこと一切口には出さなかったが

「失礼します。それで支部長、どんな……御用……でしょう…か…？」

後半とぎれとぎれになったのは、綺麗で可愛らしい女性がソファに座っていたからだ。あれ？おかしいな。幻？そんなわけないか。紅茶飲んでるし。その女性の髪は黒色だが、その眼の色は黒ではなく、金色だった。ハーフってやつかな？

「支部長。娘さん……いや、お孫さんですか？」

それならまだぎりぎりわかる。というか、それ以外に何があるんだ？

「何故そこで依頼者という考えが出んのだ？孫が来ておるなら、おぬしなんぞ呼ばんわ」

「やかましいぞ、クソ爺。文句があるなら、俺はほかの任務を受けるだけだからな」

うわ、しまった。つい癖でいつもの調子が出てしまった。俺が呼び出されるときは、たいてい普通の話し合いにならない。なんせ位の違いなんぞ関係なしで悪態つくからな。俺が女性の方に視線を向けてみると、顔をそむけて笑いを堪えていた。そんなに面白いか？

「真由美君、そんなに笑わんでもいいじゃろうに。わし、今すごく傷ついとるぞ」

「申し訳ありません。あまりに二人のやり取りが自然すぎて。……くっ」

まだ笑ってるよ。さすがに受けすぎじゃねえ？

「爺、あんたに繊細な心なんかあるわけないだろ。ついこの間呼ばれたときだって、あんた確かギャルゲ……」

「あー、あー聞こえない聞こえない。何のことかわしゃ知らんぞ」

ナチュラルに否定しやがったよ、この爺。ま、そりゃどうでもいいんだが。それよりも大切なことがあるしな。

「それで？俺に依頼って何なんだよ。別に俺じゃなくたって頼める

やつはいくらでもいるだろ？」

俺は支部長の隣のイスに座りつつ訊いた。

「おお、良く訊いてくれた。だが、その前に自己紹介といこう。乾。こちらの女性は組織のとある役職に就いている、神崎真由美君だ。

真由美君。このいけすかない男は、組織でもSランカーの腕利きの男じゃ。安心してくれ」

「そうですか。それでは改めてはじめまして、神崎真由美と申します」

「こちらこそはじめまして。乾慎也です。どんな依頼にしろ、よろしくお願いします」

「あら、受けないという選択肢はないんですね。期待できそうです」

「どんな物であれ、とにかくやり抜く。それが俺のポリシーですので。それで爺、依頼って何なんだ？そんな風に固まってないで教えてくれよ」

爺はなんかしらんがソファで丸まっていた。気持ち悪っ。

「こほん。依頼というのは、彼女、真由美君の警護をしてほしい、という事なんじゃ」

「は？」

おおっと、何か分からんが不吉な空気が漂ってきたな。どうしようかな？

世界は始まりを奏でる（後書き）

第二話、出してみました。今のところ読まれておられる方はいらっしゃらないようですが、頑張りたいのでよろしくお願いします！

護衛の始まり（前書き）

第三話です。できるだけ定期更新しようと思いますが、用事でできなくてもご容赦ください。

護衛の始まり

「仕方ないな。俺は別にかまわないよ。でも、まさか俺だけにやらせるわけじゃないよね？」
「当たり前じゃろ。いつもの二人を連れていけ。あれでも一応はＡ（ダブ）Ａ（ルエー）ランカーじゃ。役には立つじゃろ」

それはもうあっさりと承諾した。正直な話、たかが護衛でＡＡランカー以上を三人も必要とする任務。一体どれだけ危険なのか、気になるという点もあったがそれよりも重要なのは――――

「特務なんだろ？これは」
「支部長直々なんじゃからそうじゃろ。そんなこと訊かんでもわかっていると思っとったんじゃが」

特務――――要するに支部長、または本部から直々に送られてきた任務のことを指す。一応ここは日本支部。一応というのは、本部という物がぶっちゃけ存在しないからだ。総局長が滞在している場所が、その時々の総本部になる。いったい今はどこにいるのやら。

「それじゃあ、行くとしようか。準備はいいですか？」
「ええ、私は構いませんが……いいのですか？そんなに軽々しく受けてしまって」
「そんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。こんなクソ爺からとはいえ、一応特務ですから。受けないわけにはいきません」
「そうですか……。まあ、貴方がそれでいいのならいいんですが」

なんか遠慮気味だな。彼女が依頼を持ってきたんじゃないのか？それとも、彼女が何か重要な役割を担っているのかな？まあ、それ

は置いといて。仕事をするとするか。

俺と神崎さんは支部長室を退出した後、任務の話をしていた。どうやら彼女を隣町のホテルまで護衛する、という任務のようだ。思ったよりたいした任務じゃないないな。でも、それなら特務指定にされるわけがないし……まあ、いいか。悩むとか面倒だしな。俺は神崎さんを待合室に待たせて、受付に向かった。

「花音ちゃん。ちょっといいかな？」

「はい～？あ、慎也さんじゃないですか。どうかしたんですか？」

この子は達宮花音（たつみや・かのん）ちゃん。フェンリルで受付嬢をやってる元気な女の子だ。髪は明るい橙色。受付嬢というよりは、外で元気で遊んでいた方が似合っている女の子だ。基本的に任務の発注などをやっている。

「あの二人組の馬鹿がどこにいるか知ってる？ちょっと任務に連れて行きたいんだけど」

「ああ、それでしたら先ほどお見えになるって――――」

「誰が二人組の馬鹿だって？」

声のした方向を振り向くと、そこには男女二人が立っていた。俺が探していたやつらだ。

「お前らのことだ。っていうか、お前ら遅刻だぞ。もうすぐ昼時だぞ。また仲睦まじくやってて遅くれたのか？」

「ちげえよ。今任務が終わって帰ってきたところなんだよ。それで？俺らに何か用なのか？」

「そうだと言ってるだろう。月花、なんかやけに眠そうだな。またなんかしてたのか？」

「違うわよ！ただ恥ずかしいから顔を伏せてただけ！どうしてリーダーはいつも私たちをそういう目で見るわけ！？」
「そういう風に見えるからに決まってるだろ？ところでお前ら、任務だぞ。昼食を奢ってやるから手伝え」
「マジで！？行く行く！いやあ、腹減ってたんだよな。旨い店を頼むぜ？」
「食い意地張り過ぎよ、卓也。まあ、おなか減ってたのは本当だけどね」

この二人は俺が組んでるチームの二人、六道卓也（ろくどうたくや）と黒市月花（くろいちげっか）だ。一応ＡＡランカーだ。
ランカーの位は、Ｆを順当にＥ・Ｄ・Ｃ・Ｂ・ＢＢ・ＢＢＢと順番に増えていく。もちろんＣからはプラスとマイナス判定も付く。まあ、Ｆから始まる輩で続くやつは少ない。
Ｆの地位はいわゆるなんでも屋みたいな雑事ばかり任せられる。そこで俺たちが守るべき市民の事を知るという意味も含まれているからだ。俺はそのＦランクから始まった数少ない逸材なんだけど、ね。

「それじゃあ、護衛の相手を連れてくるから。車をとってくる間守っててくれよ？」
「え？任務って護衛なの？」
「ああ、それじゃあ迎えに行ってくるわ」

俺が待合室にいくと神崎さんは何かの本を読んでいた。あれはイギリス英語で書いてあるから、イギリスの本かな？さすがに内容とかはわからんけどさ。

「神崎さん、人の用意はできたんですが動けますか？」
「あ、乾さん。はい、大丈夫ですよ。それでその人は？」

「移動ついでに自己紹介させますので、付いてきてもらっていいですか？」
「そうですね。お願いします」

俺と神崎さんは、ホールに出て入口の所で待っていた二人のところまでいった。案の定二人はきっちりとした感じになっていた。いつもはふざけているが、仕事はまじめに取り組む奴らだからね。

「それじゃ、俺は自分の車をとってくるんでここで待っててもらえますか？護衛はこの二人に任せるので」
「それは構いませんが。大丈夫なんでしょうか？」
「？……ああ、車の事ですか？それなら大丈夫ですよ。一応狙われても大丈夫なようにコーティングはしてありますから」
「わかりました。それではここで待っているとします。それでは護衛、お願いしますね」
「はい。ちゃんと守り抜いて見せますよ。だからできるだけ早く戻ってきて」
「はいはい。まったく、台無しだな」

俺は車を取りに駐車場の方に向かって歩き始めた。

護衛の始まり（後書き）

いきなりお気に入りにしていただいた方もいるようで驚きです。その期待に頑張ってこたえようと思います。それでは、また明日。

力の片鱗

俺が駐車場に到着すると、そこには一般人の格好をしているがその実力は少なくとも、Bランク以上の実力はあるだろうという気配を漂わす奴らが十人以上いた。その中の最も強い気配を放っていた男がこちらに向けて歩いてきた。

「先に訊いておきたいことがある。お前はあの女とどういう関係なんだ？」

「どういう関係ってなんだよ。俺と彼女はただの護衛と護衛対象ってだけだ。それより、あんたらも同業者だろう？何故彼女を狙う？いくら認可されているとはいえ、一応罪にはなるんだぞ？」

「こちらも依頼なのでな。仕方がないのだよ」

「そうかい。こんな大量の人員を雇えるってことは相当の金持ちだな」

俺達の会話をしり目に、ほとんどの奴らは俺を囲んでいた。そしてナイフや銃をこちらに向けて構えている。俺がそれを分かっているだろうに動かないでなおも喋っているのがじれったくなったのか、一人の男が俺に向かってきた。それに釣られて十人近くの人間が動き出した。

「やめろ！勝手に動くんじゃない！」

リーダー格の男はがそう叫ぶと、全員の動きがぴたりと止まった。いい統率力だ。だけど、それはやっちゃいけない選択だったよ。俺は片足を思いっきり上げ、思いっきり地面に叩きつけた。

叩きつけた足で地面を揺らしそこにいた奴らを行動不能にした。そしてその足で動いた十人を包み込む程の魔法陣を展開し、その陣

に魔力をつぎ込んだ。揺れが問題ないほどになる頃には、もう術は完成した。

「――――重力術二式（グラビティセカンド）・輪環（フォーチュン）――――」

その陣から発生した普段人間が浴びている重力の約二十倍もの重力をたたきつけた。もちろんそんな物を浴びた連中は十秒と持たず肉塊、いや肉片も残らず消えた。まだ生き残っているのはリーダー格の男と、四人だけだった。

「……さすがは護衛を任されただけの事はあるな」

「お褒めに預かりどうも。でももったいないことをしたね。俺に挑むなんて愚を犯さなきゃ、まだ生き残っていられただろうに」

「そのようだな。さすがにこれは引かざるを得ないようだな。最後に教えてくれ。君は一体何なんだ？」

「へえ、さすがだね。あれが見えたんだ。いいよ。教えてあげよう。あれはな――――」

――――神喰狼（フェンリル）だよ――――

俺がそう告げると、男たちは顔色を変えた。俺はそれを無視して、自分の車のところに行きエンジンを動かした。そして俺が男の隣を通り過ぎようとしたところで、男はぼそりと呟いた。

「その力は、いつか君すらも喰らうことになるだろう」

「それぐらいこの力を受け継いだ時から覚悟しているさ」

俺はそのまま車を動かし、駐車場から出て行った。

力の片鱗（後書き）

第四話です。昨日は更新できず、すいません。それでは、またいずれ。

車の中で

「ほい、到着っと」
「リーダー、車取りに行くだけでこれは時間かかり過ぎですよ」
俺が入口の所に車を置くと、早速文句を言われた。時計を見ると――――うわ、十五分も経ってんじゃん。確かにこりゃ時間かかり過ぎだ。
「まあいいじゃん。どうせ襲われてたんだろ？なんか地面の揺れを感じたし、震脚でも使ったんじゃねえの？」
「まあね。大した実力はなかったけどね。どこかのチームを雇っただけで、実力は測ってなかったんだろうけど。弱かったよ。術でほとんどが一撃死。拍子抜けだった」
説明していなかったが、フェンリルというのはギルドみたいなもので雇われればなんでもするなんでも屋だ。雑務から探検、暗殺などなんでもござれ。だけど、護衛なんて物を任されるのは大体特務だけなんだけど。普通護衛なんて物を頼む奴には専用のＳＰがいるからね。
「いや、すいません。待たせちゃいましたね。どうぞお乗りください」
俺が助手席の扉を開いて神崎さんに手をのばすと、神崎さんはカバンの中をあさっていた。
？何を探してるんだろ？少しを待っていると、出した物はハンカチだった。ハンカチ？何故に？そう思っていると、神崎さんはそのハンカチを俺の頬にあてた。

「あの？何かありました？」
「リーダー、血が付いてたんだよ。それで怪我したんじゃないかと思ってるんじゃない？」
「え？違うんですか？」
「違いますよ。この血は返り血です。俺に怪我を負わせることなんて、そうそうできませんから」
「うわ、傲慢。でもそんなところが痺れる！」
「はっはっは。褒めるな。まあ、どうでもいいんだけど。まあ、その、ありがとうございます」
「いえ、これ位どうということはありませんから」
「リーダー、そろそろ行こうぜ。俺腹減っちまってさ」
「お前、いろんな意味で台無しにしてくれるよな。構わないけどさ。それじゃあ、乗って下さい」

俺は運転席、神崎さんは助手席。それに残り二人は後部座席に座った。俺の車はワゴン車だ。説明し忘れたから言っておく。そして車は動き始めた。

「そういえば、この車対策とか大丈夫なんですか？」
「何がですか？……ああ、狙われないかってことですか？それなら大丈夫です。この車は幻影色ですから。それに対魔法・魔術の素材でもできてますし」
「幻影色……ですか？」
「あれ、知りません？そんな有名じゃないのかな？
双眼鏡とかそういう媒体を使って見ても、こちらの事はわからないようにする物です。大体の人間は常識を持っていますから、人が多くいるような場所で撃ってきたりはしません。
まあ、撃ってきても俺の重力操作で捻じ曲げますがね」
「リーダーって、ホントに容赦ないからね。どうせ駐車場で戦った

相手だって重力で押し潰したんでしょ？」
「だっていちいち相手にするの面倒だし。大体知ってるだろ？俺は光と闇の術式以外が苦手だって」
「知ってるけどさ。なんか無残じゃない？」
「そんなもん知るか。挑んでくるんだから相対するしかないだろ？全く話は変わりますが神崎さん」
「はい？何でしょうか？」
「後ろの二人が腹が減ったとうるさいので、目的地に行く前に俺の行きつけの店で昼食をとってもいいですか？」
「はい、それぐらいなら構いません。私もお腹は空いていますし、ね」

返答を訊いた俺は、俺の行きつけの店『カナリヤの涙』に向かった。

車の中で（後書き）

第五話です。主人公ちょっと傲慢ですけど、飽きっぽいです。どうでもいい情報ですが。それではまた今度会いましょう。バイチャ！

（＞＿＜）／

カナリヤの涙

俺たちは『カナリヤの涙』に到着した。『カナリヤの涙』は隣町との境にある、小さい店だ。俺は駐車場に向かって、車を止めて助手席を開けようとした時にそれは飛んできた。光の槍が。とっさに闇の術を手に展開し受け止めた。その方向をみると、先程のリーダー格の男が立っていた。同時に後部座席の二人も降りて、助手席を開けた。いくら対魔術に優れているといっても限度がある。避難させた方がいいと判断したんだろう。だけど、神崎さんは動こうとしなかった。まるでこれから始まる戦いを片時も見逃さないようにしているかのように。構わないんだけどさ、無鉄砲な人だ。

「面倒だな。なあ、まだ追いかけてきたのか？もう無駄だと悟っているだろうに」

「無理だと理解はできても、諦める訳にはいかないんだよ。しっかし、それだけの光を片手で止めるのか……。やっぱり化け物だな」

「当り前……と言いたいところだが、これは神喰狼（フェンリル）の力は関係ない。単純に闇の術式で光槍の表面を削ってるだけだ」

「そんなことをさも当然にやってのけるところが、すでにあり得ないって……」

「俺の前に出てきた、って事は死ぬ覚悟はできているな？お前には特別に見せてやろう。主神を喰らった神狼の力をな」

俺は腕を交差させながら呟き始めた。神狼は今ここに顕現される。俺の右手に刻まれた十字架の刻印が輝き始めた。白銀の色に。

「フェンリル、久しぶりにお前も戦えそうだぞ？暇つぶしぐらいになるんじゃないか？」

『それは楽しそうだ。ここ最近の敵は暇つぶしにもなりはしなかっ

たからな。せいぜい期待を裏切るなよ？人間』

交差の手をほどくと、白銀の光は頂点に達し光が消えると宝石の結晶が俺を包み、次の瞬間には俺の体を白銀の鎧が包み込んだ。そう気高き孤高の狼の毛皮を纏ったかのように。

「それがフェンリルか。予想外だよ。結構普通なんだな」

「ははは。まあ、見た目はな。だけど、伊達に神狼と呼ばれてるわけじゃないんだぜ？」

俺は一気に動き始めた。俺の右手の刻印の正体はグレイプニール。北欧神話において、フェンリルを縛っていた魔法の紐だ。ある意味で、こいつは対神用の生物だ。その身体能力は尋常じゃない。少なくとも眼で追うなんて不可能なほどに。ま、フルパワーには程遠いんだけど。

――――ゴウッ！！！

俺の拳は顔面を狙っていた。それにぎりぎりで気がついたのか、横に避けるとものすごい音が鳴り響いた。空気を殴ったことで、拳の威力は衝撃波になって周りに散らばった。

「外したか。やっぱ四分の一の出力じゃ避けられちまうか。ほとんどの奴はこれで十分なんだけどな」

「怖ええよ。なんだその威力。回避した拳の攻撃が衝撃波に変わるとかどんなんだよ！」

「神狼だぞ？それぐらい当然だろ。今度こそ当ててやるから、まあ味わってみろって」

「こらー！店先で何やってんの！ここは戦う場所じゃなくて、ご飯を食べる場所でしょうが！」

もう一度拳を構えて動き出そうとした俺たちに怒声が響き渡った。この声は……オーナーか？

その方向を見てみると、エプロンを構えた女性が腰に腕を添えて立っていた。おお、結構さまになってる。

「慎也！今すぐ戦うのやめないと、昼飯抜きにするよ！」

「うわっ！それは勘弁して下さいよ！」

俺は勢いもなくなったし、しぶしぶ鎧を解いた。相手も拍子抜けしたのか戦う態勢をやめていた。ここに充満していた戦いの雰囲気がなくなった。

「それじゃあ、いらっしゃいませ！『カナリヤの涙』へようこそ！」

そんな俺たちを迎えたのは満面の笑みを浮かべたオーナーの姿だった。

カナリヤの涙（後書き）

そんな訳で第六話です。お気に入り登録も増え、感謝です。これからもよろしくお願いします。それでは、ばいばい。（＞＿＜）／

説教と談笑（1）

「それで？なんでまた店先で暴れてたわけ？」
「いや、俺は率先して暴れたわけじゃねえよ。ただ襲われたから自衛権を行使しただけ。これ以上文句を言う気なら、法律の方に言ってください」

俺は正座の姿勢で詰問されていた。うう。俺は何もしてないのに。というよりも俺のせいじゃないのに。

「お黙りなさい。あんた神喰狼（フェンリル）の力を開放してたでしょうが。知ってる？そういうのを過剰防衛っていうのよ。それとあんた」
「ああ。なんだ？罰ならいくらでも受けるぞ。甘んじてな。俺が悪いのだから」
「あら、結構潔いのね。これは忠告よ。あんた見たところ、ＡＡランカーでしょ？その程度の実力でこいつに挑もうなんて愚の骨頂よ。金輪際こういう事が無いようにしなさい」
「え？何その扱いの違い。俺ひょっとして嫌われてんじゃねえの？」
「あら、そんなことはないわよ？ただあんたと一緒にいると、あんたの事いじめたくなってくるのよね。偶に」
「うわ、ドＳだ。ここにドＳがおるわ」
「失礼ね。ま、いいわ。それで昼は食べて行くんでしょ？さっさと注文してよね。それともいつものでいいの？」
「うん。いつものでいいから、立ってもいいか？そろそろ足が……っていうか、なんだよこの石は！どんな拷問の風景だよ！」

ちなみに神崎さんと卓也と月花はこちらを苦笑しながら見ていた。俺と男の膝には十五枚ほどの板状の石があった。重てええええ！！！

「ああ、もういいわよ。お疲れ様」

オーナーこと、花道楓（はなみちかえで）さんは、俺たちに乗っている石の天辺に触った。すると全ての石が砕けちった。あー、足が痛い。

「それじゃ、料理を用意しとくからおとなしくしときなさい。暴れたら、シバキ倒すからね」

「そんなことしないよ。疲れたから、早めにお願い」

「はいはい」

俺が席に戻ると、早速卓也が話しかけてきた。こいつのテンションに付き合うの、偶にだけど面倒なんだよな。

「リーダー、あの人とどういう関係なんですか？ずいぶん親しげでしたけど！」

「昔から世話になってる人だよ。それ以上もそれ以下もない」

「なんだ。面白くないな」

「お前を喜ばせなきゃならん道理はない。それで神崎さん、こいつの処遇はどうします？」

さっきから黙って座っている男――――――確か、白鷹だったかな？フルネームを公表する気はないみたいだけど。全員の視線が自然とその男に集まった。もっと肩身狭くなったみたいだけど。神崎さんは淡く微笑みながら、白鷹に話しかけた。

「白鷹さん？あなたはこれ以上私たちを襲う意思はありますか？」

「ない。神喰狼（フェンリル）の力は把握した。これ以上挑んだって己の命を捨てるだけだからな」

「それなら構いません。無用の命を捨てる必要はありませんから」

「そうですか。いつもなら甘いと切り捨ててしまうところですが、

依頼主がそういうならいいでしょう。俺は何もしません」
「リーダー、この人の仲間に何の術を使ったんですか？」
「輪環（フォーチュン）だな。全体攻撃用の魔法。重力系統のな」
「重力二式（グラビティセカンド）ですか？そりゃあ、ご愁傷様ですね」
「上下左右から通常の二十倍ほどの重力を叩きつけ、体を微塵も残さずに潰すっつう技だからな。そりゃあ、痛みも半端じゃなかっただろうな」

魔法や神話系統の物が全世界に明らかになって早二十年。２０３８年現在でも、魔法などの技術で新たな素材ができている。
魔法は四系統・炎・水・土・風に加えて、二系統・光と闇つまり六系統で構成されている。俺が得意な術は闇と光の攻撃系の魔法。回復は全くと言っていいほどできない。
フェンリルができて、俺たちのような力を継いだ者は光を見ることができるようになった。俺達は言ってみれば、異能者つまり異常の塊みたいなもんだ。力事態は太古から存在した。だが、たいていの奴は迫害される。当たり前だ。こんな気味の悪い力を持つ奴と一緒にいたいと思う奴がいる訳がない。

「お二人もやっぱり神話武器（ゴッドウエポン）を持ってるんですか？」
「俺たちは持ってません。俺たちの得意武器は、刀と槍なんですけど。職人のオーダーメイド品なんです。材料はわざわざリーダーが取ってきてくれたんですよ？」
「すごいですね。ちなみにその素材って？」
「刀の方は、アジ・ダハーカの牙。槍の方は神話世界にのみ存在する鉱石です」
「……え？」

さてはていったいどんな反応をしてくれるのやら、楽しみだな。

説教と談笑（1）（後書き）

そんなこんなで第七話。今回と次回は、一応説明不足の部分を説明する回にしたいと思います。それでは！

説教と談話（2）

「えええええーーーーっ！アジ・ダハーカってあれでしょう？大洋の底の方に封印されていて、世界の終末に人類の約三分の一を殺す、っていう伝承持ちの竜でしょう？」

おおう。やっぱり凄いリアクションだな。俺は微笑を浮かべながら、ダージリンティーを飲んだ。ここのお茶って美味しいんだよな。そんでサンドイッチを食いながら説明を続けた。

「ええ、そうですよ。あとちょっと訂正で。確かに伝承では海の底か高い山に縛られている、となっています。でも、実際は異世界を泳いでるだけですから」

「でもリーダー。三分の一の人を殺す、なんて伝承を持っている竜と交渉してくるのは世界広しといえども、リーダーと魂持ちの人たちだけだと思うよ」

魂持ち――――――名前の通り、各神話の英雄や神様の魂をその身に宿す人たちの事だ。その人たちは、魂を宿すことでその者が使っていた武器――――――神話武器（ゴッドウエポン）を使う事が出来る。

でも、そうではない人もその力を継ぐことができる。『継承』とか色々あるけど、ほとんどの奴らは因子持ちだ。

その武器をふるうのに必要な因子を持っていれば、誰でもふるう事が出来る。でも、神や英雄の武器だ。そう簡単に振るえる訳がない。そこで開発されたのが伝説武器（ミスティックウエポン）。

「それで、どうやってアジ・ダハーカの牙をもらったんですか？」

「簡単ですよ。俺が生きている間に世界の終末が起こった時、俺はアジ・ダハーカに手を出さない。その代わりに、牙を一本もらう。

そういう契約です」
「アジ・ダハーカも神喰狼（フェンリル）は障害にしかならないだろうしね。ひょっとしたら一人の人間も殺さずにリーダーと出くわして、よくて重傷、悪くて死亡するかもしれないからね」
「それは……そうかもしれませんが。でしたら乾さんは遭遇しても、知らんぷりする、という事なんですね？」
「そうですが。何か問題でもありますか？」
「問題って……」

あれ？ちょっとあっけからんとしすぎたかな？するとさっきから黙りこくっていた白鷹がしゃべり始めた。おお、やっとか。

「それで、神話世界の鉱物とは何なんだ？神話世界に入ることができるのは、相当地位が高い者だけだと聞いていたんだが……」
「俺は創始者の知り合いだからな。そのツテもあるけど俺は一応、神喰狼（フェンリル）だからな。あそこの掟は『すべて自分で対処せよ』だからな」
「そうなのか。というかこの硬度、なんか覚えが……ひょっとしてこれ、オリハルコンか？神話世界でもめったに見つからないっていう、あの？」
「ははは、正解。オリハルコン事態は別に珍しくない。でも、発見されるのはもう焼け野原になった場所がほとんどだ。そういう場所にはいるんだよな。魔獣の類が」
「なるほど。力を制御されている者とは違い、己の力を理解しているから、か。ちょうど銃だけを持った人が虎に挑む感じか？」
「そうそ。それで俺がとある場所で見つけた、ってわけ。それを知りあいの鍛冶屋に持って行って槍にしてもらったってわけ。わかったか？」
「私たちがＡＡランカーになったお祝いって事でくれたんだよ。あの時は驚いたね。一級武器も有象無象の類に見えるほどの武器が、目の前にあったんだから」

「リーダーって周りには優しいよな。こんな上等な物まで用意してもらっちゃってさ」
「俺はそんなのなかったからな。せめて周りの奴には、と思っていただけさ」

事実、俺がSランカーになろうと褒めてくれる奴なんかいなかった。こいつらを除いたら。話が一区切りついたところで周りを見てみると、全員が食い終わっていた。

「それじゃあ、そろそろ行きましょうか」
「はい、そうですね。それでは、お金は――――――」
「俺が払っときますよ。このぐらいの出費全然痛くありませんから」
「でも、やはり依頼主としてここは私が払った方がいいでしょう」
「大丈夫ですよ。リーダーの貯金見たら、たいていの物取りは盗みをやめるレベルだから」
「そうだな。なんせ貯金が億いってるからな。ここの値段はお手頃だし全然痛くないだろ」
「そういうこと。それじゃ、神崎さんを車まで運んどいて。それで白鷹、お前どうするんだ？」

白鷹はとっとと扉を開いて出て行こうとしていた。はっきりとした性格だな。俺が呼びかけると足を止め俺の方に寄ってきた。俺は精算を済ませて歩きながら話をした。

「何がだ？いつもの通りの生活を送るだけだが」
「お前を雇ったのは大金持ちか、相当の家柄の人間なんだろ？普通に考えて、何かしらの圧力が掛かってるとみて間違いない」
「それでも仕方ないだろう。本来、任務に失敗するという事は同時に死を意味しているのだから」
「お前、俺らのチームに入れ。俺に挑んでくるその根性、気に入っ

た。俺らのチームに入れば、それなりの報酬は保証するぜ？なんなら、お前のチームごとはいってもいい」
「……二、三日時間をくれ。こんな話、俺一人で決めるわけにはいかない。生き残ったメンバーと話し合って決める」

白鷹はそう言って自分のバイクに乗って、どこかへ走り去って行った。これで良し。俺は自分の仕事に戻るとしようかな。そう思いつつ、俺は三人の所に駆け足で急いだ。

説教と談話（2）（後書き）

自分が思っているより読んで頂いていた方がいたことにビックリです。ありがとうございます。感謝感激雨あられ状態です。これからもがんばっていきますのでよろしくお願いします！（＞＿＜）／

護衛の終わり

道中は特に問題なく、（太陽が暖かくて眠りかけたのは秘密だ）車に二時間ほど揺られて隣町に到着した。むしろ何の障害もなくて拍子抜けしたぐらいだ。

ホテルの前に到着すると、数名のホテルマンの人が立っていた。まあ、予約ぐらいはしてるよな。俺はその前で車を停めて、助手席の扉を開けた。

「それじゃあ、これで任務は完了って事でいいですか？」

「ええ。ここまでありがとうございました。怪我などはありませんか？」

「あるわけありませんよ。それでは、目的はわかりませんがここでの滞在をお楽しみください」

「……よくわかりましたね。私が日本に住んでるわけじゃないって事」

「うーん、なんていうんでしょう？こう、全体の雰囲気のような物がこの国とは違うっていうのか。まあ、そんな感じです」

「そうなんですか。それじゃあ、はい」

神崎さんは俺に向かって右手を差し出していた。？これはどういう事？外国風に口付けでもしろ、ってことか？いや、違うな。これはひょっとして……。

「こう、ですか？」

「はい」

やっぱり握手か。そう安心して、握手をしたとたん俺（多分神崎さんも）の頭に何かがほとばしった。そして、一瞬だけど神崎さん

から黄金の剣のようなものが見えた。俺たちは同時に手を離し、己の手を見つめていた。あの姿は一体……？

「お嬢様、もうよろしいでしょうか？さすがに九条様もくたびれていらっしゃるでしょうし……」

「……そうですね。それでは爺、彼らに部屋を用意して差し上げて」

「そこまでする必要はありません。言うほど働いてはいませんしね。俺たちはこれで失礼します」

俺がそう言って車の方に戻ろうとすると、あの二人がいらん事を言い始めた。

「ええ、泊まっていきましょうよ。せっかく神崎さんもご厚意なんですし」

「そうですよ。こんな時以外、この町に来たりしませんよ？思い出作りに、ね？」

「ね？じゃねえよ。こういう時は遠慮しとくのが筋ってもんだろ」

「いえ、せっかくですしお願いします。お嬢様の顔を立てると思って」

「……それなら一般客用で三人部屋を一つか、二人部屋を二つお願いします」

「かしこまりました。君達、お嬢様をお部屋にお連れしておいてくれ」

「「「かしこまりました」」」

そういうと、そこには俺たちを除くと誰もいなくなった。俺的にはとっとと帰りたかったんだが。

「そういえばリーダー、この後暇だったら俺の修練の相手して下さいよ」

「え、ずるい！それなら私も、私もしてよリーダー！」

ひとまず、修練ついでにこの調子に乗った二人もシバクとしようかな。

護衛の終わり（後書き）

はい、よくわからないかもしれませんが護衛もなんだかんだで終了。これからだんだんと面白くしていこうと思っていますので、乞うご期待。

修練

そしてホテルの一室に着いた俺たちは、荷物を置くとすぐにフロントで修練用の場所がないかどうか聞きに行った。

「それでしたら、裏庭は素振りぐらいのスペースはありますよ。それでもよろしいでしょう？」

「それでかまいません。ありがとうございました」

俺たちはすぐに、裏庭に歩いて行った。そこには模擬戦闘にもってこいの広さがあった。確かに素振りだけのスペースと言えるだろう。

「それじゃあ、模擬戦を始めるから準備をしとけ。といっても柔軟運動程度だがな。俺は結界を張っておく。周囲に影響を与えないようにな」

「「はーい」」

二人が柔軟運動をしている間に、俺は結界を張るためにぎりぎりの所に四枚の札を張りに動いた。四端にある木に張った。そして札に魔力を流し込み、結界を完成させた。よし、これで終わり。

「これで良し。それじゃあ、そろそろ始めるぞ」

「それで武器はどうするんです？まさか素手でする訳じゃないですよね？」

「当り前だ、武器はこれ。世界樹の枝から作られた剣と槍。これなら存分に振り回せるだろ」

「了解。ところでこれ、どんな結界なんだ？影響を与えないって言ったってどうやって？」

「この部分だけを異界につないだ。つまりいくら振り回してここを傷つけても、現実世界に影響は出ない、というわけだ」

二人に剣と槍を渡して、俺は二本の木刀を構えた。素手による近接戦闘は俺の得意分野だから、ひょっとしたら間違えて二人の武器を破壊してしまうかもしれない。それじゃあ、修練にならない。だから俺は、二番目に得意な双剣を選んだ。

そこから俺たちは修練を始めた。初めは軽めに、だけどだんだんと激しく動き始めた。周囲には俺たちの掛け声と、ぶつかり合う音が鳴り響いた。

「どうした！？動きが鈍ってきてるぞ！もう疲れたとか言ってくれるなよ？」

「当り前だろ。天心流剣術――――崩天黒刃！」

卓也は一本の剣で同時に三連撃を叩きこんできた。その剣撃を俺は全ていなし、容赦なく手首に一撃を叩きこんだ。

「隙が多すぎるぞ！次、来い月花！」

「分かってるよ！北竜葬送流槍術――――葬竜演武！」

槍頭と石突きの両方で俺にぶつけようとしたが、双剣を石突きの時にぶつけて体勢を崩した後、卓也と同じく手首に容赦なく叩きこみ武器を落とさせた。

「ほい、これで終わり。あのな、お前らそんな隙が多い技を使わなくてもいいんだよ。これが模擬戦だったからいいけど、もし実戦だったらお前らが攻撃を当てられてたのは手首じゃなくて頭か、体だ。いつでも隙は少ない方が良い。まあ、わざと隙を見せて挑発するって手段もあるけどお前らにはまだ早い」

「「はーい、わかりましたよ」」
「そうふてくされるな。前にやった時よりは技の連度も実力もはるかに上がってる。そう悲嘆に暮れることはない。ま、今のまんまじゃ俺から一本取るのには相当時間がかかるがな」

そんな事を話していると、突然俺が敷いた結界が壊れた。何事かと思ってそちらの方を向いてみると、そこには神崎さんが立っていた。

修練（後書き）

続けて書いてみました。いや、面白くなったと思うので楽しんでください。

では、また。（＞＿＜）／

EX・神崎視点

乾さんたちと別れた後、私こと神崎真由美は最上階のＶＩＰ専用ルームでくつろいでいた。今回私が日本に来た理由は、婚約者である九条泰斗さんと会うためだ。だけど、九条さんはとある事情でいま仕事に出ているのでここに到着するのは二、三日後になるらしい。

「それにしてもあの時のは一体……？」

乾さんと握手した時、乾さんに一瞬、それもぼんやりとだけど白銀の色の狼が見えた。おそらくあれが神喰狼（フェンリル）なんだろう。でも私に反応したって事は彼は――――――

「お嬢様、よろしいですかな？」

「ええ、構わないわよ。それでどうかしたの？ギルフォード」

「彼らの動向を確認してきました。彼らは今、ホテルの裏庭のスペースで模擬戦をしているようです。詳細はわかりませんが」

「ありがとう。それにしても分からないってどういう事？」

「結界を張ったようでして、その向こうが見えないのです。しかも、その結界も相当な強度を持っておりまして。気づかれずに突破するのは不可能と思い、戻ってきた次第です」

「どれだけの魔力を保持しているのでしょう？

ギルフォードの力を持ってしても、気づかれずに突破するのは無理と思わせるなんて」

「それはわかりかねますが。それよりもお嬢様」

「ん？何か言いたいことでもあるの？」

「はい。お嬢様は何故、彼にそこまで興味を示されるのですか？

確かにあの若さでＳランカーというのは珍しいですが、全くいないわけではございません。

それはお嬢様でもわかってらっしゃるでしょう。それなのに、なぜ？」

それは当り前の疑問でしょう。おそらく彼は私と同じ純血種。そうであるが故に、あのような光景を見せたのだろう。

「ギルフォード、私は神話や伝説の武器へとその姿を変える事ができるサルジストの純血種。
そしてここからは私の想像になりますけど、彼は、乾さんはおそらくサルジストの力をふるう事が出来るクラストの純血種です。その証拠に、彼は私の持つ力に反応した」
「なんと。まだ生き残っていたのですか？
それでは彼は、最後のクラストの純血種ということになりますが……」

そう。私のようにサルジストはまだ少ないけれど現存している。けれどクラストはサルジストなどと交りあうことで、その血の純血がいなくなった。純血種がこの三十年以上発見されなかったことで、クラストの純血種は絶えたのだと思っていた。でも、そうではなかった。

「それで彼らは、ホテルの裏庭にいるのね？」
「はい、そうですが……まさか彼らの所に行く気ですか？」
「そうよ。どうせこのまま待っていても暇だしね。どうせに、三日は来られないのだし」
「わかりました、が。行く前にその格好と髪をどうにかして下さい。乱れ過ぎです」

私はギルフォードの言うとおり髪を梳いて、服のしわを元に戻して裏庭に行くと、そこにはギルフォードが言っていた通り巨大な結

界が張ってあった。
その結界に指が触れると、途端に結界は壊れて驚いた表情で立っている三人がいた。あれ？

ＥＸ．神崎視点（後書き）

ギルフォードというのは、あの執事の事です。ついに１０００ＰＶ突破！

やったぜ、Ｖ！それじゃあ、また今度！バイバイ！（＞＿＜）／

喫茶店にて

ホテルにある喫茶店で俺たちは談笑していた。
結界を破壊された時は驚いたが、それは彼女の手に聖属性が混じっていたせいだった。俺がこの周辺に張った結界は闇属性。異なる属性の力に反発し、耐えきれなくなり壊れてしまったんだろう。
それでも、長時間触れていて砕けたならまだしも、彼女の顔を見るにあれはただ触れてしまっただけで壊れたという感じだ。どれだけ内包量と密度が高いんだよ。
もしかしたら、さっき来てた執事さんが何かしたのかもしれないけど……。

「それで、神崎さん。どうしてあんな所に？」
「え！？えーと、相手が来てなくて散歩をしてたんですけど……」
「要するに、暇だったんでしょ？」
「……はい。その通りです」

着いたはいいけど、相手が来ていなくて散歩してたら偶然ここに着いた、か。いや、違うな。彼女は俺の事を探っている感じがする。暇はその通りなんだろうけど、こちらの事も探ろうって感じか？
まどろっこしいのも嫌だし、ここはもういっそ単刀直入に言っとくか。

「それで？神崎さん、俺に何か用があるんじゃないんですか？わざわざ執事さんを俺にけしかけるぐらいなんですから」
「……気づいてらっしゃったんですか？あれでもギルバートは元Ｓ＋ランカーの実力者なんですよ？」
「それが何です？そんなことはどうでもいいんです。
大事なことは、貴方が俺にどんな用があるのか、という事なんです

から」
「……では率直にお伺いします。あなたはクラスト最後の純血種なんですか？」
……やっぱりその話か。結構うんざりするな。爺たちがこの情報は隠蔽してるけど、やっぱり純血種にはわかるのかな？
「その答えはイエスとノーの両方。確かに男でクラストの純血を継いでいるのは俺一人だ。
だが、人間の純血種が俺一人か、と訊くとそれは違う。俺には一応だが、姉と妹がいるからな」
「一応？どうして一応なんですか？」
「……姉貴はどこ行ってるのかもわからない。その上生存不明だし。妹に至っては、もう俺と同じ乾姓を名乗っていない。千葉家の養子ということになってるからな」
「数字持ち（ナンバーズ）。それも番外（エクストラ）ですか」
「そうだよ。俺が爺たちと相談してそうしてもらったんだ。俺はまだしも、あいつはまだ未熟。
俺の傍にいて狙われるよりは被保護者としては格式も高い数字持ち（ナンバーズ）、それも番外（エクストラ）の方が良い」
数字持ち（ナンバーズ）とは、名字の方に一から十の数字を持つ者たちの事だ。一桁の者はファースト二桁の者はセカンド、三桁の者はサードそしてそれ以上が番外、つまりエクストラとつけられる。
噂だけのレベルだが、番外の番外つまりオリジナルエクストラである零の位を持っている者がいるそうだという物もある。面倒すぎるぞ、この制度。誰が考えたんだよ。
「それは総局長の娘であるあなたが気にすることじゃないでしょう？」

「どうしてそんな事をあなたが知っているのです？」
「否定になっていませんよ。それは俺があなたの父である、神崎宏隆総局長と知り合いだから。何回かあなたのお話は聞いていますよ」
「……お父様はなんと仰っておられたんですか？」
「誰にでも気がきいて、そして優しい自分にはもったいない娘だと。でもただ一言、構えないのが残念だと。自分は仕事にかまけてあなたに構ってあげられなかったのが、残念だと言っていましたよ」
「そうですか。お父様はそんな風に……」
神崎さんは静かに声も出さずに涙を流していた。俺たちはそれを静かに眺めていた。

喫茶店にて（後書き）

はい、今日は土曜なので昼から投稿してみました。ここ最近は説明ばかりですが、そのうち派手なバトルも入れていこうと思いますのでよろしくお願いします。

それではまた後で。あるいはまた今度。さいなら～。＼（＞＿＜）／

模擬戦の前に

「それでどうしてこんな流れになるんですか？」

あの後、ひとしきり泣いた神崎さんは唐突に、稽古をつけてくれませんか？と言ってきた。そしていきなりさっきの裏庭まで引っ張り込まれた。卓也と月花もちゃっかりついてきていた。

「私、強くなりたいんです。今回みたいに誰かに頼るだけでなく、自分の身ぐらいは自分で守れるように」

「別にそんな事をする必要はないと思いますけど。人には向き不向きという物がありますし」

「それでも、力は持っていた方が良いでしょう？いざという時のために」

「否定はしませんけどね。こういうこともありますし」

俺が足を地面に叩きつけるのと同時、ナイフが飛んできた。だがそれは、俺の足元の影から出てきた者によって阻まれ、俺は手に籠手を纏わせて飛んできた方向の木を殴った。それによって生じた衝撃波で何本か先の枝に足をつけていた男は落ちてきた。

「ばれたからってナイフ投げなくたっていいじゃないですか。えーっと確か、ギルフォードさんでしたっけ？」

「……分かっておられたのですか？私がいたことを」

「もちろん、貴方の気配を立つ能力は素晴らしいの一言に尽きます。ですが、視線が強すぎます。

あれでは方向はわからないでしょうが、監視されているのがばればれです。

それと魔力の動向ぐらい気をつけましょう。俺が即時結界で大体半

径五百メートル程度の探査術式を使ったのにも気づかれていないようでしたし」
「「半径五百メートル！？」」

あれ？そんな驚かれるような事だっけ？……あ、そうだった。普通の術者でも即時結界の探査術って半径二、三十メートル位だっけ。いやあ、完全に忘れてた。

「直径一キロの即時結界なんて一花（いちはな）様だけの技だと思ってたのに、他の人にも出来たんだ」
「あんな超人と一緒にしないでください。あの人は訓練もせずに大規模攻撃魔術の展開までできたんですよ？しかも六歳で。いくらオーディンの魂を宿してるからってチートすぎますよ」
「チート云々はリーダーにだけは言われたくないけどね」

ええい、やかましいわ。一花とは一桁数字（ファーストナンバー）のトップだ。オーディンの魂を宿している魔術界の女帝。そして世界でも有数の実力者。ＳＳＳランカーだからな。ちなみにＳＳＳランカーは世界でも三人しかいない。
『一花（いちはな）』・『二木（ふたき）』・『三橋（みはし）』この三人だけだ。もうやばい。この三人が先頭に出るというだけで、もう絶望しか残らないらしい。いわば、最終兵器ってところかな。

「とにかく。いくら元とはいえ、こんな失態を犯してはいけないという事を言いたいんですよ。俺は」
「そうですね、わかりました。あなたもＳランカーとは思えませんが」
「それはもういいです。それじゃあ、始めようか神崎さん」
「はい、お願いします。私の事は真由美って呼んでくれませんか？」
「それじゃあ、真由美さんで。参ります」

俺は二本の木刀を構え、真由美さんはレイピアのような形をした木刀を構えた。そうして同時に飛び出した。

模擬戦の前に（後書き）

はい、同日連続投稿です。できればこのまま一、二話書きたいと思います。もう大奮発だー。というわけで楽しんでいって下さい。

模擬試合

同時に動いた俺たちだったが、先に機先を制したのは真由美さんだった。もう何がすごいって、その突撃力と剣捌きだね。一瞬で俺の懐に入って、俺の鳩尾の部分を本気で突こうとしてきたし。殺す気かっての。ま、全部弾いたんだけど。

「護衛されてる時から感じてましたけど、さすがに強すぎじゃありません！？開幕の連撃を全部弾くなんて！」

「そりゃこっちのセリフ。なんでこんだけの実力があるのに護衛なんかいるんだよ？」

「それは……私が魔術を使えないからで……」

「……」

なんじゃそりゃ。サルジストの純血種なのに魔術が使えないってどうよ？もしかして聖属性も自発的に使ってるわけじゃなくて、垂れ流し状態なのか？どんだけ内包量がとんでもないんだ？

魔術などの知識が世界的に知られることとなった現代において、魔術を使えない人というのは絶滅危惧種並みに稀少だ。火をつける魔法とかで使用されることもある。まあ、そのせいで犯罪も増えてるんだけど。

「初歩の初歩、火の術は使えますよね？」

「それが全然だめで……なんでできないのか分からないって先生に呆れられたぐらい」

「まあ、いいか。今は関係ないし。それで剣をより磨くと。それなら、もっとアクセルを上げた方が良いですかね？」

「そうですね。お願いします。手加減は抜きで」

「言いましたね？後悔しないでくださいよ？月並みなセリフではあ

りますが」

俺は体の中心に小さな炎をイメージした。これが普段の俺だ。そしてその炎の火力を段々と上げていく。そんな俺の気配をあやしく思ったのか、真由美さんはレイピアを構え猛攻を仕掛けてきた。

両腕、両足、右肩、脇腹、肋骨の部分。とてつもない嵐のような猛攻、だが一発一発の威力は小さく大したダメージにはならないが量が量だ。じりじりと溜まっていく。

そんな猛攻に耐えながら、炎をイメージし続けた。そしてそれが頂点に達した時、一気に爆発させた。それは俺の体の隅々まで肉体強化の術を掛ける物だ。これによって俺の身体能力は格段に上がる。普段の五倍ほどに。

いきなり俺の姿が消えたことに驚いたのだろう。真由美さんは周りを見回していた。さっき身体能力が上がると言ったが、俺が上げたのは脚力と感覚神経。それによって俺は今――――空中にいた。

いやあ、我ながら跳びすぎた。久しぶりすぎて加減が難しいな。神崎さんの五メートルほど後ろに着地すると、神崎は驚きながら振り返った。

「いったい何をしてたんですか？」

「ちょっとした術を体にかけてた。時間かかるからね、あれ。それじゃあ改めて、始めよう」

俺は強化された脚力で真由美さんに双剣で居合抜きをした。それを真由美さんはすんでのところで回避した。鋭いな。攻守は完全に逆転した。俺の文字通り嵐のような猛攻に、真由美さんは回避することで事なきを得ていた。俺の剣は真由美さんと違って重い。そんな物を連発されていたら相手としては、やっていられないだろう。

それでも何とかこちらの動きをつかみ、鳩尾を中心とし星の形で突きの五連発を浴びせてきた。そして鳩尾に掌底を食らわしてきた。

それは魔物用の魔術だった。星の加護を使い聖属性の掌底で相手の急所を突く。とんでもない技だ。
その技を放ったことで固まった真由美さんを魔力で吹き飛ばし、一本の剣を両手持ちにして大上段で斬りつけた。すると真由美さんの持っていた木刀が半ばで粉々に砕け散った。

「そこまで！勝負あり！」

月花の声が響きわたり、俺たちの模擬試合は終わった。ああ、体中が痛えなあ。

模擬試合（後書き）

はい連続投稿第三段！できたぜ！読んでくれる方も増えてうれしいです！

バンザーイ！というわけで次話でまたお会いしましょう！では！

模擬戦の後

模擬戦も終わり、俺たちはなぜか最上階の真由美さんの部屋に招かれていた。……何故？

「申し訳ない。お嬢様も手加減無しで挑みにかかりましたからな。これだけの傷を負う者も珍しいだろうと言えるぐらいの傷を負ってますよ」

「なんかいろんな所が痛いですから。肋骨が一本ぐらい折れてるか、ひびが入ってますね、これ」

「うっ！……すいません。ちょっと暑くなりすぎてしまって……」

「それはもういいですよ。あなたの強さもよくわかりましたし。あなたの剣筋は我流にしては洗練されているが、流派にしては粗すぎる。あなたの剣はあなた自身が作り上げた物なんでしょう？」

「はい。向こうでは趣味としてレイピアを習っていたんですが、学んでいく内に自分で技を作り上げてみたい、と思うようになったんです。それのほぼ全てをあなたにぶつけてみました。どうでしたか？」

「確かに強い。ですがやはり魔術が使えないというのはまずすぎます。おそらくあなたが魔術を使えないのは、無意識の内に魔力を聖属性に変換して垂れ流しているからです。だから必要な魔力が足りないんです」

「へ？私の魔力って垂れ流しの状態なんですか？」

「ええ。無意識下で行われてるせいで気づかないんでしょうね。そうですね……水門をイメージして下さい。魔力の運用というのは全てイメージで賄われていますから。次に垂れ流しの状態になっているそれを閉めて水を止めるイメージをして下さい。……はい、オッケーです。垂れ流しは止まってます」

「これで魔力が溜まっていくんですか？」

「そうですね。でも、そうそう全快になることはあり得ない。回復が早い人でもそうですね、大体三日程度かかります。あ、これはフェンリル所属の魔術師の基準ですから。
まあ全体量がわからないと、どうしようもないんですけどね？真由美さんは魔力の内包量とその回復速度は一線を介していると思いますけどね」

彼女は魔力をほぼ垂れ流し状態で過ごしているのにも拘らず、普通に生活している。魔力が枯渇すると、吐き気や嘔吐感に襲われる物だから彼女の魔力総量は計り知れない。
やっぱり純血種としての力が作用しているのかな？俺もフェンリル所属の魔術師の大体二十倍ぐらいあるって言われたし。

「それじゃあ、俺たちはこの辺で戻らせてもらいますね。卓也、月花行くぞ」
「「ういーす。了解」」
「え！？まだ傷は治りきっていませんよ！？」
「大丈夫ですよ。俺の力は少々特殊ですから。それでは失礼します」

俺達は真由美さんの部屋を出た後、卓也と月花は夕食を食べに行くと言っていたが、俺は辞退しては部屋に戻りベッドにぶっ倒れた。

今回の特務は色々あったな。まさかサルジストの純血種と会うことになるとは。ま、なんにせよめちゃくちゃ眠い。さっさと……寝ると……しよう……。そして俺は眠りについた。

模擬戦の後（後書き）

連続投稿第四段！残念ながらもう日は超えてしまったが大丈夫！まだぎりぎりセーフだ！それじゃ、また今度！（＞＿＜）／

去り際の一言

「そういえばリーダー。昨日リーダーの影から出てきたあの黒いのは何だったんです？」
「ん？」

翌日、俺と卓也と月花は朝食をとっていた。ああ、美味いな。この料理。いやあ役得、役得。朝からこんな美味い飯が食えるんだから捨てたもんじゃないな。

「ああ、あいつの事か。ちょっと待ってろ。もうすぐ説明してやるから」
「いや、それなら今すぐ説明してくれても……」
「何の話をしてるんですか？」
「おはようございます。真由美さん、ギルフォードさん」
「「おはようございます」」

二人はちょうど降りてきたようだ。ちなみに卓也飯を食うのに集中してるから、全然話に参加してこない。すると丁度よく注文していたステーキが運ばれてきた。するとそこにいた皆が怪訝そうな顔をしていた。

「朝からステーキですか？……胃にもたれそうですね」
「これを食うのは俺じゃないからいいんですよ。
……ほら、飯が来たぞ。そろそろ機嫌直せって。飯を一食抜いたぐらいじゃ死にゃあしねえよ」

俺が地面、というより自分の影を足でノックするように蹴ると、そこから黒い狼の形をした獣が出てきた。

出てきた時は不機嫌そうだったのに、できたてのステーキを見ると食べてもいいかと思念で訊いてきた。まったく現金な奴だ。俺がどうぞ、とジェスチャーをとるとむしゃぶりついていた。そんな腹減ってたのかよ。

「あの、リーダー？この黒い狼みたいなのは一体……？」
「俺の眷属。フェンリルってのは破壊と狼の象徴だ。お前の槍の素材であるオリハルコンを取りに行く最中にあったんだよ。
それでこいつらの一族と契約し、俺の影に住んでるんだ。俺の命令は忠実に訊くし、いい奴だぜ？」
「それは別にいいんですけど、大丈夫なんですか？魔獣を勝手に眷獣にするのは認められていないのでは？」
「あのな、お前らの武器を作ってから二年もたってんだぞ？ちゃんと登録してあるさ。
それに好き好んで狼を眷属にする奴はいない。たいてい器としての力が足りず、殺されるからな」
「召喚術者（テイマー）は？あいつらならできるんじゃないの？」

召喚術、それも魔術と同時に普及してきた物だ。今じゃあ、ペットとしての契約を交わす者もいるそうだ。まあ、そりゃ確かに生存競争が難しい自然よりは安定しているだろうけど……。

「召喚術者（テイマー）が好き好んで狼と契約するわけないだろ。あいつらは基本的に孤高の生物。
誰かに媚びる事自体が珍しい。お前、狼に真正面から睨まれて平然としてられるか？」
「無理です。だから狼を眷獣にする人って全然いないんだ」
「そういう事。食べ終わったな。それじゃあ戻って寝てろ。また仕事になったら呼ぶから」

黒狼はこくんと首を動かすと出てきた時と同じように、俺の影に戻っていった。そのころには俺たちも朝飯を食い終わっていた。俺たちは席を立った。

「それじゃあ真由美さん。ギルフォードさん。任務も完了しましたし、俺達は帰らせていただきます。花を踊らす風が、貴方にもとどかん事を」

「ええ。ささやかな陽光があなたたちを包みますように。お元気で」

俺は一礼をした後卓也と月花と一緒に部屋に戻り、荷物をまとめてチェックアウトして車に乗り込んだ。車を動かしてちょうど街と街の境目であるトンネルに入ったところで、月花が喋りかけてきた。

「さっきの花を～のあれにはどんな意味があったの？」

「前にも説明した気がするが、まあいいだろ。要するに健康でありますようにって意味の別れの言葉。

真由美さんが言ったのは、ささやかな陽光のような幸せが包み守ってくれますように、って意味だ」

「そうなんだ。……そういえばリーダー、めったなことじゃ名前を呼ばないのに珍しいですね。何かあった訳じゃないのに」

「……まあいいだろ。少なくとも彼女と俺がまた会うなんて確率としてはそう高くないだろうし」

俺のこの甘い考えが覆されるのは、そう遠い未来ではなかった。

去り際の一言（後書き）

昨日は結構な数の読者に来ていただいたのですごい嬉しいです。これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！

驚愕な一言

あの護衛任務から数日が過ぎ、俺はちょうど任務を終えて報告をしている時だった。花音ちゃんが端末に打ち込んでいた俺に話しかけてきた。電話を持って。何で電話なんか持ってんだ？

「あの、慎也さん。支部長からお電話ですが」
「ん～？はい、もしもし。ラーメン屋・楽軒ですがご注文は何でしょうか？」
「ラーメンと餃子二人前で。できるだけ早く頼むぞ」
「はい、かしこまりました――――――じゃねえよ！何ボケに乗ってきてんだよ、ツッコミいれるかしないならスルーしろよ！つい乗っちまったろうが！」
「お前さん結構無茶なことといっとるぞ？」
「いいんだよ、俺だから。それで？今度は何の用なんだ？」
「いいから支部長室に来い。お客さんもお待ちかねのようじゃしな」
「お客さん？また特務なのか？」
「まあ、その一環じゃな。早くこんと給料減らすぞ」
「ちょっとそれ職権乱よ――――――切りやがった。しゃあない。行くとするか」

俺は花音ちゃんに電話を返すと、端末の電源を落として支部長室に向かった。まさかこんな短期間で支部長室に二回も入ることになるとは。

支部長室の前にたどりつき、俺は二回ノックをして声をかけた。これはこの間と同じ。でもここからが違った。

「乾です。入室してもよろしいですか？」
「どうぞ。入ってきてください」

中から聞こえてきた声は真由美さんだった。あれ？また護衛の仕事？そんなわけないよな。あれ？何だろ？そんな風に疑問で頭をいっぱいにしながら、俺は支部長室に入室した。

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」
「数日ではそう変わりはしませんよ。真由美さんこそ今回はどういった御用で？」
「少しお話がありまして。どうぞ席にお掛け下さい」
「あ、これはどうも。……それでお話とは？」
「えーと、その……」

真由美さんが喋りにくそうにしているな。いったいどんな話なんだ？しばらく待っていると、真由美さんは意を決したかのような表情になって驚愕なセリフを放り出した。

「乾さん。私と婚約してくれませんか？」

ナニヲイッテイルンダロウコノヒトハ？

驚愕な一言（後書き）

昨日は諸事情により更新できませんでした。すいません！その代り今日は二つ更新するつもりです。よろしく！

事前交渉

「えええええーーーーー！？」

俺はすっとんきょうな声を上げていた。だ、だってしょうがないだろう！

いきなり『婚約してくれませんか』だぜ？しょうがないだろ！？

「おい、爺！これは一体どういう事なんだよ！？」

取り敢えずクソ爺――――もとい。支部長に助けを求めた。ところが支部長も顔が歪んでいた。

え？もしかしてあんたも、真由美さんがこんなことを言うとは思わなかった派なの？

「ああー。真由美くん？少し詳細を話してもらってもいいかの？」

「はい。乾さんはクラストの純血種だと訊きました。私もサルジストの純血種です。

なので、婚約して下さいませんか？と申したんです」

うん。見事に話がわからない。っていうか全然話がかみ合ってない。意味わかんねえ……。

「いやいや、待て待て。キミの婚約者は九条君じゃろ？他の男と婚約などできる訳ないじゃろ」

「婚約は解消していただきました。とある条件付きで」

「条件って何なんですか？」

「九条さんが今度行われるトーナメントで優勝したら、もう一度婚約関係に戻る、という条件です」

「というよりもなんで俺と婚約なんてするんです？
九条といったら一桁数字（ファーストナンバー）でしょう？
家柄もバッチリ、実力もあって言う事無しじゃないですか。なんでその婚約を断って俺なんかと婚約するんです？」
「あなたはクラストの純血種というのが、どういう意味か分かっていない。その血がどれだけ稀少か」

――――――ガンッ！！

俺は目の前にあった机を叩いて立ちあがった。ひょっとしてふざけてるのか？この人は？

「俺はこの血を保つための入れ物じゃない！俺は俺だ！
この血が滅びた処で、あなたにとってはどうでもいい事でしょう？
最初から無かった事になるだけなのだから」

「……すいません。失言でした。話はもう少しで終わりますから、もう少し辛抱していただけませんか？」

「それで、貴女は俺にどうしてほしいんです？俺にそのトーナメントに出ろとでも？あれは世界中の人が予選に勝ち残って出る物でしょう？今からでは遅すぎるでしょう」
「そこで支部長にお願いがあります。確か東京支部は前回の大会でベスト４に入っていましたよね？」
「ああ、そういう事か。ベスト４に入った支部は次の大会で一人だけ特別選手を選ぶ事が出来る権限を得る。それを使ってこやつを出せ、と？」
「はい。それにこの大会で優勝すれば、一桁数字（ファーストナンバー）の人に挑戦する権利を得ることができます。いかがでしょうか？出ていただけますか？」

「……やりましょう。優勝すれば俺は一花と戦える権利を得られるんでしょう？
それなら、俺は一向にかまいません」
「それでは交渉成立、という事で。ちなみに優勝したら婚約してもらいますから」

それは結構嫌なんだけど。まあ仕方ない。一花と戦う権利を得られならば、と俺はうなずいていた。結構嫌そうな顔をしながら。

事前交渉（後書き）

短いかもしれませんが二話目の連続投稿です。
ここからは～世界代表トーナメント編～の開始です。どうぞお楽しみください。

帰宅（1）

「それでどうしてこうなったんだ？」

話し合いも終わり、俺は久しぶりに家に戻ってきた。俺は基本的に家にいない。俺が受ける任務は、大体泊まりがけな物が多い。そこまでは別にいい。いつもの事だからな。

「なんであなたが俺の家にいるんですか！？真由美さん！」
「え？何かおかしいですか？」
「いやおかしすぎでしょ！俺とあなたは少なくともまだ、婚約者でも何でもないんですから！」
「じゃあ泊めて下さい。宿泊とかお世話になるつもりだったので」
「俺の家は宿泊施設じゃないんですよ！？」

何考えてるんだこの人は？あり得ないけど、もし間違いとかが起こったらどうするんだ？

それとも前の婚約者さんが相当な紳士だったのか？しかしギルフォードさんも止めるとかしようよ。なんで普通にＯＫ出しちゃってんの！？

そんな事を考えていると、玄関が開く音がした。このタイミングでドアが開くという事はまさか！？

「ただいま、兄さん。あれ？お客様？邪魔だったら部屋にひっこんどくけど？」
「頼むから残ってくれ。明美（あけみ）。後この人をお客さんとは俺認めてないから」
「ふーん。まあどうでもいいけどね。はじめまして、千葉明美（ちばあけみ）と申します。といっても旧姓は乾ですけどね」

「あ、これはどうもご丁寧に。はじめまして、神崎真由美と申します」
「もう聞いちゃいないな。神崎さん、客間でいいですか？基本的に用事があったら、明美に言ってください。俺は基本的に地下にこもってるので」
「地下？この家、地下もあるんですか？」
「正確に言うと地下じゃないというか……。それは置いといて、客間はこちらです。明美、お前自分の部屋片付けとけよ。お前この家に自分の荷物を送ってくるな。面倒だからな」
「でもあの家には置いとけないし。それにいいじゃん。もうすぐ私もこの家に戻ってくるんだし」

そういう問題じゃないんだけどな。俺の家はどこにでもありそうな二階建ての家だ。
ユニットバスに洗面所と客間。それに俺と明美と姉貴の部屋。もう使われてないけど、両親の部屋。あと台所と居間。他はほとんど物置状態だ。
そんな事を考えていると、客間に到着した。俺が客間のふすまを開けると、そこは和室になっていた。両親がこの家を建てる時に客間は和室にする、と言ってこうなったらしい。

「はい、到着。まあ、基本的に好きにしてもらっても結構です。なんせ全然使いませんからね。俺はお客さんとか基本的に呼ばないし、明美は千葉家に行ってますからね」
「あ、その事を聞こうと思ってたんですよ。どうして千葉家に行ってる妹さんが、この家に戻ってきてるんです？」
「この時期だからですよ。大事な行事があると、千葉家は忙しくなりますから。それで帰郷ってかんじで戻ってくるんですよ。それにもうすぐ期限ですしね」
「期限？何か約束でもしてるんですか？」

「明美が千葉家に行ったのは小学四年の時でその当時、俺は高校生でした。
俺の力と財力で二人分の学費を捻りだすのは不可能に近かった。
そこで俺が大学を卒業し、社会人となって養えるようになったら、明美を乾家に戻すっていう約束をしたんですよ」
「なるほど。あれ？でも確かお姉さんがいらっしゃったのでは……？」

言えないよな。もうその当時から行方不明だったとは。正直な話、行方不明なのはいつもの事だったから捜索願とか出してないしな。たまにふらっと絵手紙をよこすけど、それどこのだよみたいな絵手紙だからな。ぶっちゃけ全然場所がわからん。
そんな事を考えていると、ちょうどチャイムの戸が鳴り響いた。宅配便かなんかか？

「兄さーん。お客さんだよ。それも超大物」

は？超大物のお客さん？しかも俺に？いったい誰だろうと思いつつ、俺は玄関に向かった。

帰宅（1）（後書き）

全く関係ない話が後もう少し続きますがご容赦ください。もう数話で戦闘シーンも入れていきたいと思います。それでは後程、また会いましょう。では！

帰宅（2）

「なるほどな。確かにお前の言う通り、超大物だったな」
「でしょ～？いやあ、ドアを開いたときは驚いたわよ。え！？なんでここに！？ってかんじでさ」
「それでどうしてあなたたちがここにいるんです！？一花さん、二木さん、三橋さん！」
「え？一度君の家にって見ようかなと思ったから」
「まずい物でも置いてあるのならまだしも、別に構わないだろう？」
「それに連絡なんか入れたら、断られるのは目に見えているしサプライズ的な？」

なんだその理由は……。この三人は一桁数字のトップ。ＳＳＳランカーだ。
前に説明した一花花連さん。二木御剣さん。三橋白枝さん。この三人だ。
基本的にこの三人が戦闘に出てくる事はない。ほとんど行事ごとにしか出てこれない。いや、出れないと言った方が正しいか。力が強大すぎて同じ前線に建てる人がいないからだ。
三人は神の魂をその身に宿す者だ。
一花さんは北欧の主神、オーディンの魂を。
二木さんはギリシャ神話のオリュンポス十二神のトップ・ゼウスを。
三橋さんは日本神話のトップ・天照大神を。
それぞれの魂を宿している。そして前に単語だけ出てきた神話兵器も持っている。
一花さんはグングニルとニーベルングの指輪を。
二木さんは雷霆と金剛の鎌を。
三橋さんは天叢雲剣を。それぞれ持っている。

「それで部屋はどうするつもりなんです？この家に三人も泊める部屋はありませんよ。客間は真由美さんがいるし」
「それなら花連と白枝を神崎嬢と一緒に客室にして。私がお前の部屋で寝る。これでどうだ？」
「どうだ？じゃないでしょ……。客間はあいにく二人までです。そこまで広くないし」
「それなら妹君か姉君の部屋に分けるというのは……」
「明美の部屋は荷物満載だし、姉貴の部屋はそもそも俺じゃ開けられない。なんか術式かけてるからな。そうでなくても入ろうとは思わんが」
「それではどうすればいいのだ？」
「出て行ってもらうのが一番早いんですが……。しょうがない。あの部屋を開けるとするか」
「あの部屋とはどの部屋の事だ？」
「今は亡き……両親の部屋ですよ。掃除以外では開けたことないんですけどね」

俺は一花さんと三橋さんを両親の部屋まで案内した。両親の部屋のドアに手を掛けると――――――

――――ドクンッ！！！！

きたよ。この肺を絞められる感じ。両親を失われた時から出てる俺の発作だ。その息苦しさを意志の力でねじ伏せ、ドアを開いた。
そこには少し埃っぽいが、それでも昔と同じ状態であった。俺は少し安堵しながら、三人を招き入れて即座に部屋を出た。同時に発作も止まった。

「どうかしたんですか？」

「ちょっとした発作でね。息できなかったんですよ。ちょっと待って下さい」
「うん。それでここ使ってもいいの？」
「……構いません。使われた方が両親は喜ぶと思いますから」
「できるだけ、そのままにしておくね。ここは時間維持の魔術がかかってるから無駄みたいだけど」

分かってたのか。さすがだなと思いつつ、なぜか俺は気を失った。

帰宅（2）（後書き）

二番目の投稿です。面白いとよいのですが。それではもう一、二話upしようともいます。では。

地下施設

眼を覚ますとそこは、居間のソファの上だった。意識を失う寸前の事を思い出し、ため息をついた。体を起こすと、明美が立っていた。

「起きた？兄さん」
「なんとかな。俺どんぐらい寝てた？」
「一時間ぐらいだよ。もうすぐご飯もできるから早く動いてよ」
「ご飯？誰が作ってるんだ？お前……なわけないか。それじゃあ二木さんか？あの人の料理めちゃくちゃ美味いからな」
「本人を目の前でそこまで言わなくてもいいじゃん。作ってるのは三橋さんだよ。試食させてもらったけど、なかなか美味しかったよ」

あの人料理できたんだ……。俺はなぜかそんな微妙な所にショックを受けていた。そして食卓の方を見ると、確かに食欲をそそる匂いがした。これは期待できるかもしれないな。

そんな事を考えていた数時間後、俺はコーヒーを淹れていた。めちゃくちゃ美味かった。二木さんのと遜色が無いぐらい美味かった。

俺は淹れたコーヒーを持って階段の最初の段の所で止まり、地面を叩いた。魔力を纏わせてな。すると地面から不思議な扉が出てきた。そこをくぐると、俺の研究施設がある。

あの扉は、この地下の空間のゲートの役割を担っている。このゲートを出現させるには、ある一定量の魔力を纏わせて地面を蹴る必要がある。多すぎても少なすぎてもだめ。通った後には、あのゲートは消える。

俺はコーヒーをすすりながら研究所の扉を開けて椅子に座った。目の前に置いてある資料を眺め始めた。ついこの間、支部長にもらった資料だ。タイトルは『新魔法の開発の危険性について』。

ここは別に俺が作った訳じゃない。ここを作ったのは俺の両親、乾莞爾（いぬいかんじ）と乾瑛美（いぬいえいみ）。両親はとある魔術の研究の為に、この研究所を作った。

俺がちょうどコーヒーを飲み終えたころにゲートが開き、明美が入ってきた。何の用だ？

「兄さん、ちょっといいかな？」

「ん～？何か用か？明美。っていうか皆には伝えてあるのか？ここにいるって」

「もちろんしてきたわよ。それでさ、ちょっと相手してくれない？どれだけ兄さんに近づけたか、知りたいし」

「構わんぞ。武器は持ってきてんのか？」

「模擬戦みたいなものなんだから、木刀でいいでしょう？」

「真剣で来られても困るがな。多分折っちまうから」

俺は拳から音を鳴らしながら、修練場に向かった。明美は木刀を下げながらついてきた。

地下施設（後書き）

はいここまで行きました。次の話では妹・明美との試合です。最も試合では終わりませんが。（にやり）というわけでお楽しみに！

妹との対戦

「それじゃあ準備はいいか？」
「いつでもＯＫだよ。兄さんこそ籠手と木刀だけでいいの？」
「まずは様子見。前は開放させるまではいたらなかっただろう？お前がどれだけ成長したかも知りたいしな」
「その考えをすぐ否定させてあげるよ」

俺は木刀を二本と籠手を顕現させ、明美も木刀を二本構えていたが、こちらは背中にさらに二本引っさげていた。どれだけ使う気だよ。

俺たちは同時に構えてそれから一分近く、固まったままだった。動き出したのも同時だった。

俺は単純に振り下ろし、明美は突いてきた。力のかかるところを突かれた所為で、俺の態勢が崩された。

こんな隙だらけな状態を攻撃しないわけがない。予想通り明美は突っ込んできた。俺はバックステップの要領で蹴りを顎に叩きこもうとした。

もちろん千葉家でてほどきを受けているんだろう。地面を蹴って後ろに下がってかわした。面倒くさいな。

「さすがは『天皇剣（てんおうけん）』と恐れられてる千葉家だな。戦闘をよく理解してる。あそこに住んでいるのは伊達じゃない、ってことか。成長してるよ。確かにな」
「いや、普通に攻撃してる人に言われても説得力無いし。それに顔が余裕で満ち溢れてるよ」
「この程度で一撃もらうような、甘い鍛えかたはしてないからな。それにしても楽しいな。まさかここまでしてやられるとは」

俺はもう一度動き始めた。さっきは直線だったが今度はジグザグに。あいつにはもう、俺が地面を蹴っている所しか見えていないだろう。今回は身体強化の術をかけているからだ。
俺は強烈な突きをものすごい速度で放った。ぎりぎりの所で気づいたんだろう。木刀で受け流しつつ、もう一本の剣で撃ちこんできた。
確かに技術としては凄い。だが、そんな物を俺が許すわけがない。膂力だけで吹き飛ばした。その勢いに乗り、一気に後ろに後退した。
「兄さんいきなり本気出し過ぎだよ。左手痺れちゃったよ。これは私も本気を出さないわけにはいかないね」
「ほう、俺に手加減できるぐらい余裕だったと。それならもっとギアを上げた方が良いかな？」
「そういう問題じゃないんだけど、ね」

何をするかと思えば、背中にかけていた二本の木刀と片手に持っていたものと吹き飛ばされたもう一本が震えだし、明美の両手に集まりだした。ちょうど獣の爪のように。
おそらく魔力で連動させてるんだろう。そしておそらくその剣の軌道は自由自在。どうやっても読めないだろう。なるほど確かに剣士にこれは致命的だな。突き、払い、薙ぎ、捌く。これがより難しくなるのだから。

「だけど甘い。その程度分からない筈が無いだろう。天衣無縫と謳われていた母さんに剣を教わっていた俺が」
「そうだね。私も兄さんも母さんと同じ千葉家の血が流れてる。そして母さんはその純血で歴代最強の剣士だった。その母さんに直接教わっていた兄さんにはぬるいだろうね。それでも！」
明美は剣を連続で撃ちこんできた。俺はその全てを弾き続けた。

そして千日手のように果てしない打ち合いが続いた。だけど、体力ではなく振るっていた剣の方に限界が来た。
そりゃあ、本来の剣の二倍だからダメージ量が蓄積されてだろう。俺の力を受け止めてるってのもあるしな。俺の木刀の両方ともがほぼ同時に砕け散った。
好機と見たか、俺に同時に打ち込んできた。俺は鎧を顕現させて同時の攻撃を全て捌いた。まさか全て捌かれるとは思っていなかったのか、隙だらけになった。
俺は拳の力で空間をふるわせることで、明美を気絶させた。ふう、まさかこんな力を使うはめになるとは。俺は気絶しているが、楽しそうな顔をしている明美の頬をなでた。

妹との対戦（後書き）

はい、兄ＶＳ妹の構図でやってみました。最後が簡単すぎるだろとか文句はあるでしょうが、楽しければそれでよし！なので面白ければＯＫです。できればもう一話できればいいなと思います。では！

家族の談話

「あれ？ここは？」

俺は研究室のソファで寝かせて、俺は資料を読んでいたんだがどうやら起きたようだ。

「起きたか。具合はどうだ？」
「あ、兄さん。ちょっと気分が悪い以外は何もないよ」
「それならよかった。ほい、ちょっと冷めちまってるが紅茶だ」
「あ、ありがとう。……ところで兄さん。最後に使ったあの技は何？」
「ああ、あれか。あれは震脚の要領で作った技なんだがな。そうだな『空震』ってところかな？」
「鎧通しじゃないから何かと思ったら、新技？全くあきれちゃうわね」

声は軽いけどな。こうして明美と試合をするのは、正月以来だ。丁度今は五月。大体四カ月ぶりってところか。……あんまり時間経ってないな。

しかし千葉家に預けたのは間違いじゃなかったか。ここまで育つとはな。あそこは政治にあまり興味が無い。番外（エクストラ）と呼んでいるのも外部だけで、あそこの本来の呼び名は『天皇剣』だしな。

「お前こそなんだ？あの技は。柄尻と魔力によって連結されてるところはわかったんだが……」
「大体それで正解だよ。あとは私の技量の問題になる、って言われたしね。まあ、兄さんの鎧姿も見れたし、これはこれで満足だけどね」

「そうかい。お前に鎧姿を見られる日が来るとはな。これも時の流れってものなのか」
「兄さん、ちょっと爺くさいよ。そんなこと言ってると禿げるよ？」
「禿げねえよ！全く失礼な奴だな。それでもお前は強くなったよ。母さんだって誇らしく思ってるさ」
「……ほんとにそう思う？」
「思うよ。俺が母さんや父さんの事で、嘘なんかつく訳無いだろ。お前は誇っていいんだよ」
「……うん」

そういうと、明美は静かに泣き始めた。俺は隣に座って静かに頭をなでた。すると声を上げて泣き始めた。それでも俺は静かに撫で続けた。

◆◆◆

「ありがとう、兄さん。いま思い出したけど、私今度のトーナメントに出るんだ。よかったら見に来てね」
「それ、俺も出る事になった。とある依頼でな」
「それじゃあ、もしかしたら予選で当たるかもしれないね」
「いや、それはない。支部長推薦で予選突破のシード状態から始まるらしい」
「ええー。なんかずるーい。それ誰からの依頼なの？」
「さすがにそれは言えないな。まあ、お前の試合は応援してやるから。頑張って本戦まで残れよ」
「ぶうー。分かってるよ。兄さんも本戦で負けないようにね！」
「俺が負ける訳無いだろ。優勝者にはエキシビションマッチの権利が得られるらしいからな」
「エキシビションマッチって……やっぱり一桁数字（ファーストナンバー）の？」
「そりゃそうだ。俺がそれ以外で燃える訳無いだろ？」
「ああ、そりゃそうだね。やっぱり本命は一花さん狙い？」
「あの人ほど強いのはそう多くいないしな。当面やっぱり一花さん

かな」
「ふーん。まあ頑張って。それじゃあお先に。おやすみ」
「ああ、おやすみ。お前明日学校だっけ。それじゃあ朝食用意しといてやるよ」

わーい、とか喜びながらゲートを開いて帰っていた。俺はこの後、日付が変わるまで研究室にこもって魔術の研究をした後、自分の部屋に戻って寝た。ちょっと二木さんを蹴ってしまった事は秘密だ。

家族の談話（後書き）

今日はこれで終わりですが面白かったらいいな、と思います。それではまた明日も頑張っていきましょう！僕も頑張ろうと思いますので。では！（＞＿＜）／

予選初日

あれから数日が経ち、この日を迎えた。そう。トーナメント当日を。とはいっても今日は予選だけなんだけど。

「皆さん、お待たせいたしました。ここに世界代表トーナメントの開会を、宣言致します！」

「「「ウオオオォォォオオーーーーーーーーッ！！！」」」

こういう行事ごとの為だけに作られた国立の特別ドームに、もう隅から隅まで人、人の山だ。ちなみにこのドームは最高十万人近くの人を収容できるらしい。

そんな事を言っている俺は現在、特別選手用の席に着いていた。今日一日、ここから見ていろとの御達しだ。面倒だな。

「面倒くさそうな顔してるね。そんなにここに居るのが嫌なのかい？」

「確かに面倒だけど、別に嫌って訳じゃないよ。そういうお前は平気なのかい？レジル」

「そりゃあ僕だって暇だけど、まあ役得って事でいいんじゃない？こちらの手の内を明かさずに、相手の実力がわかるんだから」

「何か黒いぞ。大体ここに選ばれる人間は、そもそも能力も実力もばれてるだろう。

なあ、そうじゃないかい？『四元素（フォースエレメント）』殿？」

「その呼び名は嫌いだよ。そんなこと言ってるなら僕もこう呼んじゃうよ？『白銀の神狼』君ってさ」

「ああ、それは御免だな。ところでどうしてここに俺ら三人しかいないと思う？っていうか黙ってないでお前も喋れよ。ジェルザ」

「別にいいでしょ？静かにしてたって。っていうかレジルはまだし

も、なんで慎也もいるわけ？」
「……ちょっと事情があってな。そこはあまり突っ込まないでくれ」
「そう。それなら構わないわ。もう始まるわよ。ちゃんと見てなさい」
「ヘイヘイ、わかりましたよ、っと」

この二人は前回大会で四位と三位になったレジル・ハルベスと、ジェルザ・ヘレウス。とある任務で一緒になって、そこで話して意気投合した。今じゃすっかり友達だよ。
レジルの二つ名は今説明した通り『四元素（フォースエレメント）』。四元素、つまり炎、水、風、土の属性を自由に操り、混合させたりして使う所からその二つ名がついた。
ジェルザは『黒銀鉄鎖（フェルミウヌルナ）』。文字通り黒銀色の鎖をもう自由自在に操る技術を有している。
俺はもうまんま過ぎだろという『白銀の神狼』だ。俺が鎧を纏って走る姿から、神喰狼（フェンリル）が連想で来たから付いた、そうだ。そりゃ神喰狼（エンリル）身に宿してますから……。
予選はバトルロワイヤルによる数減らしと一対一の試合形式のこの二つを行うらしい。この予選参加者、千人ほどいるらしいからな。縛りが特に無い所為らしいが。

「お、彼女とか強そうだね。あそこで双剣使ってる彼女」
「ん？……ああ、ありゃ俺の妹だ。おい見ろよ、あの盾持ち。ひょっとして『無敵防御（ガードナー）』じゃないか？」
「え？あ、ほんとだ。彼の防御破るのって難しいんだよね。ああ、可哀そうに。向かっていた人達皆、吹き飛ばされてるよ。あれ攻撃全部跳ね返すからなあ」
「ある意味チートだよな。まあ跳ね返せるのが物理攻撃だけなのが唯一の救いだが……」
「そうだねえ。ねえジェルザ、あれ誰かわかる？あの黒い剣振るっ

てるの」
「あれは『黒帝剣』でしょ？さすがは世界代表トーナメント。今年は一段とレベルが高いわね」
「ああ。ざっと見ただけでも、有名な奴らが大量にいるし。これ何人になるまでやるんだっけ？」
「確か僕たちシード組合わせて三十六名だから……三十二人だね」
「この分なら早く終わりそうだな。本戦の方が時間かかりそうだし。予選三日、本戦を一週間ぐらいかけてやるんだっけ？」
「そうね。そうそう簡単に負けないでよ？あんたらと戦える機会なんてそうそう無いんだから」
「「もちろん。あたりまえだろ（でしょ）？」」

俺たちは予選の観戦を尻目にこんな約束をしていた。結局この日は最後まで、最後の残る一人は来なかった。いったい何があったんだろ？

予選初日（後書き）

できるだけ毎日一本のペースで書いていこうと思いますので、よろしくお願いします。昨日のユニーク数が百人を突破して気分がハイになってるあかつきいろです。

そんなわけで始まりましたよ、世界代表トーナメント。主人公や仲間たちの活躍を描いていこうと思いますので、どうぞお楽しみください。それでは、アディオス！

本戦第一回戦（1）

あれから二日後、つまり本戦の日を迎えた。俺たち三人は一緒に会場に入った。

「予選を突破し、この本戦を迎えた三十二名がここに揃いました！」

「「「ウオオオォォォォオオオオォーーーーーーー！！！」」」

予選でも思ったけど、盛り上がり過ぎじゃね？いくら三年に一回しか無いとはいえさ。初め訊いた時はオリンピックのパクリか！と思ったが。

俺たち三人と、観戦会に来なかったシード組最後の一人、なんでもその人が九条――――つまり、真由美さんの元婚約者らしい。名前は確か泰斗（たいと）だったかな？四人が指定の位置に立った。

すると、床が光り始めA～Dまでの文字がランダムに表示され始めた。なんだこれ？

一分後には文字の動きが終わり、俺の足元にはCの文字が表示された。レジルはD。ジェルザはA。九条さんはB。

「各ブロックのシードが決まりました！

Aブロックのシードはジェルザ・ヘレウス！Bブロックのシードは九条泰斗！

Cブロックのシードは乾慎也！Dブロックのシードはレジル・ハルベス！」

一つを読むごとに歓声が上がった！そんなに声を上げられるほど有名か？そして残り三十二名のブロックの抽選が始まった。今日はAブロックの一回戦をやるらしい。

俺はのんびりさせてもらうとしようかな。ゆっくり見せてもらう

とするさ。そんな事を考えていた俺の目の前に人が立っていた。

「何か俺に御用ですか？九条泰斗殿？」

「その話し方は癇に障るな。止めてくれるかな？」

「それは構いませんが。それでどんな御用なんでしょうか？」

「いえ、ただ私と争う事になるライバル殿の顔を拝んでおこうと思いまして」

「そうですか。それでは失礼します」

「ええ。……貴方にだけは決して負けません」

好きにしてくれよ。俺にとってはそんなことはどうでもいいんだから。ただ俺の目指す物は優勝して一花さんと戦う。ただ、それだけなんだから。

「始まったか？一回戦」

「もうすぐだよ。それにしてもいったい何したのさ。あの……九条君だっけ？ライバル指定されるなんてさ」

「ちょっとした私用だよ。それで一回戦の相手は？」

「千葉家と八市（やつし）家の次期党首同士の対戦だよ。剣の一族と風の一族同士の対決だ。初っ端から面白くなりそうだね」

「番外（エクストラ）と一桁（ファースト）同士の対決か。そりゃ面白そうだな」

八市（やつし）家が風の一族と呼ばれているのは風を読むのが上手く、弓矢の技術が半端じゃ無かったからだ。だがバトルフィールドには風が無い。そう思っていたら……

「え？戦闘って異界でやるのか？」

「そりゃそうだよ。この大会はあくまで実践としての技術を図るのが目的なんだから。それにこのまんまじゃ千葉家が有利すぎでしょ」

「そりゃそうだが……なんだかな？」

「ほらもう始まるよ。これを見ない手はないでしょ」

えーっと、フィールドは草原？これは八市家の方が有利過ぎじゃないかと思ったら、千葉家の次期党首……確か竜次だったか。開幕当初に草を全部切り払いやがった。つくづく思ってたがバケモンだな。

八市家の方は女性で佳奈実って名前だった。佳奈美さんは懐から一本の弓を取りだし、それを展開し始めた。そんな隙だらけの状態を放っておく訳が無い。竜次君は走り出した。

すると地面に魔法陣が展開され、そこからまるで台風のような烈風が吹き乱れた。当然、竜次君は後ろに下がったが瞬時に考えを変え、烈風に向かっていき風の魔法をぶった斬った。

「うわあ。あんなのあり？」

「刀剣を持たせれば千葉家の人間は全員化け物だからな。あれぐらいの芸当、訳ないさ」

「それにしたって魔術を斬るなんて、僕にも出来ないよ？」

「お前何さまだよ……。あそこの人間を同格で見ない方が良い。あそこの鍛錬はアホみたいに刀剣にどっぷり浸からせるからな。あそこの党首にはいまだに勝てない」

「ところで八市家の人が出した弓って神弓（シンクン）かな？」

「間違いないだろ。韓国と朝鮮の伝承を持つ弓。これは予想以上に面白くなりそうだ。

あの刀はおそらく祢々切丸だ」

「勝手に出て行って妖怪を斬り殺すことで有名な？」

「そっ。でも、あの刀は退魔の力が強い。魔力で作られてる魔術は、相性が悪い」

はてさて、この戦いの行く先はどうなるかな？

本戦第一回戦（1）（後書き）

「そういえば慎也」
「なんだ？」
「ジェルザはどこにいるの？全然姿が見えないんだけど」
「……お前、それジェルザに会っても言うなよ？」
「なんで？……あ」
「思い出したか？あいつなら多分、トイレでうずくまってるのを」
「そういえばジェルザってめちゃくちゃプレッシャーに弱かったよね」
「「……」」

本当に大丈夫かな？あいつ。

本戦第一試合（2）

剣と弓の激突は続く。神弓（シンクン）と祢々切丸。どちらもそれなりに有名な武器なだけにスペックはほぼ互角。後は持ち主の力量の勝負。

「魔力を乗せて撃ってるね。普通ああいう類のは加速されてるから、弾ける訳無いんだけどな。見事に弾いてるよね、彼」

「だから同格視するな、って言ってるだろ？彼の持ち前の動体視力だろう。あそこは感覚に頼る人が多いからな。そこを潰されたら終わりだ。それでもどうにかしちまうこともあるんだよな」

「まあ近づいてもかわされてるしね。そろそろ終わりも見えてきたかな？」

「さあな。ただ言えるのは……」

「言えるのは？」

「そんな簡単に終わるほど、千葉家の剣士は甘くないってことだ」

事実、矢の感覚も掴んできているんだろう。捌く技術が上がってる。突然竜次君が加速しだした。捌くのを止めて攻勢に転じるようだ。

もちろんそれを黙って見過ごすほど、佳奈美さんも甘くない。三本を同時に引き絞り、放った。もちろん魔術を掛けて。

竜次君がそれを切り払おうとすると、矢が勝手に動き剣撃をかわした。無理矢理体勢を変えて、矢をかわしたのはいいが、その矢が追ってきた。

「まさかあれは、追尾術式？そんな馬鹿な！？」

「現代の魔術の技術で不可能とされた追尾術式……。それを開発したっていうのか？そんな事が出来るほど八市家の技術水準は高いのか？」

「それでもだよ！いくら技術水準が高かろうと、魔力の持続性の問題で術式は完成してないんだよ！？それなのに、どうやって解を見いだしたって言うんだよ！？」
「とりあえず落ち着け。何かヒントがあるはずだ。何か……」
竜次君が肩口に目を向け、何かに気づいたような顔をした後矢に当たる寸前で刀を振った。そしてそれをかわすと、矢は竜次君の後を追ってこなかった。

「まさか……」
「何かわかったの？」
「あれは追尾術式じゃなくて、ワイヤーか何かひっかける物で追いかけてただけなのかもしれない。
追尾術式は無くても、その速度を維持し続ける事だけならできる。そうだな？」
「ああ、うん。でも盲点だったね。まさかワイヤーの類を使うなんて……」
「確かに戦術を試すにはいい技だな。たいていの奴はお前みたいに動揺して、その間にやられちまうからな。ある意味で千葉家が刀剣一択だったのが良かったな。魔術を下手に齧ってたらやられてたぞ」
「うん。二人ともすごいよ。そんな案を実行する八市家の人も、それを見破った千葉家の人も」
「今回は確かにレベルが高い。こんなのが一回戦から当たるんだからな」
竜次君が足に力を込めていた。何かと思ったら肉体活性の術式を使いだした。って、はあ！？
「なんで魔術使ってんだよ！？」
「確かに。一回戦から驚きの連発だよ。二人ともすごすぎ！」

一気に距離を詰め、竜次君は一応刀の刃は刃抜きしているとはいえ、あれだけ強烈に叩きこめば肋骨の一本は少なくとも折れているだろう。

これで一回戦か。これは今回の大会、参加できてよかったかもしれないな。

本戦第一試合（２）（後書き）

もう今日中にもう数話ＵＰしますので、よろしくお願いします。トーナメント編、本格的に始動し始めました。面白いと思ってくれるといいな、と思います。では。

Aブロック終了

本戦の最終試合は明美とナルジア・ヘクセン君だった。

「妹君だったっけ？あの子」
「ああ。まあ、相手の力量を見る限り大丈夫だろ」
「あれ？結構余裕だね。っていうか相手の子の試合、見てたの？」
「うんにゃ、見てねえよ。でもわかるよ。ちゃんと視てれば、な」
「なるほど。彼の覇気を見ていた、と」

まあ、そうでなくても実力が伴っていないのはわかる。いや、ここに残るぐらいだから強いんだろうけど、明美と同等とはいえない。明美は試合開始と同時に攻め立てた。ナルジア君は槍使いらしく明美の剣戟の全てを辛くも凌いでいる、という状態だった。ありゃあ、長くは持たないな。

「あ、吹き飛ばされた。残念だったね。昨日の疲労が取れてないのかな？」
「そうだとしても負けてちゃ話にならねえだろ。っていうかほんとにあいつ戻ってくるのか？
今日あいつの出番が無いのひょっとして忘れてんじゃねえの？」
「ありえるありえる。でも、別に問題無いんじゃない？残らなきゃいけない、なんて取り決めは無いんだから」
「それを考えると、俺らはよほどの暇人だよな。ずっとこんなところに残ってるんだからさ」
「別にいいんじゃない？そのぶん面白い試合も見れたし±０ってことで」
「ん？試合終了の笛がならないぞ。何やってるんだ……って、え？」

なんと試合はまだ続いていた。ダガーを二本持って明美と打ち合っていた。その剣捌きは素晴らしく美しい、の一言に尽きた。でも……。

「ただ綺麗なだけだ。実力は変わらないな」
「うん。それよりは彼女の剣舞のほうが綺麗だし。全体的に負けてるよね」
「ああ。最後にあいつの剣舞を見たのは一年も前だけど……やっぱり綺麗になってる。あんだけ綺麗だとはな」
「妹さんが成長した姿はどう？」
「あいつは俺や母さん達の誇りだ。よかったな、と思うさ。あの時あいつを千葉家に預けたのは間違いじゃなかったんだ、と思うよ」

最後は側頭部に蹴りが入って相手が気絶して試合終了。あいつが笑顔で手を振っている姿を見ながら、これまでの色々な事を振り返っていた。

あれから五年、いろんな事があったけどここまで来た。それは無駄じゃなかったんだと思う。俺はもっともっと強くなる。俺の身の周りの人ぐらいは、守れるようになるために。

そう決意を改めながら、俺は自慢してくる明美を連れて家に帰った。

Aブロック終了（後書き）

はい本日三番目のＵＰでした。楽しんでもらえていますか？それでは次の話を書こうと思います。では。

あ、祢々切丸はジャ〇プの某作品の影響で出したわけではありません。あしからず。

その日の夜

「ねえねえ兄さん。私の活躍はちゃんと見ててくれた？」
「見てたって。でもなあ、いかんせん相手と実力差があり過ぎだな」
「あ、やっぱり？なんか弱いなあって思ったのよね。失礼だからその場では何も言わなかったけど」
「控え室に着いたらぼそっと呟いたんだろ？」
「イグザクトゥリイ！分かってるじゃない、兄さん」
「まあな。家族なんだからそれぐらいわかってるって」

その日の夜、俺は明美と居間で喋っていた。俺の家の風呂は異界に繋いでいるから結構広い。
二木さんは武器――――――金剛の鎌の手入れをしている。残りの三人――――――真由美さんと一花さんと三橋さんは今風呂（っていうかもう温泉）に入っている。明美も入っていたんだが、先に上がったらしい。
俺はというと、紅茶を飲みながら菓子を摘まみつつ小説を読んでいた。もちろん俺だって読書の一つや二つはする。とはいっても基本的に薦められた物だけなんだが。
そしてちょっと読んでいると、明美に紅茶を淹れてくれとねだられたので、淹れてやった後今の状態に至る。

「「「上がりましたーー」」」
「やあ、湯加減はどうでした？」
「気持ちよかったですよ。でも、いつも入ってるわけじゃないんですよね？異界だから電気代とかかからないし」
「ええ、まあ。俺はいつもこの家に帰ってきてる訳じゃありませんから。気にいってもらえたのなら何より、ですけど」
「いいなあ、あそこ。なんというか肩こりみたいな物が無くなって

いくし。何より、気持ちいんですよねえ」
「そうそう。あれで全然使ってないだなんて勿体なさ過ぎですよね！」
「確かに。まあ、この家に戻ったら存分に使わせてもらうよ。今から楽しみになってきたなあ」
「明美ちゃん、ずるーい！私ももっと入りたーい！」

なんじゃここは……。面倒だな、と思いつつも何も言わずに黙って俺は紅茶を飲んでいた。空になったんで俺がティーカップを片付けようとすると、真由美さんが話しかけてきた。

「あの、その紅茶私ももらっていいですか？」
「え？別に構いませんが、ちょっと待ってもらってもいいですか？」
「構いませんけど……何かあるんですか？」
「いや、単純に淹れる時間が欲しいというだけなんですが……」
「なにそれ！私も欲しい！」
「頼みますから落ち着いて下さい。一花さん、完全にキャラ崩壊を起こしてますよ」
「別にいいじゃん。だからほら、早くー」
「はいはい。三橋さんもいります？」
「うん。それじゃあお願いしようかな」

この後紅茶を淹れて俺は二木さんと一緒に風呂に入った。上がって五人と合流すると、置いといた酒を開けたらしく、完全にできあがっていた。この四人に絡まれつつ、俺と二木さんは騒がしい夜を過ごした。

その日の夜（後書き）

おそらく本日最後のＵＰです。明日から二日目などを書いていきます。それではできればまたしたお会いしましょう。では（＞＿＜）

／

本戦二日目（1）

翌日、Ｂブロックの第一回戦。これまた見逃せない対戦だった。ひょっとして最初に釘付けになるような組み合わせになってんじゃね？

「『白皇剣』対『黒帝剣』か……。さすがにこれを見ない手はないでしょ。そりの合わない事で有名な二人の戦いに決着がつくかもしれないし、さ」

「両方とも三十戦十四勝十四敗二引き分け……だったかしら？よくやるわよねえ」

「同じ流派だっていうのもあるんだろうけど、やっぱり方向性の違いが大きいんだろう」

「皇帝の白と黒、か。師匠さんも大変だろうね」

「あそこの師匠も千葉家だぞ？正確に言うと、千葉家で免許皆伝を受けた人だ」

「昨日も思ったけど、千葉家の人はいい加減にした方が良いんじゃない？」

「そんな事を俺に言われてもな……。あの二人は名前は有名だけど、ランクは俺と同じＳだからな。

まあせいぜい楽しませてもらうさ」

とは言ったものの、やはりどことなく心配だ。なんせあの二人の戦いは白熱すればするほど苛烈になっていくというか、防御をもう完全に無視するというか。要するに血みどろになる。

あんたらは戦国時代の武士か、と言わんばかりにぶつかりあう。いざとなったら止めるために乱入するのを覚悟しなきゃいけないかも。

そんなはらはらした心理状態で、俺は画面を見ていた。今のとこ

ろ、二人ともそんな状態ではない。まあ最初は小手調べが基本だしな。鍔迫り合いながら動きまくっていた。
ぶっちゃけもう一般人の眼には、ぶつかった瞬間に人影と火花ぐらいしか見えていないだろう。ご愁傷様。
知っているかもしれないが、本来そんなに鍔迫り合う事はない。使用者よりも刀や剣の方が持たないからだ。だが、実力が拮抗しすぎるとこういう事が稀にある。それでも稀少な事だが。

『やはりこうでなくては面白くないな！さあ、ここからギアを上げていくが、果たして貴様についてこれるかな？』
『はっ！馬鹿げた事をぬかすな！ついてくるどころか追い越してやるわ！』

ああ、熱が入っちまった。こりゃ止めるのも苦労するぞ。
それぞれが築いた技術をさらに練り上げた技同士が花を咲かせる。
白皇は己のスピードを。黒帝はその連撃を突き破る一撃を。それが連発されてる。あそこの異界のフィールドがとてつもない速度で破壊されてる。
このまま放っておいたら、二人共異界の狭間に落ちておじゃんだな。さて委員会はどういう判断を下すのかな？そう思っていると、滅多なことでは開かない後ろの扉が開いた。

「何か用か？クソ爺」
「あった途端その言いざまは無いじゃろ。クソガキはいつまで経ってもクソガキじゃな」
「あんたにだけは言われたくないがな。……それで？本気で何の用だ」
「わかっとるんじゃろ？……あの二人を止めて連れ戻せ。あのような才能ある若者を失うのは惜しい」
「とっとそう言えばいいのに。それじゃあ、十分ぐらいかな？あそ

この空間を維持しといてくれよ」
「それぐらいならなんとかなるじゃろ。一花君と交渉することにはなるじゃろうが……」
「宿代だ、と言えば何とかしてくれるだろ。それじゃ行ってくるわ」
「「いってらっしゃーい」」

そろって言いやがった。俺は専用の魔法陣に向かって歩いて行った。そしたら爺に怒鳴られた。クソ、ゆっくり行ったっていいじゃないか。そう思いながら俺は走り出した。

本戦二日目（1）（後書き）

はい、本日最初のＵＰでした。基本的に一回戦は二本立てとなります。その分楽しんで頂ければこれ、幸いと思います。

本戦二日目（2）

魔法陣の場所にまでたどり着き、試合が終わるまで動かないようにしている封印を壊した。もしかしたらアラームとかの類がなってるかもしれないが、気にはしない。
魔法陣を稼働させ、俺は二人のいる場所まで転送された。

「やっぱり思ってた通りだ。千葉の家は問題児が多すぎるんだよ。ホント迷惑なことだらけだ」
「「誰だ！？」」
「俺だ。お前ら試合は終了だ。これ以上やるって言うんなら、俺が元の空間で相手をしてやる。この空間はもう限界が近いからな」
「この勝負の決着をつけずに戻れるか！剣士同士の決闘を貴様の都合で邪魔するというのか！？」
「まあ、ぶっちゃけそうだ。いい加減にしてもらわないとこっちも困るんだよ」
「フン！知った事ではない。さあ、我らは続けようではないか！この戦いをな！」
「だから止めろと言っとるだろうに……。もういい。お前らがそういう選択をするなら、俺がお前らを潰してやるよ」

俺は右手の封印を二段階まで解き、鎧を纏ってまだ剣を打ち合っている馬鹿二人に向かって突っ込んでいった。もちろん俺の事をわかってるんだろう。
同時に刀を俺に向かってふるってきた。それの全てをかいくぐり、まずは白皇に向けて鳩尾に向けてブローを叩きこもうとした。だが、体を反り返ってかわしやがった。イナバ〇アーか！？
しょうがないから黒帝の側頭部に向かって蹴りをぶちこもうとすると、あいつかわして俺に掌底を当てようとしてきやがった。なま

じ実力があるとこういう事があるから困るんだよな。
「しゃあない。もうひと段階ギアを上げるとするか。ついてこいよ？」
「当り前だろう。お前とは一戦してみたいと思っていたのだ。こいつと一緒にというのが癪に障るがな！」
「それなら貴様がどけ！こいつは私が倒す！」

なんか仲間割れの様相を呈してきたけど、まあいいか。俺は三回目の封印を解いた。さっきまで余裕で俺の速度についてきた二人は、俺がとてつもなく速度を上昇させたのを見て構えた。
それでも俺の速度は、さっきの約１．５倍だ。いきなりの急加速についてこられる訳が無い。ここで決めさせてもらう！
俺はすぐさま白皇の腹にローキックをぶちこんだ。のけぞった白皇を何発も殴ってやった。十発殴った頃にはもう気絶していた。
俺はそれを確認すると、すぐさま黒帝に向かって走り出した。そして飛び蹴りを黒帝の右肩に当ててやった。なんか嫌な音がなった。多分右肩の骨が折れたんだろう。
黒帝が顔をしかめて後ろに下がる――――前に近づき、ブローをあいつの鳩尾に叩きこんだ。あまりの威力に数メートル後ろに下がった後、地面に倒れこんだ。
うわ、白目になってるよ。今更ながらやりすぎたな。ま、いいか。俺の忠告を訊かなかったこいつらが悪いんだし。そう思いながら俺はこの二人を魔法陣の位置まで運び、転送した。
空間が軋む音がしたから、俺もあわてて魔法陣に乗って競技場まで転送した。そして戻ってきた俺を迎えたのは、すさまじい量の歓声だった。
「すさまじい技量を持った二人を抑え込み、そして軽い表情で帰還したのはCブロックのシードであり、『白銀の神狼』の異名を持つ

乾慎也選手です！」

「「「ウオオオオォォォォオオオオ！！！！」」」

試しに手を振ってみると、さらに歓声は上がった。俺は鎧を解除し、入ってきたゲートから元の部屋に歩いて戻った。その道中に興奮を抑えるのに結構苦労した。

本戦二日目（2）（後書き）

久しぶりの主人公活躍（？）の話です。まだまだ物語は続きますので、どうかお楽しみください。

本戦二日目（3）

「おかえりー。中々格好良かったよ。あの二人をあああもあっさりとやっつけちゃうとはね」
「こいつも強くなってるってことでしょ。まあ、あの程度の敵にやられてもらっては困るけどね」
「全く軽く言ってくれるな。そりゃあの程度の敵にやられるほど弱かねえけどな？」
「というか今回あの二人は不戦敗かな？二人ともやられちゃったし」
「まあ、そうだろ。……お、今度はちゃんと楽しめそうだな」
「天剣持ち？それって結構やばいんじゃない？」
「でも相手は格闘家の達人、李家の人間なんでしょ？だったら大丈夫じゃない？」
「お前は天剣持ちの実力を知らないからそんな事を言えるんだ。あの人外の度合いは、千葉家の比じゃないぞ。ランクは何位だ」
「確か十位ぐらいだったんじゃないかな？」

喋っていると、試合が始まった。最初は李家の圧倒的な勢いだったが、相手が剣を抜いた途端にその勢いは終わった。
なんせ一撃一撃が空間を切り裂いてるぐらいだからな。しかもめちゃくちゃ速い。これじゃあ、刃引きのルールとかもう完全に無視だな。
まだ猛攻は続く。それこそ気の遠くなるような数の打ち込みが連発されているんだから。俺でもあれだけの剣戟に対応するのは大変だぞ。そう考えると、李家の代表は強いな。
剣を唐突に放り投げ、油断した所に手刀、足刀、なんでもありの打ち込みを連発してぶち当てていた。あれはすごいな。多分鎧通し、つまり遠当ての要領で内臓に向かって当ててるぞ。

「勝負、付いたね。あれじゃもう立てないよ」
「確かにな。それにそうでなくてもやりたいとは思えないな。あれだけ打ち込めば、もう相手の気力も体力も十分に削いでるしな」
「あれが天剣持ちなの？とてもじゃないけど、勝てる気しないわね……」
「お前は何訊いてたんだ？あいつはまだ十位。一位はあんなもんじゃねえぞ。あれこそ現世の神、いやさ魔王と呼んでも差し支えのない存在だろう」
「異名も『剣の魔王』だしね。本物の悪魔も尻尾まいて逃げるレベルだよ」
「あんたたちにそこまで言わせる存在ってどんな実力持ってんのよ。私はやりたくないわね」
「俺らだってやりたくなねえよ。六位と戦って死ぬかと思ったからな。何とか倒しはしたが」
「もう地形が完全に変わってたよね。山をいとも簡単に平原にして見せたし。よく勝てたね、って思ったからね」

そんな事を話し合っていると、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。
後で訊いた事だが、この戦いで負けた李家の代表はこの戦いでの治療が終わるのに一年近くかかったそうだ。もちろん大きな被害を受けたのは心の部分だったらしいが。

本戦二日目（3）（後書き）

本日最後のＵＰとなりました。これを某アニメ番組のキャラクター風に表すとするなら「残念、無念～」という感じですかね。では、またいずれ。

本戦二日目（4）

シード持ちにはとある特権がある。それは本戦で素晴らしい戦いをした選手と話し合う権利だ。相手はもちろん天剣持ち。不承不承死ながらも了承してくれて、今ここにいる。

「まあ、とりあえずは座ってくれ。立ったままじゃ話もちゃんとできないしな」

「……それで俺にどんな御用なんですか？」

「そう急かすな。事を急いでは仕損じる。まあゆっくりしようや。それとも何か急ぐ理由でもあるのか？」

「分かりました。それでここに呼んだって事は、何か訊きたい事があるんじゃないですか？」

「取り敢えず君の名前を伺ってもいいかな？」

「シェルグ・アステルです。天剣持ちの第十位。持ってる天剣の名前は『破邪の双星』フレンデスベルクです。他に訊きたいことは？」

「……訊いておいて何なんだけど、そういうの簡単に喋っちゃっていいの？」

昔戦った天剣の第六位は、問答無用とばかりに襲ってきたけどな。アステル君は用意した紅茶を飲みつつ、俺の質問に答えた。

「喋る事自体に制約はありません。その能力をさらす事が問題なんです。ちなみに乾さん、天剣持ちの候補が何名いるかご存知ですか？」

「いや、知らないけど。うーん、三百人ぐらい？」

「残念。三百五十人です。まあどいつもこいつも化物みたいなものですが、一般人から見ればですが」

「第六位は普通にさらしてたけどな」
「六位……ああ、クライズさんですか。あの人はそういうの一切無視する人ですし、何より戦闘に快楽を求める人ですから」
「なるほど。やたら好戦的だった訳だ。それでも第一位はあまり動こうとしないよね。なんで？」
「トップはもう戦いに執着なんかしません。なんか一番上に辿り着いてしまうと達観してしまう物なんだよ、って言ってましたから」
「まあ、あんだけ強かったらそうそう上はいないだろうな。倒してみたい目標の一つではあるが」
「トップの実力を知っててそんな事を言えるんだったら、凄すぎますね。一度手合わせを願いたいものです」

俺たちの目に殺気と言うか、薄暗い獣のような物が宿った。多分、そのまま状態で一分も過ぎたらアステル君も俺も、闘っていただろう。
でも、とうとう我慢しきれなくなったのか、レジルが話しかけてきた。そこで俺たちの眼に宿っていた物がきれいさっぱり無くなった。

「ねえねえアステル君。ちょっと剣に触らせてもらってもいいかな？」
「本当はダメなんですけど……まあいいです。はい、どうぞ」
「ありがとう！うわあ、ここまで綺麗だとは。やっぱり近く見てみると違うね！」
「これ、鋼でできてる訳じゃないわよね？」
「ええ、何でできてるかはわかりませんが少なくとも、この世界と神界では無い事は確かだそうです」
「何でできてるか気になるわね。この硬度を私の鉄鎖でも再現出来れば……」
「いくらなんでもそりゃ無茶だろう。大体お前の鎖がこれ以上固く

なったらやってられないぞ」
「いやはや、これはやっぱり魔力増幅器にもなってるみたいだね。構造がすごい似てる。これを作った人はまさしく天才だね」
こんな会話を四人で繰り広げていた。思っていた以上にアステル君と話がかみ合った事に驚いた。
まあ、当たり前というか観戦をそっちのけで話し合っていたせいで、後で爺に怒られた。まあ、いいか。明日に備えるとしよう。

本戦二日目（４）（後書き）

それでは今日はこれまで、できればまた明日といきましょう。ではまたいずれ。

本戦三日目（1）

「ねえねえ兄さん。私も兄さんがいる観覧席に行ってもいい？」
「どうした？唐突に」

今日は土曜日で明美が通ってる学校は休み。それで久しぶりにゆったり起きて朝飯を食べていた。他に泊まってる皆も叩き起こして、だが。洗い物は一気にやった方が楽だからな。
歓談しながら、コーヒーを飲んでいると明美が唐突にこんな頼みごとをしてきた。いったいどういう心境の変化だ？

「席取るの忘れて、見るのがテレビしかないのよ。でもこういうのって直に見た方が勉強になるんじゃないかと思って。ね！？いいでしょ？」
「迫ってくるな。鬱陶しいから。……そりゃ直に見た方が鍛錬になるだろうけどさ。でも、今日も九条さんが来ないとは限らないしな」
「泰斗さんならきっと来ませんよ。あの人はこういう事に興味の無い人でしたから」

真由美さんがいきなり会話に参加していた。いきなりどうしたんだろ？なんか微妙に表情も硬くなってるし……。

「それ、本当なんですか？真由美さん」
「そうよ、明美ちゃん。だから気にせずについていけばいいわ」
「いやいや、勝手に決めないでくださいよ。入れる事が出来るかどうかも分からないのに」
「それなら私も行きましょうか？総局長の娘が来たとなれば入れてくれるでしょう」

こんな会話を経た末、俺たちは今シード組の部屋に来ていた。なんでこんなことになったのかを説明した後のジェルザの一言はこれだった。

「あんた、馬鹿じゃないの？」
「ひでえ、この女結構真顔で言いやがった」
「そうだよ。ジェルザ、馬鹿はいくらなんでもひどいよ。慎也は抜けてるだけだよ」
「うん、お前も黙ってろ。俺にどうしろって言うんだよ。表の警備員は普通にスルーしてきた所為で、俺は文句の一言も言えなかったんだぞ？」
「こんな事態にしたあんたが悪いんでしょ。知った事じゃないわ。……それで明美ちゃんだったかしら？」
「はい。千葉明美、旧姓乾明美です。はじめまして！」
「はじめまして。黒銀鉄鎖（フォルミウス・テルナ）さまの名前は訊き及んでいます。お目にかかれて光栄です！」
「ありがとう。まったくこんな礼儀正しい娘の兄がこんなのって世の中って間違ってるわよねえ」
「失礼なのはお前だ。……それで、お前が本当にここに来たかった理由ってなんだ？」
「……ばれてた？」
「当たり前だ。選手には選手用の席がある。わざわざここに来る必要はない」
「ちょっといいかな？」

問い詰めようとした矢先に、レジルが出鼻をくじいてくれた。こいつ、本当はただのＫＹなんじゃないのか？

「千葉家の人なんだよね？千葉家の人ってどんな修業をしてるの？」
「えっと、本当は話しちゃいけないんですが……。話してもいいと

思う？兄さん」
「俺が知るか。俺はあそこの家で修業を積んだ訳じゃないんだからな」
「そうだよねー。まあ、この話を黙ってくれるなら話してもいいですが……」
「喋る訳無いじゃん。ジェルザも約束できるよね？」
「なんで私に話を振るのよ……。興味無いから話す気も起きないわよ」
「それじゃあいいですよ。まずは……」
なんか話を露骨に逸らされた気もするが、まあいいか。俺は試合の映像を尻目に、明美の話を聞き始めた。

本戦三日目（1）（後書き）

今週もしかしたら金曜日ＵＰできるかもしれませんが、できなければ来週の土曜日まで休載させていただきます。ご了承ください。では。

本戦三日目（2）

「そういえばさ。この試合って実況とか付いてないのか？」
「ついてるよ？でも、試合に集中するためにわざと切ってあるんだよ。どうする？訊きたい？」
「訊く。なんだか次の試合は面白くなりそうだし」
「次の試合？ノーネームの少年と『百獣』アリサの対決でしょ？すぐ終わりそうな気がするけど」
「なんかあの少年からは『力』を感じるんだよ」

あれから二時間後、俺たちはもう黙って試合観戦をしていた。たまに意見の出しあいぐらいはしていたが。
第四試合がこれから始まろうとしていた。この試合は世界代表トーナメント、と言うだけあってどんな奴でも二つ名を持っている。
その中で二つ名持ちで無い者、つまりノーネームの者が出てくるというのはそれだけですごい事なんだ。でもまあ、たまに運だけでくぐり抜けてくる奴もいるんだけどね。

「それでは第四試合、『名無し』城宮貴也選手対『百獣』アリサ・フォールデン選手の試合を始めようと思います。
それでは両選手、台の上にある魔法陣にお乗りください」

二人が同時に魔法陣に乗り、転送された場所は市街地だった。もちろん無人地帯だ。あの空間自体に元に戻る魔法が掛かっているため、破壊されても数時間後には元に戻る。
いろんなバトルフィールドが用意されてはいる。草原、市街地、砂漠その他諸々ｅｔｃ。その中からバトルフィールドはランダムに選ばれる。

「慎也。彼、魔術師(マグス)みたいだね。札持ってるし」
「それだけで判断するな。ただ式神を使うだけかもしれないだろ？」
「そりゃそうだけど。それでも珍しくない？いまどき符を使って戦う人なんかそうそういないよ？」

レジルの言う通り、今日において魔術は脳に刻むことが可能となったせいで、符を使ったりして魔術を行使する者はいなくなった。この技術はコネクトシステムと呼ばれる。
使うのは何か脳に欠陥を抱えている者か、あるいは脳に刻み込むのを嫌がっている古い者達だけだ。もちろん脳に危険はない。それでも怖がるんだよ。なんでだろ？

「始まるな。どんな戦いを見せてくれるのかな？せいぜい俺を楽しませてくれよ？『名無し』君？」
「兄さん、なんかどこかの悪者みたいだよ？」
「気にすんな。……っていうか攻撃が速いな。コネクトシステムと同レベルじゃないか？あれでコネクトシステムを持ってたらもっとすごい実力者になれるのにな」
「そうだよね。でも、確か式符とかって保持者によって形態が決まってるんだよね？」
「ああ、そうなってるな。でもあれ鷹ってどんなんだよ？俺でもそうそうお目にかかった事無いぞ？」

式符を使う術者は今言った通り、実力によってその式神の形態が決まる。たいていの式神は狐とか烏だな。偵察用に用いられる。攻撃用の式神なんて、滅多にお目にかかれないほど貴重なんだけどな。
「今度は西洋術式？もうなんでもありだね。っていうかあれ『白銀(ダイヤモンドダスト)氷河』じゃない？」
「微妙に違うな。しかしアリサは本当にすごいな。あれ鳳凰じゃな

いのか？」
「伝説の生物を使役する……やっぱり『百獣』の名は伊達じゃないね」
城宮君だったか。彼も相当きつくなってきてるな。肩で息してるみたいだし。
一応説明しておくが、魔力は無尽蔵では無い。体力と同じように使っていけば無くなっていく。一般的な修行方法と言えば、滝壺修行とか座禅とかが有名かな。
まあ要するに、精神力を高められればおのずと魔力の総量も伸びてゆく。もちろん伸ばしていくのにも限度と言う物があるが。
「ねえ慎也。あれはどういう事だろ？」
「うん？……携帯？こんな戦場で携帯なんか出してどうするんだ？」
城宮君は携帯を懐から取り出し、何か文言を唱えていた。さすがに声が小さすぎて聞こえなかったが。いったい何をするのかと思ったら、携帯を振りその振った空間から魔法陣が出てきた。
『この場に生ける者を吹き飛ばせ！「流星雨（スターダスト・レイン）」！』
そして天から流星のような物がアリサと鳳凰に向かって降り注いだ。っていうか携帯からだと！？
「慎也あれって！？」
「あれはまさか、まだ実行不可能と言われてる『現代魔術（アリステル・マグナ）』なのか！？」

本戦三日目（２）（後書き）

昨日は書けませんでしたので今日ＵＰしました。今度にＵＰするのは来週の土曜日です。来週は四話ぐらい一気にＵＰしようと思いますのでお楽しみに！
それではまた来週お会いしましょう！

本戦三日目（3）

『現代魔術（アリステル・マグナ）』――――それは魔術が普及した今でも、完成不可能と言われている魔術の事だ。単純にそれを作る技術が無いからだ。

そもそも、この技術に名前がついたのは三年前とある男がこの技術を作ったからだ。当時はとんでもないニュースになったさ。

だがその男の死後、その携帯だったんだがその内部を調べようとしたがプロテクトではじかれて調べる事が出来なかった。そして無理やりこじ開けたら案の定データが全部壊れた。

そして今俺たちの目の前で二人目の現代魔術師（アリステル・マグス）が現れた。彼は一体、何者なんだ！？

「慎也。これって結構まずい事態だよね？」

「仕方ない。ここはあの爺に頼るしかないな」

俺は懐から携帯を取り出し、とある番号に電話をかけた。

「はい、もしも――――」

「おい爺！今試合をしてる子の身柄を試合終了直後に何とか守れ！」

「なんじゃ藪から棒に。そんな事をする必要がどこに――――」

「ふざけんな！あれは現代魔術だぞ？必要大有りだろうが！このまま放っておいたら、アメリカやイギリスのお偉方がその身柄を、保護の名目で奪い取ろうとするぞ！」

「……やはりか。仕方ないのう。何とかしてみよう。その代わり、身柄はおぬしが預かれよ？神喰狼（フェンリル）がその身を保護しているとなれば、迂闊に手は出さんじゃろ」

「分かった！それでかまわないからなんとか頼んだぞ」

試合はもう城宮君の優勢で進んでいた。そりゃあ、あんだけ術式

を連発されればな。

『氷結の世界よ。今その力を現界させ、この世界を飲みこめ。「ニブルヘイム」！』

「ニブルヘイムだって！？そんな上級魔法も記録されているのか！？」

「北欧神話に登場する世界、ニブルヘイム。その魔法化。現代でもようやく数少ない人間が行使できるようになってレベルだぞ？それをああも簡単に使うとは」

「まるで未来から来た人みたいよねえ。さすがに『百獣』アリサもこれは耐えきれないわね」

そこで試合は終了。そして同時に黒服の人たちが会場内に入って城宮君を連れていった。

そして二十分後、彼はこの部屋に来ていた。なんかがちがちに緊張してるみたいだけど……。まあ、別にいいか。

「あの、すいません俺何かしましたか？」

「まあ取り敢えず座って。訊きたい事は色々とあるからね」

青くなってた顔がもっと青くなっていた。さてさてどう訊こうかな？

本戦三日目（３）（後書き）

暇なのでＵＰしました。とはいえ親がいないからですが。それでは今度こそ、また土曜日にお会いしましょう。では。

本戦三日目（4）

「とりあえず落ちつけ。そんなひどい事はしねえし、ただ話をするだけだ」
「はあ。それで俺に訊きたい事って何ですか？」
「ぶっちゃけ、俺が訊きたいのはそう多くない。そうだな……まずはこれかな？
君はこの世界の人間じゃないな？」

　これはただの確認だ。重要な質問はまだ別にあるんでけど……。
ま、一応しておかないとまずいしな。

「……そうです。っていうか俺は俺がなんでこの世界に居るのか、自分でもわからないんです」
「ふうん？それはまた珍しい現象だね。まさか自分が選ばれた勇者とかそんなこと考えてないよね？」
「考える訳無いでしょ……。そんな余裕ありませんよ。この大会で本戦に入れれば、賞金がもらえるっていうか参加しただけです」
「へえ。そんなこと誰から訊いたんだ？」
「今お世話になってる人です。俺がこの世界に来た時近くにいた人で。達宮さんて人で……」
「え？花音ちゃん？……世界は案外狭いもんだなあ。まさか知り合いとはな。あの子なら納得だけど」
「え？知り合いなんですか？」
「まあね。それで君が使ったのって『現代魔術（アリステル・マグナ）』だよね？」
「ええ、一応そうですけど……。さっきの質問あれで終わりですか？」
「そうだよ？何か問題でも？」

俺にとってあの質問はどうでもいいしな。魔術師としてはこちらの方がよっぽど重要な質問だ。それにこちらの世界には、空間操作の術の一環として次元移動の術がある。

その術の制限時間は約三十秒。その間であれば誰でも例外なく、次元を渡る事が出来る。その制限時間内に通った所為で、こちらの世界に来てしまったんだろう。

「帰る方法なら大丈夫だよ。俺にも出来るけど、一応その方面にも長けてる人に頼んでみるから。それでさ、どういう仕組みになってるんだ？その携帯」

「これですか？これはその人特有の機動鍵語を唱える事で、記されている術を引き出す事が出来るんです」

「マジで？超便利じゃん。それってさ、やっぱり一般に出回ってたりするの？」

「いえ、そもそも魔術自体がそんな広まってません。だからこの世界には驚きましたよ。この携帯は一般に売ってるのに一工夫してるだけです」

「へえ、やっぱり他の世界と話すのは面白い。それじゃあさ……」

この後試合観戦をすっぽかして話してたら、皆に睨まれました。いやあ、熱が入り過ぎたとちょっと後悔しながら、その日は少年を連れて家に帰った。後で花音ちゃんに連絡だけ入れといたけど。

本戦三日目（４）（後書き）

それではまた明日。明日は連続投稿したいと思いますのでよろしくお願いします。

家で修練！（1）

俺が家でまったりと朝食を食べていると、もう学校に行くんだろう。明美が制服に着替えて降りてきた。まったりしている俺を見て驚いた顔をしながら話しかけてきた。ちなみに周りには真由美さんと城宮君がいた。一花さん以下三人組はもう会場に向かった。

「あれ、兄さん。今日は行かないの？」
「ああ。今日は一日修練してるさ。そろそろ試合もあるしな」
「よくやるよね。いつも帰ってきてから二、三時間はやってるのに」
「その程度じゃ駄目だよ。そういう訳なんですけど、真由美さんはどうします？観戦しに行きます？」
「いえ、私も見せていただいてもいいですか？」
「俺の修練を？別に構いませんけど……なにも面白くありませんよ？」
「構いません。私よりも城宮君はどうするんですか？」
「うーん、俺的には家で観戦しててくれるとありがたいんですけど……。どうする？」
「俺も家でかまいませんよ。あんまり興味ありませんし」
「そうかい？それじゃ、お詫びに書庫に魔術書があるからそれを読んでてもらえるかな？」
「え、いいんですか？俺の世界じゃ魔術はその流派特有の物なんですけど」
「ははは。本当はいけないんだけど、別に構いやしないよ。うち、乾家はそこそこ有名な魔術の家系だから。ほとんどの人が知ってるし」
「はあ、それなら見せてただきますけど……。いったいどこにそんな場所が？」

俺はそこでは何も言わず、食べ終わった二人の食器を回収して皿を洗った。そのあとにお茶を用意した後、俺は階段の所まで歩いていきそこで地下に続く扉を開いた。
二人を通した後で俺も扉をくぐり抜けた。二人はちょっと行ったところで周りを見渡していた。そりゃ地下にこんな空間があれば驚くよな。
俺は二人を書庫まで案内した。そこで城宮君が歓声を上げた。

「うおおおっ。なんて本の量だ。天井までびっしりなうえに、果てが見えないなんて……」
「ほとんど乾家が集めた本だよ。父さんが三百冊ぐらいで、俺は五十冊ぐらいかな。たまにダブってたりするけど」
「そりゃ、こんだけ本が集まってればそうなりますよ……。本当に読んでもいいんですか？」
「どうぞ。それじゃあ、俺はこっちの部屋に居るから」

俺は書庫につながっている廊下から、別の部屋に入った。そこはさっきも言ったとおり、修練室。数多くの刀がある。有名な物もあれば無名な物もある。だけど、全部業物だ。
え？そんなに大量にあるんじゃ、手入れが大変なんじゃないかって？それは大丈夫。この部屋には時間維持の魔術が掛かってるから。無機物に限り、入れた時と同じ状態になる魔術だ。
そこも通り過ぎて、俺はただ広いだけの部屋に入った。そして天井から声が響いてきた。真由美さんは観戦用の部屋に入ってもらった。

「トレーニングプログラムになさいますか？」
「いや、まずはウォーミングアップだ。前回のレベルはいくらだった？」
「レベル８３です。今回も同じでよろしいですか？」

「いや今回はレベルは８４だ」
「了解しました。トレーニングプログラムレベル８４、開始」

家で修練！（1）（後書き）

連続投稿第1段！試験も終了したところなので自分もちょっとテンションが上がってます！それでは次を書いていこうと思います。では！

家で修練！（2）

目の前に数々の鎧を纏った騎士が表れた。その色は黒。数は……ざっと29ってところかな。この黒の騎士団は九条の特徴だ。九条の家はこの術で上にのし上がった。

「泰斗さんの……九条の不死の騎士団。それがどうして此処に？」
「目標はこれの全滅。途中でやめる事もできます。それではどうぞ」
「へいへい。しかし『不死』ね。そんなけったいな称号をつけられる程の物か？これ」
「斬っても殴っても吹き飛ばしても、どんな事をしてもまた復活してくる。それがこの騎士団の特徴なんです」

どんな事をしても復活する騎士団、ねえ？それじゃあ、試してみようじゃないか。試しに一番先頭に居る一体を殴った。大きくひしゃげたがすぐに起き上がった。

「なるほどねえ。確かにこんな奴らが何十体も向かってきたら、そりゃあ不気味でしょうね。でも！
この重力に耐えきれるかな？――――――重力術一式（グラビティ・ファースト）・天峯（セルジエル）――――――」

上から通常受けている重力の約十三倍の重力を叩きつけた。メキメキという音を立てながら、騎士団が潰れていく。それでも何とか立とうとするが、持たずに壊れていく。
十五秒もたつと、目の前には欠片しか残っていなかった。その欠片も空中に粒子となって消えた。説明し忘れていたので言っておくが、これは仮想現実いわゆるバーチャルリアリティという奴だ。

「ウォーミングアッププログラム・レベル８４終了を確認。トレーニングプログラムに移りますか？」
「トレーニングプログラムのレベルは？」
「現在レベル６７です」
「次のレベルの相手は？確か前回は炎属性の鷲が五体ぐらいだったと思うんだが？」
「ＹＥＳ。次の相手は、龍種です」
「龍種？何か、ワイバーンとかその類か？」
「ＹＥＳ。それではトレーニングプログラムに移行しますか？」

このプログラムは、ヒントしかくれない。答えは戦ってみればわかる。だからな……父さんも厄介なシステムにしてくれたもんだ。

「ＯＫだ。トレーニングプログラムに移行」
「了解（アウェイクティム）。トレーニングプログラム・レベル６７開始」

目の前に出てきたのはワイバーンなどでは無く……。

「これマジモンの竜じゃん。何が龍種だよ。間違ってねえけどさ。種類は……ノーマルか」

ノーマルっていうのは、いわゆる炎を吐きだす龍種の事だ。物語で有名なタイプ。色は紅。翼も生えている西洋タイプ。これは……どうしようかな？

家で修練！（3）

「はあ、トレーニングで抜く気はなかったんだけどな……。ま、龍なら仕方ないよな。うん仕方ない」

そんな風に勝手に納得したところで、俺は腰につるしてあった二本の刀を抜いた。俺専用にオーダーメイドされている刀だ。

俺は母さんから千葉家の技を教わっている。でも、千葉家の技は本来全て一刀流の技なんだ。それを母さんは自己流に変えた。ある意味において、千葉流は生まれ変わったと言ってもいいだろう。

「天皇・無花果、地王・桔梗、抜刀！」

花の名を持つ刀。天皇（てんおう）・無花果（いちじく）。地王（ちおう）・桔梗（ききょう）。最後にもらった刀。そしてようやく振るう事ができる新しい千葉流剣術。

亡くなる前に書物を受け取った時、俺は母さんにこう言われた。

「まあ、この本に書いてある技をあんたが使えるようになるまで、大体五年はかかるだろうけどね。まあ気長にやんなさい」

あれから一日も修練を怠らずにここまで来た。そしてあの爺に――――千葉家当主に思い知らせてやる。あんたの娘はここまですごい剣術を生み出したのだ、と。

「さあ、お前ごときがこの俺についてこれるかな？今の俺はどんな奴にも負ける気がしない」

「グオオオオオオォォォォォォォォオオッ！！！！！」

怒ったのかな？だけど、俺に勝つなんて不可能だぜ？今の俺には

両親がついてる。この刀は母さんが作り上げ、父さんの魔術によって加工してある。両親の合作。それを持ってる俺がお前なんぞに負けるわけがない。

俺は鎧を纏い、二本の刀を構え走り出した。龍が炎を吐きだしてきた。いくら仮想とは言え、相手の攻撃は魔術に寄って発動しているから当たればダメージが来るのだ。

その攻撃をかわし、俺はまずは翼に取りついた。いちいち飛ばれたら面倒だからだ。俺が刀に魔力を流し、翼に少し当てただけで翼は熱したバターのように切り裂かれた。

「凄い切れ味。龍の翼を一太刀で切り裂くなんて、普通の刀なら逆に折れてしまうぐらいなのに」

「さあ、これで終わらせてもらうよ。――――奥義、花鳥風月・返り咲き」

基本的に俺が母さんから習った技は、千葉家の技と同じだ。だけど、本来の千葉流の剣は技を繋げる事が出来ない。だからこその一刀流なんだ。

でも母さんはその不可能をいとも簡単に突破してしまった。数多く存在する技をあっさりとマスターした上に、こんな事をなすんだから母さんは本当に『千葉の才女』の名にふさわしいよ。

「グォオオォォォォォオオ！！！」

龍は悲鳴を上げながら倒れ、そして粒子となって消えていった。

休憩

「あの、大丈夫ですか？」
「大丈夫。真由美さんこそ暇だったんじゃないですか？」
「いえ、見てるだけで面白かったですし。でもあの剣戟は綺麗でした」
「ありがとう。それじゃあ、城宮君もつれて昼飯といこうか」
「そうですね。でも気づいていないと思いますけど」

まあ、書庫を見た時のあの雰囲気ならあり得ない事じゃないね。でもまあ、それでも無理やり連れて行くだけだけどな。
俺たちが書庫に着くと、十六冊ぐらいのしかもぶっとい本が大量の本が並んでいた。朝の時間をたっぷりかけたんだろうけど、よくもまあこんだけ読めたもんだな。感心するわ。

「城宮君？大丈夫かい？」
「え？ああ、乾さん。それに神崎さん。大丈夫ですよ。それで修練は終わったんですか？」
「午前の分はね。それで昼飯にするから上がってきなよ、って言いに来ただけ」
「ああ、はい。この本は置いといても大丈夫ですか？」
「大丈夫だよ。どうせ取ってきたはいいけど読み切って無いとか、そんなんなんだろ？」
「いえ、とりあえずある分は全部読みましたよ。それで、あの、お願いがあるんですけど……」

俺たちは書庫を出て、居間に戻った。そして昼食のサンドイッチと紅茶を飲みつつ、話の続きを始めた。

「それでお願いって？」
「えっと、魔術に関して色々試したいのがあって……。それの相手とか、その術の欠点とか教えてくれないかな～と」
「え？その程度の事？俺にわかる範囲なら別に構わないよ」
「ほんとですか！？」
「うん。ちょうどいいから真由美さんも、前回の魔術の復習をしましょうか」
「分かりました。でも、私みたいな素人は後ろから眺めていた方が良いんじゃないんですか？」
「大丈夫ですよ。俺から見れば城宮君はある程度名前が知れてる人にちょっと毛が生えた程度。
真由美さんは完全な素人ってかんじですから。何とかなるでしょ。
城宮君も真由美さんの術がおかしいと思ったら相手してあげてね」
「あ、はい。このご飯を食べ終わって少し休憩したら、俺と相手してくれませんか？」
「構わないよ。俺ももうちょっと君の実力を知りたかったところだし」
「それじゃあ、お願いします」

さて、思いがけず模擬戦をやることになっちゃったな。失礼が無いように本気でやるとしよう。

休憩（後書き）

本日の連続投稿はこれで最後！それではみなさん、よい夢を。さようなら～。

魔術の修練

「それじゃあ始めようと思うけど、まず最初に城宮君。君、ひょっとして肉体強化の術が使えないんじゃない？」
「……よくわかりましたね。ばれてるとは思いませんでした」
「そりゃ君の身体能力なら、他の人に術を使ってると思わせる事もできるだろ。でも、俺や一花さんとかの眼をごまかす事は出来ないよ」
「え？あれで素の戦闘力なんですか！？」

今言ったとおり、素人目から見ても彼の身体能力はすごかった。俺は零距離での近接戦闘が主だからやれといわれりゃできるけど、それでもここまで行くのに時間がかかった。
明美とおんなじぐらいの年齢の彼がここまで来るのに、一体どれだけの修練を積んだのだろう？と思ってしまうぐらいに。
彼の魔力の流れを見れば、おのずとわかる。なんせ彼の発せられる魔力が体外にしか出ておらず、内には全然流れていなかったんだから。

「もしかして肉体強化の仕方がわからないのか？
「術もそのやり方もわかるんですけど……。なんて言うんでしょう？理屈はわかるけど、納得いかないみたいな？そんな感じでして……」
「イメージしてみなよ。術を使った己の姿を」
「え？」
「少なくともこの世界ではイメージが大事なんだ。世界に影響を及ぼすイメージ。
今回ので言えば、魔力が己の体を循環するイメージだ」

俺の体の血脈とは違う物が次第に白く光り始めた。腕の先から始

まり、体の隅々まで行き渡らせる。そして俺が目を開くと、鎧を纏っていた。あれ？俺こんなこと考えてないぞ？

『久しぶりに心地よい魔力だったからな。サービスという奴だ』

そりゃどうも。二人の方を見ると、驚いた様な顔をしていた。まあそりゃ目の前でいきなり鎧なんか纏ってたら驚くよな。

サービスはありがたいんだが、鎧を解いてくれ。神喰狼（フェンリル）。

『むう、仕方ないな』

悪いな。鎧を解いてもらい、二人の方に意識を向けた。

「まあ、ざっとこんな感じ。ちょっとはイメージしやすくなったかな？」

「あ、はい。こう……でいいですか？」

「へえ、すごいな」

城宮君はもう俺がやったことを理解して実践して見せた。少なくとも一時間はかかると思ったんだけどな……。なんかちょっとショックだ。

「ちょっと動いてみな」

「はい。って、おわあ！」

あらら。唐突に動いたせいでめちゃくちゃ進んでる。というかこのまま進んだら、壁に激突するんじゃ……。

――――――ガンッ！

「あ痛っ！？」
「おーい、大丈夫かい？だめじゃん。いきなり動いたりしちゃ。最初は歩く位のスピードにしないと」
「は、はい。すいません。いや、元の世界じゃ出来なかったからはしゃいじゃって……。ははは、さてもう一回やろっと」
「ちょっと待った。少し休憩してろ。思いっきり当たったから、三半規管が治るまで待て」
「いえ、でも……」
「問答無用。そこで寝てろ。俺たちはちょっと向こうでやらなきゃならん事があるから。行きましょう、真由美さん」
「え、ええ。それじゃあ、ゆっくりしてね？」

俺たちは城宮君から離れて、少し行ったところで止まった。フィールドを設定して、彼の周辺一帯を森林地帯にした。

「どうしたんです？いきなり」
「ねえ、真由美さん。あなたは泣かない事が強さだと思いますか？」
「普通そうなんじゃないですか？」
「俺はね、泣く事もまた強さだと思うんです。泣ける時に泣ける強さも、人には必要なんだから」

そして遠くから城宮君のすすり泣く声が聞こえてきた。そう、皆の事思って泣ける、そんな強さも必要なんだ。それがわかったのか、真由美さんは静かに一言つぶやいた。

「そうですね」

魔術の修練（後書き）

本日の投稿第一弾です。今日中にあともう二話か来たところです。
では。

狼の集団

「もう大丈夫かい？始めようと思うが」
「はい、大丈夫です。それでどんなふうに魔術を教えてくれるんですか？」
「俺の修練の方法は、基本的に実戦形式だ。という訳で、ついてきてくれるかな？」
「それは構いませんが、いったいどこまで？」
「せいぜい感謝でもしてくれ。こんな事が無きゃいけないぜ？――――神界になんてな」

そんな会話を経て。今現在、俺たちは神界のとある場所にいた。
基本的に神界という所には人がいない。なんせ自分達でもわからない魔獣が大量にいるからだ。分からないというよりは、把握しきれていないんだ。
まあ、黒帝と白皇の師匠はここからちょっと離れた場所に住んでるんだけどな。

「あの、乾さん。ちょっといいですか？」
「うん？何だい？」
「なんで俺たちはこんなに大量の狼に囲まれてるんですか！？」

そう。俺たちはついた途端に狼に囲まれていた。俺にとっちゃどうってことは無いんだけど、城宮君と真由美さんには刺激が強すぎたらしい。二人ともちょっと膝が笑ってるし。
「お前ら、どけ。さもなくば叩き潰すぞ？っていうか俺との契約を忘れたのか？」
「そん訳が無いだろう。ただ貴様を迎えに来ただけだ。他に人間が

いるとは思わなかったが」
「おい、長老。迎えなんかいらねよ。頼むからこの変な状況の方を何とかしてくれ。取り敢えず若い奴らを下がらせろ。土産はちゃんと持ってきてるからがっつくな」
「ほう？それは朗報じゃな。――――お前達、早く村に戻って伝えろ。今日は祭りじゃとな」
「そこまで大層な物はないがな。まあ、とりあえずこれで我慢してろ！」

俺は持ってきていた好い加減に焼いたソーセージをばらまいた。どいつもこいつもジャンプして全部咥えて走って行った。
二人の方を振り返ると、驚いたような顔をしながらこっちに近づいてきた。ちなみに影の中に入っていた狼――――ジズレイルっていうんだが、そいつも走って行った。久しぶりに仲間に会えて嬉しそうだったな。

「あの、慎也さん。あの狼たちが前に言ってた？」
「そっ。俺と契約した狼たちさ。そんで、ここに残ってるのがその長老。ほら、長老。取り敢えず謝っとけよ」
「なんでそんな事をせねばならん。元はと言えば何も言わずにきた貴様が悪いのだろう。
それに人間風情に謝るなど御免こうむるな」
「頭が固いな。それぐらいどうってことないだろ？」
「狼はもともと孤高な生き物だぞ？そんな我らがどうして人間風情などに頭を下げねばならんのだ！？」
「だーかーらー」
「あの慎也さん。もういいですよ？そこまで私たち怒ってませんし。ねえ？」
「ええ。それよりも早く修練始めましょうよ」
「分かった。それじゃあ長老。俺たちは夜までに帰るから、この袋

を持っていけ」
「ふむ、わかった。それではな。あまりこの辺を荒らすなよ」
そういうと長老は袋を引きずって帰って行った。さて俺らも移動するとしようかな。その時は手始めに肉体強化の練習をした。
走る事になったので、真由美さんをお姫様だっこにして運んだ。そして目的の場所に着いた時、真由美さんはバッと俺から離れた。顔がちょっと紅かった気がする。

術の訓練

「さて、まずはどんな術を習いたい？」
「この前使ったニブルヘイムとかですかね。自分の世界で使った時より威力が低かったんです」
「あれで低いのかい？ちょっとのずれに気がつくとはさすがだね。この世界の改変にはイメージが大事って言ったけど、あれはその根本に魔力があるからだ。

その魔力を支えているのが大樹ユグドラシル。北欧神話で有名なあの木の事さ。もちろんのことだが、一気に改変できる事象にも限界はある。

そこで頼りになるのが術者が持っている魔力だ。足りない魔力を術者が持っている魔力で補う。でも君は、その全てを自分の力でなそうとする。

だがこの世界で魔術を使えば、自然と魔力を空気中から取り込むことになる。その力を考慮しなかったせいで、術に異常をきたして威力が落ちたんだろう」

「そうなんですか……。世界からのバックアップ付きとか恵まれすぎじゃないですか？」
「そう怒るな。たいがいの魔術師は時限移動術で別の世界に移動して修行を積むんだ。この世界で術の修行する人は逆に珍しいんだから」
「そうなんですか？それじゃあ神崎さんはどうなんですか？」
「真由美さんは自衛のためだけだから。他に使う気なんてありませんよね？」

「ありませんよ？私は早々別の世界に行く事ができませんから。慎也さんが連れて行ってくれるなら、一向に構いませんけど」

そんな言葉はスルーだ、スルー。なんか恨みのこもった眼で睨まれている気がするが、知るか。俺たちが今いるのは、俺が専用で作った魔術の訓練場だ。神界だからこそできる芸当だ。

取り敢えず木を切り倒して、そこを机にして切り倒した幹を加工して椅子を三つ作った。それでもまだ残ったが放置した。は？環境破壊だって？そんな物知るか。

俺たちはそれぞれ向かい合いながら話し始めた。こんぐらいの距離があれば大丈夫だろ。真由美さんは木の向こう側からこちらを眺めていた。

「それじゃあ、始めてみようか。君の思いのままにはなってみて。俺がそれを相殺するから」

「わかりました。それじゃあお願いします。

氷結の世界よ。今その力を現界させ、この世界を飲みこめ『ニブルヘイム』！」

「汝は氷結と灼熱、両の力を担う者なり。今灼熱の力を持ちて我が敵を葬れ。

『氷炎地獄（インフェルノ）』！」

俺の放った炎と、城宮君の放った氷が激突した。両方の力がぶつかり合い、そこの空気がどんどん膨張していった。これはそろそろやばいかな。

俺はもう一つ用意しておいた重力系の術式をありったけの魔力を

込めて叩きつけた。膨張していた空気が急激な圧力を掛けられてせいで爆発を起こした。

俺は何とか魔力を振り絞り三人分の結界を完成させた。ふう、さすがにヤバかったな。城宮君の方を見ると完全に息が上がっていた。今回はこれで終わり、かな？

術の訓練（後書き）

本日はこれまで。それでは皆さん、できればまた明日。

総局長との邂逅

「そういえばここには人がめったに住んでないって言ってましたよね？」
「うん。言ったけど？なんか見た？」
「ええ、空を飛龍が飛んでたんですけど……。その上に人影らしきものが見えたんですよ」
「……見なかった事にしろ。なんとなく想像はつくけど会いたくない」
「どんな人なんですか……？」
「とてつもなくウザい。その一言に尽きるな。というかどこ行ってるのかと思ったら神界（ここ）かよ……」

両方とも魔力の使い過ぎでこれ以上の修練は不可能という事になった。そんなわけで二人で真由美さんの魔術の修練に付き合っていた。
前にあった時からバルブを閉めっぱなしにしていたおかげもあって、真由美さんの魔力は目測だが城宮君と同レベルぐらいはあった。
城宮君の魔力は俺の魔力を十万としたらそこにマイナス一万、つまりざっと九万ぐらいはある。それと同レベルというのは結構すごい。

「さて真由美さん。そろそろいいですか？」
「あ、はい。大丈夫れす……」
「ちょっと調子に乗って言いすぎましたね。魔力の消費が半端じゃないし」
「ぶっちゃけ、魔力を込めすぎなんですよね。でもそういうと、今度は極端に少なくなるし……。
この状態だと、帰りも俺がお姫様だっこなりする事になるのかな？

あれ結構恥ずかしいんだけど。まあ仕方ないか」
「……」

そこで黙るのはやめてくれないだろうか？俺も恥ずかしいんだから。そんな事を思っていると、向こうの方からなんかこっちに手を振っている奴がいる。

「あれは……。まさか」
「おうおう、久しぶりじゃな！何しとんじゃ？お前さんこんなとこで」
「総局長……。あんたなんでこんなところに居るんだ？それよりも連絡しろよ。あんたがいない所為で滞っている仕事が大量にあるんだぞ？」
「そんなもんは知らん！がははは！」
「だから嫌なんだよこの爺。こっちの話なんか全然聞きやしねえ。おい、総局長。自分の娘の前でそれはないんじゃないの？」
「……ん？おお、真由美。大きくなったな。会うのは二年ぶりぐらいか？」
「……本当にお父様なのですか？」
「おう。お前の父、神崎雅臣（かんざきまさおみ）だ。今は近づかない方がいいがな。臭いから」

真由美さんはそんな言葉を無視して、総局長に抱きついた。そして人目も気にせず、泣き始めた。それだけ嬉しかったってことだろうな。俺と城宮君はその親子の姿を静かに眺めていた。

風呂場にて（1）

「それで爺。あんなところで一体何をしてたんだ？」

場所を変わって風呂場。俺は湯船につかりながら質問していた。なんでここに居るかと訊かれれば、答えは簡単だ。

真由美さんに「臭いので風呂に入ってきてください」と言われたから。

ぶっちゃけ逆らう気もなかったの一緒に入ってしまっている。いやあ、極楽極楽。なんだか爺くさいがまあいいか。良い物は良い。それが真理。

「うーん？神界に行っとった理由か？ミスリルの回収とかもあったんじゃが、基本的には休暇じゃな」

「ああ、あんたがあの場にいてくれてれば、もうちょっとは状況が変わったかもしれないのに」

「婚約の件か？まあどうあっても儂は変えようとは思わんかったろうがな」

「あん？何でだよ。あんたは俺が何か分かってるだろ？俺は神喰らう狼をこの身に宿す者だぞ？どんな手違いが起こるか分からない。俺は世界に現存する中で唯一、神殺しの称号を持つ人間なんだから」

「……実を言えば、あの子は儂の子ではない。とある人に頼まれた子供なんじゃ」

「わかってるよ。あの人はあんたとは波動が違うからな。通常親と子供の波動は似るものだ。たまに例外はあるけど。それでもあんたと真由美さんは極端に違う。違い過ぎる」

「そんだけ分かっとるんじゃろ？それなら理解せい。

あの子の将来はあの子自身が決めるべき。儂が口を出すべきではない」

俺は少しため息をついた。この爺は一度決めたら梃子でも動かない。この人が一回決めた事を変えたなんて話を俺は一回も訊いた事が無い。

「俺なんかに王の力を持てる訳がないだろ？王を選定する剣――――エクスカリバー。もう折れてしまっていると訊いていたんだが、あれはなんだ？完全な姿だったぞ？」

「そうか。……儂があの子を見つけた時、あの子の本当の親は生気（オド）を吸い取られたような姿じゃった」

「剣が生気を吸い取って完全な姿になったっていうのか！？それじゃあ呪いじゃないか！？」

剣とはその者が誰かを救うために振るわれるべき物。誰かの存在を喰らってまで残す物ではない。そんな物は加護でも何でもなくただの呪いだ。聖剣などではなく魔剣だ。極めて悪質な。

「あの～。ちょっといいですか？」

「うん？なんだい？城宮君」

「話は百八十度以上曲がりますけど、魔法と魔術の違いって何なんですか？」

俺は城宮君の質問に唖然とした顔をしていた。

風呂場にて（2）

「魔術と魔法の違い？」
「ええ。昔からみんな魔術って呼ぶんですよ。でも俺の師匠ってズボラ症でして。教えてもらってないんですよ」
「魔術とは人が世界に干渉する術の事じゃ。対し魔法というのは基本的に人の力で起こす事は出来ないと言われておる」
「どうしてですか？」
「それは魔法と言われる物が、俺達風にいえば「奇跡」と呼ばれるものだから。人間に奇跡を起こす事が出来るか？答えは否だ。神の一部は条件を全てクリアしたら使えると言われちゃいるけどな」

俺は昔に一度だけみた事がある。魔法を。その神秘さ、神々しさと言ったら半端じゃなかった。あの力をもう一度、できれば死ぬまでにみたいと思う。

「とはいえ、魔術も魔法も世界に干渉する力じゃ。そう乱発するでないぞ？」
「干渉した世界は少しずつだが、その世界の理を変えるからな。一気に改変するとそこに綻びが生まれる事があるからな。
まあ、この世界は昔から少しずつ使われていたからそう簡単に綻びが生まれる事はないけど」
「そういえばお前さん完成したのか？あの魔術は」
「ああ。なんとかとりあえずの完成まで持って行けたよ。――――『虚無魔術』はな」
「完成したのか。二人も喜んでくれとるじゃろうな」
「止めてくれ！父さんは少なくとも絶対に喜ばない！あの人たちを――――両親を殺してしまったのは俺なんだから」

まだあの時の事は鮮明に思い出す事が出来る。俺がまだ未熟でなければ！父さん達は死ななかった。この研究だって父さん自身の手で完成されていたはずだ。俺よりもはるかに速いスピードで。
俺はいつの間にか唇を切っていたらしい。舌に血の味がする。親だけでなくたくさんの命を喰らった血に塗れた者の血が。

「あまり責め続けるな……と言っても意味が無いんじゃろう。それでもお前さんの手によって研究は完成された。これは快挙じゃぞ？お前さんは自分を誇ってもいいんだ」
「……悪い。気分がすぐれないから俺はもう出るわ。夕飯もいらないって言っといてくれ。それじゃあ」

俺は二人に背を向けて脱衣場に向かって体や髪を拭いて服を着た後、いつも寝ている地下に置いてあるベッドで寝た。ちなみに俺の部屋に置いてあるベッドは城宮君に使って貰っている。

風呂場にて（2）（後書き）

今日はこれまで。次回からまたばしばしバトルを書いていきますのでよろしく！

本戦五日目（1）

「それじゃあ、五日目か。そういえばレジル。お前本戦って八日間じゃねえか。なんだよ一週間位って。ちょっと表現が適当過ぎだろ？」

「いいじゃん。ほとんど合ってるんだから。それよりも大丈夫なの慎也？明日出番だけど」

「今までだって何回か出てたろ。大体俺のする事は変わらないって。是が非でも優勝して一花さんに挑む。ただそれだけなんだから」

「単純だよね。ところでジェルザと千葉家の次期党首。どっちが勝つと思う？」

「それどっちを言っても俺終わりだよな？」

「外れたら怒りでジェルザに殴られ、当たったら恥ずかしくて照れ隠しに殴られるしね」

「昔にやったらすごかったよな。二人ともぼこぼこにされたし。だから俺はしない。大体言う必要はないだろう。竜次君も確かに強いが、ジェルザには勝てないよ。あの鉄使いにはな」

「鉄使い？それってどういう意味ですか？」

観戦席で俺達は始まるのを今か今かと待っていた。俺達はどうも早く来すぎてしまったらしい。まあ身内……と言っていいか分からんが、とにかく知り合いの試合とあってテンションが高まっていたらしい。とにかく暇だ。

「あいつは元素を操るんだ。鉄限定だけどな。だから普通の使い方じゃありえないような攻撃なんだよな。まず、槍みたいに飛んでくるだとか、鎚みたいに叩きつけてくるとか色々だ」

「元素を操る者ですか。珍しいんじゃないですか？」

「珍しいよ？あいつは地面にある砂鉄も操れるしな。あいつはまあ

秘蔵っ子ってやつだよ。それでもよく前線に来るんだけどな。『紅の剣』ってのもあるがあれは条件があるから使わないだろ」
「あれはね～。見てるこっちが不安になる条件だからね。こちらとしては止めてほしいよね」

まあ、それも相手の戦闘方針次第なんだけど。威力で来るか、それとも速度で来るか。どちらかによってあいつの方針も変わるだろうし。
そんな事を考えていると、両選手がゲートから出てきた。竜次君はなんと二刀流だった。これは驚きだ。ジェルザの方は腕に鎖をまとわりつかせていた。
二人は同時に魔法陣に乗り、転送された。そして到着した先は……市街地だった。市街地とはいっても、ほとんど風化しているような場所だ。
しかもこんな土地には砂鉄が大量に含まれている。これは竜次君が不利になってきたな。

『それじゃあ、始めるとしましょうか。言っておくけど女だからって、手加減なんかしたら絞め殺すわよ』
『剣士としてそんな事はしない。こちらにも負けられない理由があるのだから』
『ふーん。それじゃあ戦いを始めるとしましょうか！』

ジェルザはまず鎖を開放し、一本を槍状にして飛ばした。ちなみに解放した数は四。まだまだ腕には鎖が絡みついている。
分かっていると思うが、ジェルザの鎖も鉄製だ。鉄はいろんな部分で利用されている大事な元素だ。だけど鉄にも弱点が存在する。例えば――――
『爆炎剣・剛！』

『なっ！炎の剣ですって！？まさかその刀は魔剣？』
『いかにも。数年前に父上から頂いた魔剣の一本である。そしてこちらが氷結剣・牙！』
『二種類の魔剣の同時使用……。なかなか厄介ね。でもその程度で私はやられないわよ！』

鉄鎖が何かを描き始めた。それは巨大な空間魔術。そこに居るものとある制約を課す魔術。どんな物かはわからないが、とにかく危険を感じたんだろう。竜次君は近づこうとした。
だが、それを許すジェルザでは無い。鉄鎖で何とか防ぎ、地面にある砂鉄を操り攻撃し続ける。
『ここに居る者に魔術による干渉を奪え！「無術牢獄（シャドウ・プリズン）！」』
さて魔剣による力を奪われた。どうするのかな？

本戦五日目（2）

魔術により魔術の使用が禁じられた訳だが（魔術のくせに魔術を封じるとはこれ如何に？）竜次君の刀身からは力が消え、ただの日本刀と同じような形になった。

まあ、ただでさえ剣技で化物である千葉家に魔剣なんか付いたらシャレにならんからな。ジェルザの考えはあってる。だけど日本刀を持った千葉家に勝てる奴はそうそういない。

一体どうするんだ？ちなみにジェルザの鉄を操る力は、魔力では無くそれとは別の力で動いている。

『まさか魔力を封じてくるとは思いませんでしたよ。まあ、これで純粋な剣技であなたに挑めるというものだ！』

『それもそれで大変なんだけどね。炎を使われるよりましょ。さあ、続きを始めましょう！』

どうやら竜次君は速度を選んだらしい。認識が追い付かない速度で走れば、それは良い判断だ。だけど、相手はジェルザだ。あいつはぶっちゃけ空気の流れを読んでるから、先読みが上手い。

鎖でどんどん追い詰めていく。だが、竜次君も負けていない。衝撃波だけでジェルザにダメージを与えていく。ジェルザも竜次君も両方ともダメージが大きい。

『さすがね。この空間で五分以上生き残るなんてね』

『もともと千葉の剣は魔力などを必要としない。だがそれでは進化は望めないと思い、私が取りこんだものだ。

それでも、まだ慎也君にはかなわない。私は本家で鍛えた身なのに、彼にいまだ勝てていない。

それを先生の差だとは思わない。彼がより努力を重ねているという

事だ。彼と闘うために、否！それ以上の者達と闘うために、私は勝ちあがらねばならんのだ！』

目標としてくれてるのは結構だが、それだけではジェルザには勝てない。あいつはそこまで数が多い訳ではないが、俺にすら勝った事がある人だから。

それにあいつの能力の頂点『紅の剣』の条件はそろった。あいつの本当の力をもう一度を目の当たりにできる。

『……我が身を流れし血よ。汝はわが一部なり。いま我が手元に集まり、その力を顕現させよ！』

「始まるね。紅の剣の顕現が。あれを破壊できる剣はこの世界には存在しない」

「なんせ自分の血でできてるからな。あれを破壊できるのは精々がレーヴァテインの炎ぐらいじゃないか？」

「なんでも斬れるしね。昔僕の本気をぶつけたら真っ二つに切られたよ」

ジェルザの猛攻は続く。紅の剣は所有者が傷だらけである事、そして大量の血それこそ大量出血寸前でもない限り顕現できない。

命の危機により顕現が可能な力であるこの剣は、世界最強と言われても納得してしまうような切れ味を持っている上に、絶対に折れない。折ろうとしても血だからどんどん補強されてしまうんだ。

最後は剣で斬りつける――――と見せかけて鎖を操って鳩尾に命中させて気絶させた。しかもジェルザも勝者宣告された直後に気絶してしまう始末だ。

まあ、とにかく勝ったんだ。どんな状態であれ、良しとしよう。あいつは自分のできる限り戦ったんだから。

本戦五日目（3）

最終試合、相手は九条ＶＳケルト神話の光の神『ルー』を宿すフレンヴィル・ラインズ君だった。ルーの武器はあの有名なブリューナクだ。

「どっちに軍配が上がるかな？」

「微妙なんだよな。ブリューナクはどこまでも長い射程が売りだ。でも、それも多分役に立たないし。かといって九条の騎士団はどうか、と言われればこれもまた微妙だし。

はっきり言ってあの騎士団は、足を破壊すればどうという事はない。まあ腕で這ってこっちに来る辺りは不気味だけど、所詮その程度だ」

俺は重力でほとんど叩き潰したが、別にそんなことしなくても対応策はいくらでもある。ジェルザなら砂鉄で足を縫い付けておくとかだ。

それでも無理やり動こうとするからな。あの騎士団の実力は術者の能力と同じかそれ以下だ。だから数を多く呼べば良いってもんじゃない。

そういう明確な弱点も存在する訳だけど、あの人はどう突破してくるのかな？ついでのようで悪いのだが、明美は負けてしまった。ぎりぎりで惜しかったがな。

「あ、始まりますね。九条さんはわからないですけど、ラインズさんは凄かったですよ。空間魔術で一気に距離を離した後、ブリューナクを連射ですからね」

「ブリューナクは一応武器の一種なんだが。あれってそう大量に作れるのか？」

「あれは魔力で形成されてるからね。でも遠距離からの連射か……。

当たったらどう対応するか考えておかないと」
「その前に俺に勝つ事を考えておけよ。あの人の前に俺と当たる事になるんだし」
「そりゃあもちろん考えてるよ。それでも、だよ」
「考えてるなら構わないが。……お、早速騎士団の登場か。数は……十五体ぐらいか？」
「そうだね。正確に言うなら十三体だけど。それにしても鎧の形がちょっと龍っぽくない？」
「そりゃあ、あの家の紋章は龍だからな。確か黄龍だったかな？」
「五行思想ですか？」

五行思想ってのは、自然哲学の思想の事だ。万物は木・火・土・金・水によって構成されているという思想。それによって相克だとか相生だとかが存在する訳だが。今説明する気ないし。
黄龍ってのは土に分類される。土が表すのは季節の変わり目の事だ。それにしても、九条はこの技一つで今の地位に駆け上ったらしい。そこまで強いとは思えないんだけど……。
ラインズ君は空間魔術で五百メートルぐらいかな？まあそんぐらい後ろに下がった後、ブリューナクで掃射し始めた。うわ、どんどん倒れていくよ。

「これさ、ちょっと一方的じゃない？」
「大丈夫だよ、慎也。九条の実力はここからだから」
「ふうん……。ってあれ？なんか足が直ってきてないか？」
「そう。魔力を注ぎ込むことで体を直す事が出来る。しかも……」

ラインズ君がもう一度ブリューナクで掃射しようとしたが、今度は完全に弾かれた。そうか学習機能か……。何度でも立ち上がる騎士団に学習機能。なるほど。
分かった気がする。何故九条が一桁数字（ファーストナンバー）の地位に至れたのか。さ

てもっと楽しませてくれよ。一体これからどんなふうになるのかな？

本戦五日目（4）

ラインズ君は魔術も混ぜ込みつつ、ブリューナクを絶えず連射し続けた。高威力の術を持っていないのか、当たっても騎士の連中の鎧に穴をあける程度だった。

「これさ、ちょっと勝敗が見えてないか？」
「そうなんだよね。でも、なんかちょっと違うような気がするんだよね」
「違う？何が？」
「確かに、ラインズ君の売りは精密な遠距離射撃とブリューナクや魔術の連射だよ？
でも、全体攻撃技を持ってないはずが無いんだけどな……」
「でも事実使ってないだろ？……はあん、成程ね。でも、その程度の目論見が見えてない筈が無いだろう」
「そうなんだよね。どうしてそんな見え見えな案を使ってるのか分からない」

大方小技で目くらましつつ、大技で一気にけりをつけるつもりなんだろうけど……。
それでどうにかなるほど、九条の力は甘くないだろう。まあ、九条の力はほとんど騎士団に集約されているという話だけど。

『どうしたんだい？そんな小技を連発しても、私の騎士たちは突破できないぞ！？』
『それぐらいはわかっています。だからこの時を待っていた。
汝は雷。汝の力を持って眼前の敵を断罪せよ！「ライトニング・ジャッジメント！」』

雷？何でまたその術を選択（チョイス）したんだ？ただ騎士団を消し飛ばすだけなら、炎とかの方が良いだろう。何を考えているんだ？
巨大な雷が騎士団に向かって降ってきた。騎士たちは一気に体が吹き飛んだ。電撃が流れている所為で、修復は難しそうだな。
そして九条さんの方法を見ると、肩から血を流していた。そうかあの術ですらも目くらましの一つか。小技を連発した後に大技を出す。だけどその大技すらもブラフ。
本当の目的は、『ライトニング・ジャッジメント』による目つぶしからのブリューナクを命中させる事だった。
確かに皆の視線はあの雷に向くだろう。その間に自分はブリューナクの遠距離攻撃……。考えたものだな。でも、これは一回こっきりの技だ。もう効かない。

『これは一本取られましたね。仕方がありません。お見せしましょう。我が九条家の奥義を！』

そういった直後、粉々に砕け散っていた欠片達が集まり巨大な竜の形になった。龍と言うよりも竜。東洋系統の竜の形だった。

『これこそが我が九条の奥義！『黄竜』だ！』

あらわれた竜の咆哮によって、ブリューナクの攻撃が消し飛んだ。なんて威力だよ。そして尾の一撃によって吹き飛ばされていた。
どうやらその一撃で気絶したらしく、試合はそこで終了となった。
さて、明日に備えて修練してから寝るとしようかな。
あの竜に対しての対策も考えておかないと……。

本戦五日目（４）（後書き）

黄竜は誤字ではありません。そういう名前ですのでご了承ください。

本戦六日目（1）

俺は選手控え所に向かっていた。選手はそこを経由し入場しなければならないからだ。
モノクルを掛けてガントレットを装着して、俺は控え所に入った。そこにはもうすでに何名かの選手がいた。俺が気にせずに歩いていこうとしたら一人が声をかけてきた。

「師匠、頑張って下さいね。私（影ながら）応援してますから」
「ん？久しぶりだな、彩夏。お前も大会に出てたのか？」
「はい、Dブロックで」

天城彩夏――――俺の弟子のひとりで『最終元素（ラストエレメント）』の能力を持っている。
その効果は、相手の能力を一時的に使用不能にする。例えばジェルザの使う鉄を操る力に対して使えば、その能力を封じる事が出来る。

「それじゃあ、俺は行くとするさ。相手はあの『神威』だからな」
「神の力を有する人間。神人種に勝てるんですか？」
「勝てるか、じゃない。ただ勝つ。それ以外にないだろう」
「それもそうですね。それじゃ、いってらっしゃーい」
「はいよ。お前も頑張れよ」

俺が魔法陣の所までたどり着き、移動するともうそこには『神威』フェンデス・ベルクさんがいた。
『神威』をこの世で持つのはこの人ただ一人。神人の呼び名を持つこの人だけだ。
神人っていうのは神と同じ力を持つ人間の事だ。神を宿す人は神

種と呼ばれ、人間は人種。まあ、普通だろう。
神の力はフェンリル所属の魔術師三十人から五十人程度の魔力を持っている。俺も同じぐらいの魔力を保有している。まあもう人外レベルだからねえ。ってそんな事はどうでもいい。
俺達がいるフィールドは――――湖畔だった。

「それにしてもこのフィールドは戦いにくい事で有名なんだよな」

なんせ地面が少ないからな。ほとんどの人は何とかやりくりしちゃいたけど。俺にとってはめんどくさい。だから！
俺は湖の方にジャンプした。そして俺の脚が触れた場所から順に凍っていった。よし、これで足場作り終了。さて戦闘を始めるとしよう。

「いつもの事だけど、君の術には驚かされるよ。湖畔全域を凍らせるって……」
「まあまあ、別にいじゃないですか。これで戦いやすくなるんですし」
「まあそりゃそうなんだけど。……もう考えないでおこう」

ベルクさんは『神威』を放ってきた。称号と技名が一緒なんだよね。
俺はその攻撃をかわし走り始めた。俺が駆け抜けた所から氷がどんどん割れ始めた。これでは作った意味が無いから、という事で足に冷気を纏わせて氷を補強しつつ、ガントレットに電撃を纏わせた。
「汝は雷神の雷！我が敵を討つ雷の槍となれ！『トール・ブラスト』！」
約五発分の槍状の雷がベルクさんに向かっていき、大爆発を起こ

した。

本戦六日目（2）

端的に言って俺の攻撃は防がれた。『神威』の力を前面に集約させて防ぎきったらしい。

「ちっ！防ぎきったか」

「当たり前だよ。この程度防ぎきれない訳が無いじゃない」

「そりゃそうなんだろうけど。でもそんなにケロッとされてると何か……ねえ？」

「ねえ？じゃないよ。それに、その力は雷神トールの物の筈。なんで君が持ってるの？」

「それは俺が雷神トールの魂を喰らったから。あいつの魂保持者が暴走した時にね」

俺がつけているガントレットの名前は、あの有名な雷鎚ミョルニルだ。魂の性質によって神器という物は変わる。あ、神器ってのは神話とかに出てくる神の武器の事ね。一応言っとく。

「神の魂を喰らった神狼、ね。これは厄介だね。しかも自分の力にしてるし。

――――汝聖の力を司りし一角獣よ、今我が下に来たりて我が力となれ！一角獣（ユニコーン）！」

空間を突き破り出てきたのは、一本の角を備えた白馬だった。聖獣・一角獣（ユニコーン）。その角はあらゆる病気に効くと言うが、清らかな乙女にしかその姿を見せないというので有名な聖獣だ。

まさか契約しているとは思わなかったが、別に構わない。向かってくるというなら叩き潰すだけだ。だけど結構厄介だな。ここはあいつを呼び出しとくか。

「汝一角獣と対をなす者なり。今我が袂に来たりて、その力を示せ！双角獣（バイコーン）！」
「双角獣（バイコーン）ですって！？意外だけど納得できない訳じゃないわ。双角獣（バイコーン）は魔獣。そして神喰狼（フェンリル）は魔獣の頂点。龍皇すらもその力を恐れるという。魔獣としての眷属の繋がりという訳ね」
「ま、そういう事だ。だからこちらも全力で行かせてもらう。いけるな？」
『私を見くびらないで頂きたい。相手が一角獣（ユニコーン）ともなれば尚更』
「いい度胸と覚悟だ！さあ始めよう！
我と汝交わりし時、此処に更なる力を目覚めさせよう！我が力となれ、双角獣（バイコーン）！」

――――憑依装着（ユニゾン）――――

――――――――城宮視点――――――――

黒い光が辺りを照らし、その光が消え去った後そこに黒い鎧を纏っている人が立っていた。そして頭部には二本の角があった。

「あの、あれってやっぱり乾さんなんですか？」
「他にどんな奴がいるのよ。しかし憑依装着（ユニゾン）ね……。できたんだ、あいつ」
「そうだよね。いつもフェンリルの力と魔術以外じゃ戦わないから、わからないよね。こんな隠し玉を用意してるなんて」

二人とも目を細めながらそう仰っていた。あ、憑依装着（ユニゾン）っていうのは契約してる魔獣や聖獣を体に纏ってその力を振るう事。あ、相手も憑依装着（ユニゾン）した。

こちらは乾さんとは魔逆で一本の角に、真っ白な鎧だった。乾さんがいきなり不可視な何かを飛ばしていた。あれは……衝撃波、かな？ベルクさんは光を収束してそれに対抗していた。凄い爆風が辺りをまき散らしていた。

「あれって衝撃波だよね。二本の角で収束してるみたいだし。逆にベルクさんのあれは光、かな？」

「ユニコーンは純血の象徴でしょう？それならあれは光でしょ。慎也のあれは不可視の所を見ると衝撃波なんでしょうね。よくわからないけど」

乾さんが衝撃波を連射しつつ、すごいスピードで走っていった。ベルクさんは凌ぎきるので精一杯らしく、攻勢に転じる事が出来なかった。

そしてさっきの衝撃波を腕に纏わせながら、アッパーを放って空中に吹き飛ばした。そして自身もジャンプで空中に飛び上がり、地面にたたきつけた。

選手の戦闘不能が確認されたのか、そこで試合は終了となった。何をしたのかと訊いたら、最初のアッパーで脳震盪を起こさせて気絶させた後、観客に見せるために叩き落としたらしい。

といっても、衝撃波を先に地面に放ってから重力で体を浮かび上がらせたから、怪我はしてない筈だと言っていた。その時、俺はこの人の事が心底恐ろしいと思った。実力的に。

本戦六日目（3）

「そんで最後はレジルの試合か。……心配か？」
「そ、そんな訳無いでしょ。あいつとは決勝で戦うって約束してるんだから」
「これはまた仲睦まじい事で。もう本格的に付き合っちゃえば？」
「そんな時期じゃないでしょ。それにそんなことしても意味ないわよ」
「意味があるかどうかなんて時間が教えてくれるし、自分が動かなきゃいつまで経っても時期なんか来ないぜ？特にお前ら二人はな」

この二人は俺以上に知名度が高い。まあ、俺は基本的にそこまで大々的に動こうとしないからなんだが。それでもその知名度を可能とするだけの力を持っている。
『四元素（フォースエレメント）』に『黒銀鉄鎖（フォルミウス・テルナ）』。この二人が恋仲である事を知っているのはそう多くない。
さすがに結婚の公表は自分達の知名度的に見て控えているらしい。もちろん知っている人間だけならばイチャイチャしているが。公私ぐらいはわかってるってことだ。

「それでも、よ。少なくとも、今の段階でそんな事をする気はない」
「ふうん？こう言ってるんだけどどう思う？城宮君」
「俺に振らないでくださいよ！そんなの答えられる訳無いでしょ！」
「ま、そりゃそうなんだろうけど。でも、君よく夜中に外に出て女の子っぽい名前呟いてんじゃん。
あれか？恋人でも残してきた口か？」
「……違いますよ。俺の師匠にして幼馴染です。きっと心配してるんだと思います。まあ、俺も負けちゃいましたけど」

そうCブロックの最終試合で城宮君も負けてしまった。後は準々決勝を経て準決勝、そして決勝戦。そして優勝した奴が一桁数字（ファーストナンバー）への挑戦権を得る。

それでも、相手が悪かったと言うべきなのか城宮君は勝てなかった。ま相手が『闇姫』ともなれば仕方ないことなんだけど。

「闇に対抗できるのは光のみ。炎や氷なんかじゃ効かないよ。まさかこんな初歩の技術を知らないとは思わなかった」

「俺の世界には闇使いが稀なんですよ。だから教えなかったんだと思います」

「それでも、だろう。まあ、君にとっては面白い物になるかもしれないな。この試合は」

あいつは四元素――――つまり火、水、風、土を自由自在に操る力を持っている。四種の精霊と契約している唯一の存在だ。それ以外は多くて二種類、できないなんてのもざらだ。

ちなみに俺はできない。できなくても問題がある訳じゃないけど、できた方がその種類の魔術の威力が上がる。だからできた方がいいって類だ。

レジルの試合が始まった。相手は彩夏だった。ああ、可哀そうに。レジルは女性には手加減する奴だけど、それでも実力的にもまだ足りないな。

『それじゃあ、よろしくお願いします。』

『こちらこそ。その腕輪を外す時間ぐらいは待ちますけど？』

『あ、そうですか？ありがとうございます』

彩夏が腕輪を外すと、服の色が全体的白くなった。他の色を知らない雪のように。

『さあ、始めましょう。「最終元素（ラストエレメント）」！』
『「最終元素（ラストエレメント）」か……。それなら僕も全力を出すとしようかな。来て、我が契約せし精霊達よ！』

すると、レジルの周りに四体の精霊が表れた。炎を纏う者、体が水でできている者、土でできている者、風を纏っている者。
さて、これに一体どう対応するんだ？これは確かに今日を締めるのにいい試合だな。

本戦六日目（4）

『ジール、こいつ焼いちまっていいのか？』
『できれば焼くのは勘弁してあげてよ、イフリート。それに多分そこまで力は使えないよ。最終元素（ラストエレメント）が相手じゃね』
『あ、ほんとだ。全てを『零』へと返すために作られた能力。それは私達と相性悪いしね』
『そうそう。それじゃあ、一気にフルパワーで行くよ。準備は良いかい』
『別にいつでもいいぞい』
『あたしも―。楽しめればそれでいいし』

なんか楽しい精霊たちだな。そんな事を思っていると、精霊達を集めて魔法陣を作り出した。そして一気に魔力を込めて四種の力を込めたビームを放った。
対して彩夏が取った行動と言えば、右手を向けて何かをつぶやいていた。だが、その言葉を訊いて会場に居た有数の実力者は揃ってこう思った。

――――こいつはやばい、と。

『その力を零へ。終わりは始まり、始まりは終わり。さあ、始原の世界へ還れ。「最終元素（ラストエレメント）」』

手袋から白い波動が流れ始め、光に触れた途端に光が気化した。おそらく、多分魔術としての効力を破壊されてマナに戻ったんだろう。
言っておくが、もうすでに魔術となった物をマナに戻すのはとある職業に就いている奴ら以外不可能だ。その職業は破壊師（ブレイ

カ―）だ。
まんまだろ！という声は無視する。その職業についてる奴らがするのは、基本的に呪いを受けた人の呪いを破壊する事だ。そういう意味では、解呪師と言った方があってるかもしれん。
まあ、裏稼業もしてる連中だからそんな不名誉な名前で呼ばれるんだけど。それはどうでもよくて。
『これが最終元素（ラストエレメント）の実力……。なるほど、これが忌み嫌われている理由か。敵だったら末恐ろしいけど、味方だったらこれほどいい能力はないでしょうに』
『あの……レジル様は私の事を嫌ったりしないんですか？』
『なんでさ？嫌う理由も恐れる理由も僕にはないよ。それは慎也だってそうだろうし』
『私の事を受け入れてくれたのは、両親と師匠と弟子の人たちだけだった。勝てないまでも一矢報いてみます！』
『もう突破口は見えたけどね。イフリート！ノーム！』

レジルは地面の柱を立てて、そこに一気に火炎をぶつけて砂埃を起こした。そして名前を呼んでいなかったが風の精霊でその砂埃を落ちないようにしていた。
そして一気に炎をぶつけて粉塵爆発を起こしていた。鉱山の事故とかで有名な現象だ。おそらく空間制御で鉱山と同じ状態にしてるんだと思う。
この事からもわかるように、ぶっちゃけ空間制御ってチートなんだよね。まあ、その技も最終元素（ラストエレメント）によっては阻まれたんだけど。
掌に魔力を纏って強烈な、それこそ空気に振動が広がるほどの威力で掌底を叩きこんだ。唾液を吐きだして彩夏は気絶したようだ。
まあ、粉塵爆発をくらって重傷。なんて訊いたら俺は間違いなくレジルをぶん殴ってるけどな。まあ、これで今日の日程は終了だな。

本戦七日目・試合開始前

「それで、午前中に準々決勝全部やって午後に準決勝だっけ？」
「そうだよ。多分当たるんだろうけど、僕は負けないからね？」
「そりゃ結構なこって。ところでジェルザ、そろそろ用意した方がいいんじゃないか？」
「そうですよ！いくらなんでも、もう時間がありませんよ？」
「わかってるわよ～。ああ、胃が痛い……」

まだ言ってるよ、こいつは。そんなこと言っても、もう後の祭りだろうに。
そう思ったら、レジルがジェルザを抱きしめて髪を撫で始めた。熱いなあ、ほんとこのバカップルは公私混合も甚だしいな。
え？前と言ってる事が違うって？この風景見たら誰でもそうなるって。つうか、めんどくさい風景だな。城宮君は顔が紅くなってるけど。結構初だな。

「そこのお二人さん？元気の注入は終わりましたかな？」
「な、ななな、何言ってるのよ？」
「もうその光景を見るのがうんざりだから早く行け、って言ってんだ。熱すぎなんだよ、お前らは。精々思い出して試合に集中できない、なんて事態にはならないでくれよ」
「当たり前じゃないか。それに僕は何も問題じゃないしね」
「開き直ってる奴って、なお嫌になるよな。もういいからさっさと行け。相手を困らせるな」
「分かったわよ。それじゃあ、行ってくるからね」
「うん、いってらっしゃい。頑張って、とは言わないよ」
「もちろん。勝ってくるから」

そういうと上機嫌で部屋を出て行った。しっかし面倒だな。この二人付き合ってから三年ぐらい経ってるんだけど、これは結構やばいよな。

「お前らほんとに結婚表明した方がいいんじゃね？」
「ああ、昨日ジェルに言ったらしいね？」
「当たり前だ。特に今のはもうひどい。結婚した人でもあそこまでひどくはないぞ？」
「え？そうですか？俺の師匠の両親もあんな感じですけど……」

君は一体どんな環境で暮らしてきたんだ？さすがにあれは一般的に見て異常だぞ？

そう思いはしたが、口にするのははばかれた。さすがに口にする勇気はなかったし、レジルがこっちをものすごく睨んでくるんだ。

「……なんだ？言いたい事があるなら、はっきり言え」
「いや？何か言いたそうだと思ったから、見てただけだよ？」
「そうかい。それじゃ、あいつも試合会場についたみたいだし、お前さんの恋人の力をもう一度はっきりさせてもらうとしよう。一昨日のはひどかった。
あんなの、あいつの半分程度の力しか発揮できてないじゃん」
「その前日にちょっとお酒を飲み過ぎてね。二日酔い未遂？みたいな状態だったんだ」
「もうそんな事は無い、と思いたいものだな」

そして試合を開始するホイッスルは鳴り響いた。今回こそはちゃんとやってくれよ？

本戦七日目（1）

そんな面倒くさい事があった訳だが、試合はまともにしていた。ちょっと危ないところもあったが、それ以外は何事もなく経過していき勝利した。

え？なんで今までと違って省略してるのかって？そりゃとてつもない長さになるからさ。そんな訳で午前中の準々決勝の分は省略させていただく。

それじゃあ、ここからは午後。つまり準決勝の始まりだ。これの試合の進行次第で、当たる奴も変わる。俺とレジル、どっちが勝つかなんてわからないんだが。

「それで？ジェルザ、今回の勝算は？」

「うーん、なくもないんだけど……。あの『黄竜』が厄介なのよね。私の能力でも潰せる気しないし、それにあの騎士団をただ潰すだけでも効果ないしね」

「ちゃんと考えてるんだな。魔術で一気に潰すのが一番簡単なんだけど……。でもお前魔術使えないしなあ」

「そうなんだよね。腕力ばっかり鍛えていたせいか、術の適性が全くないんだよね。術の練習してる時に涙目になってたのは可愛かったな」

「ちょ、ちょっとレジル！止めてよ、そんな事言うの！」

「あはは、ごめんごめん。それじゃ、頑張ってきなよ。としか僕に言える事は無いね」

「それもそうなんだけどな。……別にいいか。なるようになるしかないしな」

俺達がそういうと、ジェルザはため息交じりに扉を出て行った。その後にレジルが後を追いかけていったが。

「……あの二人って本当に仲がいいですよね」
「まあね。っていうか城宮君全然喋らないけど、何かあった？」
「何かあった、というよりは何もない事が問題なんですけど……」
「……早く自分の世界に帰りたいんだろ？」
「そうですよ。今、自分の感じてる感情を元の世界に居る皆も感じてるとしたら、俺は耐えきれない。早く戻ってみんなを安心させたいんです！」
「君の言いたい事はもっともだ。でも君は、自分の感情の為に他の人の道を阻むのか？
……悪い、今のはなしで。あと二日待て。そうすれば君は帰れる」
「二日？試合は明日で終わりでしょう？」
「休憩する時間もくれないのか？いくら一花さんでも、俺と闘った後に君を元の世界に戻す魔力なんて残ってないだろう。だからもう二日待て」
「……分かりました。それでも、できるだけ早めにお願いしますよ」
「オーライ、オーライ。今は他の人の戦闘技術を喰らいな。それは君の糧になるんだから」

レジルは戻ってきた直後に試合が始まった。ジェルザは鉄鎖でハンマー上にして叩きつけて潰していた。相手はもう動くのもままならないという状態だった。
さすがに、相手――――九条も初っ端から『黄竜』を使い始めた。ジェルザも『黄竜』の咆哮をかわして凌いでいた。

九条もじれったくなったのか、大ぶりな尾の攻撃を仕掛けてきた。それじゃあかわしてくれと頼んでいるようなものだろうに。
だが、ジェルザはそれを受け流しつつ尻尾の部分を鎖で粉砕しやがった。なるほど、あれはもう使い物にならないな。
欠片になっただけなのなら、まだどうにかしようがあっただろう。

でも潰されてしまったらどうしようもない、か。考えたものだな。
「だけど、これは甘いな」
「え？どういう事だい？慎也」
「レジル、あれはお前の入れ知恵なんだろうけどな。九条の奥義があれ一種類なわけないだろう？」
「まさか！？」

俺の忠告、というよりレジルの予想は当たった。ジェウザの周りの地面四方から一気に鎖が表れた。そして一気に縛りつけられた後、その後は一方的な攻撃の連打だった。

もう何十発打撃音が響いたかもわからない頃になってようやく、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。おそらく体は痣だらけだろう。
レジルは俺の襟をつかんで俺の体を持ち上げて睨んできた。

「どうして！どうしてジェルザにあの事を教えてやらなかったんだ！？」
「……教えるだと？なんだお前。怒りで頭がどうにかなっちまったのか？」
「なんだと！？」
「あいつが負けたのは、相手の事をちゃんと調べていなかったからだ。それを言うに事欠いてお前、教えなかっただと？いい加減にしろ！俺はお前らの先生でもなければ、親でもねえんだよ！
それにお前らはアマチュアじゃねえ！れっきとしたプロだろうが！
無様な言い訳してんじゃねえよ！
まだ俺に文句があるというなら、試合の時にでもしろ。あいつは負けた。これは事実なんだから」

そう告げると、俺はとっと部屋を出て行った。まさかあそこまで

期待を裏切ってくれるとは思わなかった。これが恋や愛に溺れた結果だというなら。そんな物はクソくらえだ、そう思いつつ俺は試合会場に歩き始めた。

本戦七日目（2）

「さあて、それじゃあ始めるとしようか」
「……」

俺達はもう向かい合っていた。試合開始のホイッスルはすでに鳴り響いた。だが俺達は向かい合っているだけだった。
レジルが一向に動こうとしない。機先を制すりゃいいというもんでもないが、このまま睨みあっても何も変わらないな。しゃあない、神喰狼（フェンリル）。

『なんだ？』

あれをやるぞ。準備は良いか？

『いつでも構わん。出来るだけ早くしてくれ』

あいよ。わかった。

「我が身に宿りし神狼よ。今汝が力を我が下へ来たれ」
「同調（シンクロ）」

普段の俺だったら、こんなもん唱えずにさっさと鎧を纏うだろう。これを唱えることで、完全な形で鎧を纏い力を振るう事が出来る。

「最終警告だ。やる気が無いというのなら、とっとと降参しろ。今のお前とは戦う気がしない」
「それは嫌、かな？慎也、悪いけどこの勝負は僕がもらう」

「ほう？言ったな？やれるもんなら、やってみやがれ！」

俺は走ってレジルに近づいた。するとレジルはイフリートを召喚していた。そいつで一体何をするっていうんだ？

「汝、火を司りし精霊よ！我が敵を討つ力となれ！

――――憑依装着（ユニゾン）――――」

火の精霊を纏う、ね。また無茶をしたもんだな。それは精霊の持つ特性を受け入れるという事だ。火を使うという事は、火を浴びているのと同じだ。

この試合が終わったらあいつ、火傷を負ってるかもしれないな。まあ、軽いのだろうけど。

「だが、面白い！神狼の爪よ、我が力となれ！『フェンリスウールブ』」

俺の掌に神喰狼（フェンリル）の爪の力が宿った。前に説明したような気がするが、神喰狼（フェンリル）の能力は三つしかない。

総てを喰らう神狼の牙『フェンリスヴォルフ』、総てを切り裂く神狼の爪『フェンリスウールブ』、それに他者を圧倒するだけの身体能力だ。

その爪の力を宿した。つまりどんな攻撃だろうと、今の俺に届く事は無い、という事だ。

さあて、この爪にどうやって対抗するのかな？

本戦七日目（3）

「火精霊（イフリート）！」

「ちっ！厄介だな。というよりは邪魔くさい。この炎はさ」

俺の周りには凄い熱量の炎があった。レジルがイフリートの力を使って増やす所為で、どれだけやっても一向に消えない。

面倒くさっ！しゃあないかな？こんなところで明かす気はこれっぽちもなかったんだが。

「総てを飲みこみし虚無の力！今魔力を我が糧とせよ！虚無（アビス）・喰（イーター）！」

俺の体から透明な光が照射された。それと同時に周りに広がっていた炎が俺に集まってきた。周りから見れば、俺が焼かれているように見えるだろう。

だが実際は炎を魔力へと戻し、俺の魔力として取り込んでいるだけだ。この術は非常に燃費が悪いから、今はこの程度が限界だが。というか消費した量と取り込んだ量でやっと相殺だよ。

「――――ごちそうさまでした」

「まさか慎也、君は僕の魔力を喰らったっていうのか！？」

「ご名答。これが俺と俺の父さんの手によって完成された新しい魔術。『虚無魔術（アビス・マグナ）』だ」

「馬鹿な！？新しい魔術体系を作り上げたっていうの！？」

「レジル。光と闇が混じる場所には一体何があると思う？」

「そりゃあ、無じゃないの？」

「そう。光が存在するからこそ、闇は存在する。その逆もしかり。だが、その境界線上に存在する物はなんだ？それを考えて作り上げ

た術式だ。
ぶっちゃけ新しいんじゃなくて誰もが考えたが、完成させる事が出来なかった事をしただけだ」
「それを新しいというんじゃ……。別に構わない。それなら肉弾戦にするだけだ！」

そういうと、炎を纏ったまま俺に殴りかかってきた。いい度胸してるじゃねえか！

「神喰狼（フェンリル）！もっと同調率（シンクロ）を上げろ！」
『了解だ！』

俺とレジルはそのまま殴りあった。だが、やはりこちらに分がある。俺は超至近距離での肉弾戦が専門だが、レジルは万能タイプ。なんでもできるが故に、どれかに突出する事が無い。それじゃあ、俺に勝つ事は出来ない。それでもどこにそんな力があるのかと思うほどに攻撃してくる。

「答えろ、レジル！お前は俺に勝ってどうするんだ！？」
「あの男を倒して、ジェルザの敵を討つ！」
「その程度か！？お前の覚悟は、お前の思いはその程度の物なのか！？
誰かの為にしか、お前は戦えないっていうのか！？」

俺はレジルの腹に掌底をくらわして吹き飛ばした。そして顔面を思いっきり殴りつけようと右拳を握りしめると、レジルがそこに掌底を当ててきた。

「悪いのか！？大切な誰かのために戦う事が悪いというのか！？」
「悪いとは言わねえよ。それでも！自分の為には戦えないお前じゃ

俺には勝てない！
お前にとって、ジェルザってのはどういう存在なんだ！？俺を倒してでも、決勝に行くというその思い、それは一体何なんだ！」
「決まってるだろ！それは僕が彼女の事を、ジェルザの事を好きだから！愛しているからだ！
それだけじゃあ、駄目だっていうのか！？」
「駄目とは言わねえ。お前らの思いはよく知ってる。でも、俺の願いの為に！俺は勝たせてもらう！」

左拳を鳩尾に叩きつけて、呼吸を止めた所で魔力を纏わせた右拳を顔面に叩きこんだ。レジルは五メートルぐらい吹き飛んだ。意識が途切れたんだろう。
試合終了のホイッスルは鳴り響いた。しかし、こりゃあ俺も結構な数の痣が出来てるな。あいつの強烈で峻烈な思いの力がこちらに響いてきた。

「お似合いだよ。お前さんらは」

俺はレジルを抱え上げて、医務室にまで運んだ。そして会場に戻ると、暖かい拍手が俺たちを迎え入れてくれた。

本戦七日目・試合後

「兄さん、大丈夫？……って、うわ、どうしたの？その髪」
「ん？なんか変か？」

試合も終わり、俺は観戦室に取りつけられたシャワーを浴びてちょうど上がってきた所に、明美と真由美さんがやってきた。ちなみに城宮君は少しトイレに行っている。

「だって、ねえ？」
「どうして髪の色が白色になってるんです？脱色ですか？」
「脱色とか言わないで！神喰狼（フェンリル）との同調率（シンクロ）を上げると、こういう事になるんですよ」

俺の髪の色が白銀の色になってた事に驚いてたのか。一応言っておくが普段の俺は黒髪黒目だ。
まあさすがに、目の色は変わらなかった。しかし同調（シンクロ）なんてしたのは久しぶりだ。さすがにいつもいつもやってる訳じゃない。普段は生身のままだし。

「さて、それじゃあ帰るとしようか」
「お待たせしましたー。って、あれ？お二人ともどうしたんです？」
「あ、城宮君。これから帰ろうか、ってところだよ」
「そうなんですか」

そして四人で駐車場に向かって歩き始めた。最初は俺が車を動かすから待っていてほしい、と言ったんだがついていくと言って引かなかった。なんでだろ？

「それにしても、改めて乾さんの認識を塗り替えられた気分でしたよ」
「そりゃあ、普通の人にあの芸当はできないでしょうね。何？城宮君はあれぐらいできるようになりたいの？」
「そこまでは言いませんけど。それでも強くなりたい、とは思いますよ。やっぱり」
「……二人ってさ、結構仲いいよな？」
「な、何言ってんのよ。そんな訳無いじゃない。これ位普通だって。ねえ？」
「なにどもってんだよ。余計あやしさ倍増じゃないか。……ここだけの話、城宮君はどう思ってんの？」
「えっ？どういう意味なんですか？」
「天然かよ。まあ、それはそれで面白いから別にいいんだけどさ」

そして歩いたところで、九条さんに出会った。
どうも彼は俺に用があるらしかったので、三人には先に駐車場に行って貰った。真由美さんが最後までごねていたが、何とか言いくるめて行ってもらった。

「……それで？どんな御用なんです？まさか文句を言いに来た訳ではないでしょう？」
「相変わらずだな。君は。なに、おめでとうと言いに来たんだよ。だが君は決勝で負けるだろう。それは見えてるいる事だ。あの程度の試合しかできない者に、私が負けるはずなど無いのだから」
「それじゃあもう用は済んだな？俺は失礼するぞ」
「待ちたまえよ。まったくこれだから乾家の人間は困る。どいつもこいつも話を訊こうとしない愚か者ばかりだ。それに頑固な千葉家の血が混ざれば、こうも偏屈になるのは当たり前か」
「……今、なんて言った？」

俺の声がここ最近で最も低く冷たい物となった。だが興に乗ったのかその声に気づかず、九条の声は上がっていった。

「なに、簡単な事だ。『魔術の神童』と『千葉の天女』の息子はこうも愚かだという事だ。
どちらの家も愚かだが、君の家は特に、だな。大体――――」
「言いたい事はそれだけか？もしそれだけなら、俺は行かせてもらう」
「ふ、ふん。勝手にしたまえ。ま、せいぜい無様な様を晒さないようにするのだな」

そう俺に告げると、高らかに笑いながら去っていった。だが、その声は震えを紛らわすかのようだった。それもそうだろう。なんせ俺が強烈な殺気をぶつけているのだから。

「お前だけは絶対に……殺す」

俺はそうつぶやくと、皆が待っている駐車場に向かって歩き始めた。

本戦最終日（1）

翌日、つまり本戦最終日。俺は、いや俺と九条はフィールドに立っていた。

いや、ただまだ試合開始のホイッスルが鳴り響いていないだけで、攻めあぐねている訳じゃない。ぶっちゃけ、見た限りじゃ隙だらけだと言うしかない状態だしな。

「フン、負ける言い訳は考えてきたか？」

「自分が負ける可能性を考慮してない段階で愚かだよな。お前の親父殿……ご当主は何も言わなかったのか？」

「気をつけろとは言われたが、貴様程度に何を気をつけろというのだ。親父殿も心配症だから困る」

愚かなのはお前じゃ、ボケ！と言いたくなったが、ぐっとこらえた。俺は秘密裏に行われた決闘で当主を倒している。その忠告もろくに訊かずにこの態度。本当に愚かすぎる。

真由美さんには何か心配そうな顔をされた。心配する要素なんかどこにもないというのに。それとも微妙にまき散らしてた怒気というか殺気を感じ取られたかな？

「貴様のような出来損ないを倒し、私が真由美さんを手に入れる。そして証明してやる。貴様の家族の愚かさと、程度の低さと言う物をな！」

「そうか。そこまで死にたいというなら、ご要望通り……殺してやるよ」

ピイイイィィィィィィイイィッ！

ちょうどよく試合開始のホイッスルも鳴り響いた。こいつだけは

ここで……殺す！

「最大接続（マキシマムコネクト）！完全同調（フル・シンクロ）！」

『珍しいな。最初からここまで飛ばすのか？』

「黙ってろ。いいから力を貸せ！こいつだけは！俺の家族を侮辱したこいつだけはここで…殺す！」

俺は鎧を纏い、そして鎧は今まで以上に光を放った。そういえば昔、誰かが言っていた気がする。

『俺達の力は思いによって、その幅が変わる。とてつもない怒りの所為で力が強大化するとかな。

だけど、怒りには呑まれるなよ？それはお前に滅びをもたらすだけだからな』

怒りに呑まれるな？無茶を言うな。この男は家族を侮辱した。俺の事は別に構わない。それでも、身近にいる人の侮辱に対しては俺の沸点はとてつもなく低い。

そんな俺にこれだけの罵倒を浴びせたのだ。その罪は死を持って贖うぐらい当然の事だろう。

「それがお前の力か？恐るるに足らんな！」

俺はなにも喋らずに、九条の目の前まで駆け抜けた。速過ぎるせいで知覚できなかったようだ。俺が目の前に現れると驚いたように目を見開いていた。

俺は九条の顔をつかむと、思いっきり地面にたたきつけた。今の俺は神喰狼（フェンリル）の力と精神と同調（シンクロ）させている。

そんな状態で叩きつけられれば、頭蓋骨が粉砕されて死んでいるだろう。だが、どうやら騎士団の鎧と同じ素材を頭の後ろに集めて

粉砕だけは防いだらしい。
顔を歪ませてはいるが死んではいなかった。俺はそれを良い事に、九条の顔を掴んで空中に放り投げて、もうアホらしい威力の拳を何十発も叩きこんだ。
とてつもないだろうな。さしもの俺もこんだけの攻撃を再起不能確定ってレベルだ。だが、まだだ。まだ足りない。

「天竜砲・轟！」

俺は止めとばかりに鎧通しの技術を発展させた、対遠距離用の技を放った。だが意識を取り戻したのか、鎧の力を残面に収束させていた。

「しゃらくさいんだよ！とっととくたばれ！雷・炎・氷・光！四天烈波・覇！」

鎧通しの攻撃は当たるまで時間がかかる。その間に四属性を纏わせた拳でその盾を破壊した。そして天竜砲の攻撃が直撃した。

本戦最終日（2）

「まだ意識があるとは、さすがに驚いたよ。ま、今の内に訊いといてやる。昨日言った物を含め、俺の家族に対する罵倒を撤回する気はあるか？」
「ある訳が無いだろう！貴様が良い証拠だ。己の感情の為にしか動かない、そんな輩がいる家を侮辱して何が悪い！？――――グハッ！」
「そうか。良くわかったよ。――――貴様が途方もない愚か者だってことがな」

俺は足を九条の体の上に置いた後、思いっきり押しつけた。それこそ衝撃が地面に伝わるほどに。
お、今骨が折れた音がしたな。二、三本は折れたかな？それでもまだこちらを睨みつけていたので、さらに力を込めるとさすがに悲鳴を上げた。俺の怒りはそんな物で薄くなるほど甘くないんだ！

「もう止めてよ！兄さん！」

俺が肩越しに振りかえると、肩で息をしている明美と真由美さんが立っていた。
どうやってきたんだ――――ってそりゃ魔法陣で来たに決まってるよな。

「何の用だ？明美。一応まだ試合中だぞ？」
「もういいよ。そこまでして私達の為に怒らなくてもいいよ！」
「……お前が良くても、俺は全くよくないんだよ。特にこんな何も知らない奴にそんな事を言われるととてつもなくむかつくんだよ！」

ミシミシッ！
骨が軋む音が聞こえてくる。こんな何も知らない奴に俺の家族が侮辱される。ここまでいらつく事がそうあるものか！
「俺の事は別に構わないよ。俺はいろんな事をしてきたから、罵倒されようとも侮辱されようとも甘んじて受けよう。だが、俺の家族は関係ないだろ！？
こんな輩がいるから迫害なんかが絶えないんだよ。そして俺はそういう輩が大嫌いだ！
何か言いたい事があるなら、そいつだけにしろ！何も関係ない奴を、巻き込むんじゃねえよ！」
俺の脚の力がどんどん大きくなっていく。ついに下の地面に亀裂が走り始めた。そして同時に気を失ったらしい。眼を閉じながら荒い息を吐いていた。
そして相手が気絶したせいで、俺達は強制的に元の世界に戻された。そして周りには恐れるような顔をしている観客達がいた。当然の反応だが。俺は鎧を解除して真由美さんに顔を向けた。
「そしてこれは、貴女にも言える事なんですよ。真由美さん」
「えっ？」
「俺は、貴女の道具じゃない。例え俺の力が稀少だからと言って、そのために婚約するとか……ふざけないでもらいたい。俺はあなたの事は別に好きでも嫌いでもないんです。
そんな相手に対して婚約とか、できる訳無いじゃないですか」
「それは……」
「兄さん、とやかく言ってるけど要するに自分の傍に居させたくないだけでしょ？」
「分かっているならいちいち言うな。ぶっちゃけて言ってしまえば、俺の傍にいる人間は不幸になる。それがわかっているのに、それを

見過ごすなんて俺には出来ない。出来るならば、幸せになってほしいから」

「それなら大丈夫です」

「え……？それはどういう」

「私はもうすでに幸せですよ。あなたと出会えて。何とも思わない相手に対して婚約して下さい、なんて言いませんよ。私が選んだ『幸せ』なんですから」

「でも、俺の所為で父さんも母さんも死んでしまったんですよ？そんな俺と一緒に居たっていい事なんかありませんよ？」

一体何を言ってるんだ、この人は。俺と出会えて『幸せ』だ、だって？そんな訳無いだろう。俺は神すらも喰らう神狼だ。そんな俺と会えて幸せだって？

それなら、俺の葛藤はなんだったんだ？長い間悩んでいた俺はなんだっていうんだ？

「むう。いちいちやかましいですよ。そんなお喋りな口にはこうしちゃいます」

いきなり俺にキスをしてきた。あまりにも突然過ぎて体が反応できなかった。観客達もあまりの出来事に驚いて誰もが口を開けたままだった。そして一人の硬直が解けると連鎖的に声が上がった。

「「「えええええええーーーーーっ！！！」」」

「な、何を……」

「てへ。家に帰ったらもっと凄い事をしちゃいますからね？」

冗談ではなかった。その後、しばらくの間俺は唇が引きつっていた。まあ、柔らかかったんだけどね？自慢じゃないけど……。

それはもう頭から追い出しておこう。午後からは一花さんと闘う。もう誰と闘うかは大会委員会に伝えてある。後はそれに備えるだけさ。

本戦最終日・エキシビションマッチ（1）

「それではこれより、一桁数字（ファーストナンバー）の第一位一花花蓮選手対本戦優勝者乾慎也選手のエキシビションマッチを始めたいと思います！」
「「「ウオオオオオォォォォォォォォオオ！！」」」

午後になって俺達は試合会場に居た。今回も今までどおり、魔法陣で移動すると思ったらそうじゃないらしく特別ステージに移動した。

「さて準備は良いですか？」
「私はいつでもオッケーだよ？それよりもさ、賭けしない？」
「賭け？何を賭けるんです？」
「そうだね……。私が勝ったら名前で呼んでもらおうかな？」
「そんだけでいいんですか？それじゃあ、俺の分は無しでいいんで城宮君を元の世界に返すのを手伝って下さいよ」
「別に構わないよ？それにしてもこれでお別れか、なんだか来る物があるよね？」
「そうですね。でも、試合否戦いには集中して下さいよ？」
「もちろんだよ。そっちこそ小手調べとかは無しにしてよ？」
「分かりましたよ」

「それでは両者準備はよろしいですね？」

「ああ」「ええ」

「それでは試合開始！」

「「最大接続（マキシマムコネクト）！最大同調（パーフェクト・シンクロ）！」」

俺は先程の試合より洗練された形の鎧を纏い、一花さんは黄金の衣とモノクルを掛けていた。

「じゃあ、開幕そうそうなんだけど、いかせてもらうよ」

――――汝は絶対必中の神槍なり。今我が下に顕現し我が敵を撃ち抜け。神槍（グングニル）！

空間を割いて現れたのは一本の槍だった。だが、その穂先にはルーン文字が刻まれていた。その術式によってどこまでも追いかけ相手を貫く。

「行きなさい。我が宿敵、神喰狼（フェンリル）を――――射ぬけグングニル！」

車が猛スピードを出したかのような速度で俺に迫ってきた。さすがにこれを完全に回避するのはキツイな。どうしようかな？

本戦最終日・エキシビションマッチ（2）

「それがどうした！総てを喰らいし神狼よ、汝が牙の力を我に！『フェンリスヴォルフ』！」

俺は背を反り返して槍をかわしつつ、右拳で槍の穂先を殴った。すると、神槍（グングニル）に刻まれていたルーンが消えて無くなった。そりゃもうあっさりと。

だけどその事に対して、一花さんは驚きもしなかった。そりゃそうだ。これは前に俺が暴走した時に開発した対神槍（グングニル）用の技なんだから。

「前は暴走してた時に使ってたよね。あの時はさすがに一人じゃ勝てないと思ったよ」

「あれは完全に俺の身体の限界を無視して、神喰狼（フェンリル）が動かしてましたからね。あれから数日は全然動けませんでしたよ」

「数日で済んだなら大した物でしょ……。あれで結構な被害が出たんだからね？」

「世界最強の呼び声の高いあなたを含め、二木さんと三橋さんの三人がかりで俺は攻撃されたんですけどね！？」

「仕方ないじゃん。あなたは一応『神喰らいの魔物』なんだから」

「それでもあれはひどかった。なんせ三橋さんに吹き飛ばされ、二木さんに雷霆（ケラブノス）をぶつけられ、貴方に神槍（グングニル）を当てられる。悪夢のようでしたよ」

その後キチンとした処置を施されていなければ、ぶっちゃけ死んでいたと思う。治療班の人には感謝の気持ちで一杯だよ。

「それじゃ今度はこちらが行かせてもらうとしましょうかね。

汝は雷霆。あらゆる者を射抜き、我が前に骸を作り上げよ！――――ケラブノス」
「！？」

俺の掌の先に雷が集まり、その色はどんどん紫色になっていった。そして限界まで収束させきったそれを一気に放った。
一花さんが驚くのも無理はない。これは本来二木さんの技だ。誰にも真似する事が出来ないギリシャ神話の天空神（ゼウス）の技だ。

「その雷霆を貫き破壊しなさい！『グングニル』！」

まあ、その攻撃も至極あっさりと破壊されてしまった訳だが。これを再現するの結構大変だったんだけどなあ。
それでも驚愕だったのかしばらくは攻撃してこなかった。

「どうして？今のは魔力じゃなかった。確かに神力で構成されていた」
「そりゃ、雷神（トール）の力を使ってますからね。構成されてなきゃおかしいですよ。
それに俺達に停まっている時間なんかありませんよ？」

俺は瞬時に一花さんの懐に入ると、右ストレートを叩きこんだ。が、神力で瞬時に防御陣を構成されて防がれた。ちぃ、おしかったな。

「それならこうするだけだよ！
数多の神槍よ！今我が敵を撃ち抜け！――――グングニル・フェルベン！」
「ざっと二十本ぐらいかな？だけど、それがどうしたっていうんです？」

俺は瞬時に動いて、総ての槍の穂先を殴った。それだけでグングニルは力を失い落下してきた。もちろん、下には一花さんがいる。

まあ、当たり前というか簡単に弾かれたんだけど。そしてまた膠着状態に持っていかれた。いったいどうやって打開しようか？

本戦最終日・エキシビションマッチ（3）

そこからはほぼずっと平行線だった。どんな攻撃をしても対応してくる所為で、どんな攻撃も効かないんだから仕方ないだろ？

「氷結の世界よ。今その力を現界させ、この世界を飲みこめ。『ニブルヘイム』！」

「灼熱の世界よ。今その力を限界させ、この世界を焼き尽くせ。『ムスペルヘイム』！」

俺は氷を。一花さんは炎の術をぶつけあった。急激に空気中の温度が変化したため、霧が発生した。俺はこれを狙ってたんだがな。

「全ての者を凍てつかせる悠久たる大地よ。今我が敵を深き眠りに誘え。『コキュートス』！」

俺の放った術は水系統最強の術である『コキュートス』だ。この術は一気に零下三十度を超える勢いで空間を凍らせる。

この術を壊すには、圧倒的な魔力をぶつける或いは炎系統最強の『ラグナロク』をぶつけるしかない。

だけど、そんな事をすればただでは済まない。ダイナマイト二十個分ぐらいの爆発が起きるんじゃないかな？俺は鎧だからまだ大丈夫だけど、一花さんは神力を帯びているとはいえ、ただの布だ。耐えきれる訳が無い。

俺はそう確信し、霧が晴れた所で結果を確認しようとすると、そこには驚きの結果が待っていた。

「なっ……！？神槍（グングニル）を身代わりにするだと！？」

「君の策は面白かったよ。でも、それもここでフィナーレだよ！

汝、絶対必中の神槍(しんそう)よ！我が敵をその無限の槍にて討ち貫け！
『グングニル・インフィニティア(インフィニティ)』！」
「ってなんて数だよ！？」

俺がざっと確認しただけでも、三百本以上あったぞ！？無限の名を冠するだけはあるな。この場ではめんどくさい限りだがな！

「光と闇交わる時、そこには『無』があるのみ。全てを呑み尽くせ！虚無(アビス)！」

俺は『虚無魔術(アビス・マグナ)』で何とか喰らいまくった。ちなみにこの術で喰らった物は何でもかんでも魔力に変換される。俺の魔力回復も兼ねてるんだよね。この行動は。

でもやっぱりそれでは間に合わなかった。まず両足の甲に当てられて、動きを制限された後に腕・肩・太もも等ｅｔｃ。

俺が鎧の中で喀血すると同時に、一花さんは神力で作り上げあげた神力の塊を槍状にして俺に飛ばしてきた。もちろん俺が動ける訳もなく。

腹の辺りに直撃すると、俺はそのまま場外まで浮き飛ばされた。そこで試合は終了。

長かった十日間の日程は、一花さんの勝利によって幕を閉じた。

え？その後俺がどうなったかって？そりゃもう分かりきってるでしょ。魔力とは血に含まれる成分だから、使いすぎた所為で血が少なくなってる所に、体中を槍で刺されたから血が圧倒的に足りなくて死にかけたよ。あっはっはっは。

まあ、そのあと笑い事じゃないでしょ！って真由美さんと明美に怒られたんだけど。痛かったしすげえ怖かった。今まで一番の衝撃だったね。

本戦最終日・エキシビションマッチ（3）（後書き）

ついに世界代表トーナメントも終了です。次からは異世界冒険編になります。それではまた後ほど。

異世界への出発

大会が終わり二日たった今日、俺は城宮君を彼の世界に戻すために彼を連れて異世界へ行く事になった。一花さんが座標を調べてくれたらしく、準備が終わったら自分も行くらしい。

その事を真由美さんに伝えると、「だったら私も行きます」と言ってきた。理由を訊いてみると、こう答えられた。

「だって、花蓮さんって慎也さんとの距離が近いんですもん」

と言われた。距離？なんの事かいまだにさっぱりわからん。そう告げると、でしょうね。って呆れられたような返答が帰ってきた。これひどくね？

「さて城宮君。準備は大丈夫かい？」

「はい。最後までお付き合いしてくださって、ありがとうございます」

「気にしないでよ。俺も君にいろいろと教えてもらったし。ギブアンドテイク、だろ？」

「あはは、そうですね。乾さんって何回異世界に行った事があるんですか？」

「数えたらきりが無いからわからん。まあ、十回以上は軽く行ってるよ。なに？次元移動術でも知りたいのかい？」

「ええ。欲を言うなら。たぶん無理なんでしょうけど」

「別に無理じゃないよ？失敗してもいいなら、だけど」

「え？」

えーと、どこに入れたっけ？俺は担いでいた袋を開いて、中身をあさりだした。後ろで城宮君の何をしてるんだろう？という視線を感じるが無視。お、あったあった。

「はい、これ。次元移動術の術式の論理とか構成が書いてある本だよ。ま、自分で練習してみなよ」

「あ、ありがとうございます。……でもいいんですか？こんなのもらっちゃって」

「大丈夫、大丈夫。俺はもう使えるし、それにもう数冊書庫に入ってるから」

「「お待たせ（しました）」」

二人が準備を終えたらしく、一緒に現れた。っていうか二人とも化粧してるんじゃないか？

「なんでオシャレなんかしてんの？まあ、綺麗だとは思うけどさ」

「いいじゃん。っていうかさらっと褒める辺り誑しの才能あるんじゃない？」

「止めて下さいよ。っていうかそろそろ教えて下さいよ。城宮君の世界の座標。一花さん全然教えてくれないから、分かんないんですよ」

「そこだよ。賭けで私が勝ったんだから、名前で呼んでくれないと教えてあげない。後敬語禁止ね」

「分かったよ。それじゃあ、教えてくれよ。これでいいのかい？花蓮」

「バッチリ！この紙に書いてあるのが座標だよ。まあ、見なくても私の肩に手を置いておいてくれればいいんだけど」

……やっぱりこの世界か。なんとなくそうじゃないかと思ってた

んだけど、ドンピシャだったな。俺と真由美さんが肩に手を置き（何故かわざわざ手を重ねてきたけど）、城宮君はなぜか手を握られていた。

「それじゃあ、行くよ」

掛け声と共に、俺達は今いる自分達の世界を旅立ち異世界に向けて出発した。

談話

光が収まって周りを見回すと、そこは普通の住宅街だった。変哲もないが、平和を感じる。そんな空気の住宅街だ。そして目の前の家の名前には『城宮』と書いてあった。

「帰ってこれたんだ……。本当に戻ってこれたんだ」
「よかったね。それでどうするの？すぐ帰るの？」
「まさか。俺はもう一個用事があるんですよ。城宮君、この辺りに雨宮さんっているかな？」
「え？うちの隣ですよ？ほら、あそこ」

城宮君が指をさした先を見てみると、そこには『雨宮』という名前が書いてあった。

「マジかよ。ま、それなら後回しでいいか。取り敢えず君の家族の人に挨拶しとこうか」
「え？いいんですか？」
「あのね、君の親御さんから見れば君の安全が大事なんだから当たり前でしょ。
っていうか家に居るのかい？いないんだったら後でもいいけど」
「いえ、いると思います」

俺がインターホーンを押すと、ピンポーンという間抜けな音が鳴り響いて少し待つと扉から苦労しているのがわかる女性が出てきた。

「はーい。って……貴……也……？」
「……うん。ただいま、母さん」

城宮君がそう言うとその女性、っていうか城宮君のお母さんは無言で城宮君に抱きついて泣き始めた。内心不安だったんだろう。
いきなり息子にいなくなられて、怖かったんだろう。それだけに元気で戻ってきた姿を見るのは、嬉しい事なんだろう。
それがわかるだけに、俺はずっと黙ってこの二人の親子を見守っていた。しばらくすると、立ち直ったのか俺達を家の中に招いてくれた。

「あの、名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」
「あっと、これは失礼しました。俺は乾慎也と申します。こちらは神崎真由美さん。そして最後に一花花蓮さんです。この度は早く帰す事が出来ず、申し訳ありませんでした」
「いえ、帰ってきてくれただけで、私は安心しています。連れてきて頂き、ありがとうございました。あの、それでこの子はどこにいたんですか？」
「申し上げにくいんですが……異世界、と言ったら信じますか？」
「……なるほど。またどうしたらそんな所に行くのやら、分かりませんね」

城宮君のお母さんは、予想外に簡単に信じてくれた。あれ？異世界人ってメジャーなのかな？

「此処の住宅街は魔術師が住んでいますので。私の夫もそうでした。ですから今更異世界やらなんやらで驚く気にはなれませんね」
「それはそれは。うちの世界でも魔術はメジャーですけど、それなら信じられるでしょうね」
「貴也、あんたちょっと学校に行って皆に安全を伝えてきなさい。みんな心配してたのよ？特に竜美ちゃんが」
「竜美が？……うん、わかった。あの、申し訳ないんですけどついてきて貰っても良いですか？」

城宮君が何を言ってるのか、ぶっちゃけわからない。日本の治安は世界でも高い方なのに、何を心配する事があるんだろう？

「うん？なんで？学校の位置を忘れてる訳じゃないだろ？」

「そうですけど。でも心配させたんだから、という理由で無理難題を吹っかけられそうな気がして……。お願いします！」

「あはは。いいよ。もしかしたら会えるかもしれないな。結構久しぶりだけど、どうしてるかな？」

「え？何か言いました？」

「いや？何でもないよ。それじゃあ、行くとしようかな。二人はどうする？」

「「ついていきます」」

「ＯＫ。それじゃ、行こうか」

『竜美ちゃん』は元気にしているかな？俺の体感時間だと五、六年経ってるんだけど。久しぶりだ。俺の事を覚えてるかはわからないけど。

学校の玄関

それで俺達は城宮君の家から歩く事、二十分ほどが経った場所――――つまり学校に着いていた。見た目だけは変哲も無い、どこにでもありそうな学校だった。俺も疑わなかっただろう。結界が無ければ。

そう、もう明らかに結界が張ってあるんだよ。信じられるか？結界だぜ？ここはどこの軍事主要施設なんだよ、とでも言わんばかりに厳重だし。

「なあ、城宮君。思いっきり結界が張ってあるんだけど、俺達は入れるのか？」

「あ、大丈夫ですよ。この書類に名前とか書いてくれれば、俺が印章押しますから」

「ふうん。っていうかこの学校、生徒は全員魔術師かい？」

「よくわかりましたね。そうですよ」

「いくらなんでもこれはわかるよ。ねえ、花蓮さん？」

「さんはいらない。ま、そうだね。このむせ返るほどの量の魔力。一人じゃ無いなら複数。でも結界が張られている所から見て、全員が魔術師だと判断するのが妥当だろうね」

そうなんだよな。どう見ても、この量の魔力は普通じゃありえない。

え？魔力は見えるものなのかって？厳密にいえば、見てる訳じゃない。うーん、なんていうか気配みたいな物だと考えればいいのかな？

見えないけど、そこには確かにある物……とでもいうのか。ま、空気みたいなもんだ。しかしこの中でも際立ってるのは、ざっと十人ぐらいかな？

「さてと、これでいいのかい？」
「はい、これで大丈夫です。それよりも神崎さん、どうかしたんですか？」
「えーと、もう人来てるみたいなんだけど……」
「え？」

周りを見てみると、確かに何人かの生徒が立っていた。しかも猛烈な敵意をぶつけられている。そして代表の……明らかに高慢な女生徒が出てきた。

「おい、貴様ら。この学校に何の用だ？」

「一応、職員室の先生とか彼の友達とかに用事があるかな。そういう君たちこそ何？それだけかい？」
「無論、まずは退いてもらおう。確かにそこの生徒は、失踪中だった城宮貴也君なのだろうが。それでもまずは連絡を入れておくのが普通ではないか？」
「なるほどね。確かにそりゃそうだ。でも、こちとらそんな事は知ったこっちゃないのさ。
君たちに選択肢をあげよう。普通に退くか、俺に倒されて退かされるか。どっちがいい？」
「貴様、ふざけているのか！？」

「そこまでにしなさい」

全員が声のした方を向くと、そこには副会長の腕章をはめた女生徒がいた。うん？っていうかもしかしてあの子は……。

「ふ、副会長。どうしてこちらに？」

「それは私のセリフよ。どうして君こそこんな所にいるのかしら？私は貴也を迎えに来ただけだけど」
「こんな不審者を放置する訳には参りません」
「……ん？もしかして君が雨宮竜美さん？」
「ええ。そうですけど……失礼ですがあなたは？」
「あはは、覚えてないか。久しぶりだね、『タッちゃん』」
「もしかして……慎也さん？でしたらその呼び方やめて下さい」
「ご明察。今はこんな状態だけど。しかし、君が副会長ね。中々面白そうじゃないか」
「貴様、副会長になって口を訊くんだ！この人は学園で二番目の実力者なんだぞ！」
「そうかい。じゃあ、君は黙ってなよ。雑兵には欠片も興味無いから」
「貴様、ふざけるなよ！」

その高慢な子は、俺に無詠唱の魔術を放ってきた。属性は氷、か。甘いな、甘過ぎる。
いくら無詠症とは言え、この程度しか出せないのか。なんだかがっかりだな。俺が手を打ち払うと、その衝撃にすら耐えられず粉々に砕け散った。

「これで満足かい？もう面倒だし、行こうか」
「ま、待て！」
「まだ何か用か。これ以上俺達を無駄な事で立ち止まらせると言うのなら」
「言うのなら？」
「怪我ぐらいは覚悟にしろ。そしてまだ智恵が回るうちにどっかいけ。俺はもう優しくないぞ」

俺の止めの言葉が効いたのか、その生徒と取り巻きの子たちは黙って俺達を見過ごした。少々厳し過ぎじゃ？とも言われたけど、俺はああいう輩が嫌いだ。

自分の持っている力が他の人は持っていないと分かると、そいつはやたらと図に乗る。俺はそうやって他人を蔑む輩が嫌いなんだ。

そう告げると、俺は竜美ちゃん先導のもと職員室に行った後、城宮君の教室に向かった。

生徒達と模擬戦（1）

「それでまた、どうしてこうなるの？」
「何言ってるんですか。いいでしょ？別に減るもんじゃないでしょ」
「減るけどね！？俺の魔力とか色々な物が！」

あの後、城宮君の教室まで付いていくとそこには結構な魔力を持った子達がいた。そして再会を喜んでいる所を見ていると、俺に唐突に挑んでくる生徒がいた。

「あの、俺と闘ってくれませんか？」
「一応訊いておくけど、君は？」
「あ、すいません。俺は天条樫次（てんじょうかしつぐ）と言います。現代魔術の一派の次期党首です」
「ほう？そりゃ面白そうだね。俺は別に構わないよ？精々足掻けるだけ足掻きなよ」
「ありがとうございます」
「え！何それずるい！慎也さん、私も良いですか？修行の成果見て下さいよ！」

このセリフを皮切りに、教室中からじゃあ私も！という声が多発。今じゃほぼクラス全員が俺の目の前に立っていた。

「それじゃあ、皆準備は良いかい？」
「大丈夫です」
「そんじゃ、試合開始！」

城宮君は審判。参加したげだったけど、無理やり止めた。さすがにこれ以上増えるのは避けたい。大体、これでも結構無理してるっ

て言うのにこれ以上はとてもじゃないが無理だ。

「はあ、こりゃ多いな。小隊戦形式にしといて正解だったな。さてはて、相手も面倒だな。よし、これで行こう。全てを零へと還せ『最終元素(ラストエレメント)』」

俺は右手に白の手袋を現界させて、飛んできた魔力の球の数々を消し去った。相手が驚いてる間に、魔力で作った衝撃波を放って脳震盪を起こして気絶させた。

でもやっぱり一筋縄ではいかなかった。竜美ちゃんが魔力で壁を作って阻んだらしい。まだ立っていた。面倒くさいなあ。

「祖は全てを貫く光槍！我が敵を撃ち抜け！『メタトロン』！」

鋭い光が飛んできたが、俺はそれを現界させた「最終元素(ラストエレメント)」で受け止めて消し去った。うん、前見たよりは術も洗練されてるし強くなってるみたいだね。

「でも、甘い。それにメタトロンの術式はそれじゃない。汝は神の代理人なり。汝が持ちし炎の柱を用いて我が敵を焼き尽くせ！『メタトロン』」

俺の左手からとんでもない熱量の炎が噴き出し、目の前にある全てを焼き尽くさん勢いで放たれた。

え？そんなことしたら火事になるって？大丈夫だ。言い忘れてたけど、ここは演習で使われる場所らしいから外にあるんだ。

竜美ちゃんは炎を何とか受け止めきったが、魔力の使い過ぎでふらふらになっていたので、さっきの衝撃波を撃って気絶させた。ま、効力は二十分がせいぜいなんだが。

しっかし、最初のメンバーでこれだけって後が大変じゃねえか。

ああ、本当に面倒だなあ。

生徒達と模擬戦（2）

「さて、後どんだけ残ってんだ？」
「ええっと、これで最後ですね。一チーム六人編成でもう五試合しましたから。うちのクラスは三十二人でしたから、残りは二人ですけど」
「ふーん、それで君たち準備は良いかい？」

残りの二人は俺に名乗ってきた天条君と桧原さんだったかな？この二人が相手だった。この二人は俺が、感じた数少ない魔術師の一人だった。

「「大丈夫です」」

「そうかい。そりゃ結構だな。さあ、さっさっとかかってこいよ」

「其は焔。全てを焼き尽くす炎獄の元に我が全てを薙ぎ、祓いたまえ！
『天神炎獄（フェイスメルト・ハルビィア）』」
「汝は雷。我が敵を葬り、全てを灰塵すらも残らぬほどの大地へ帰せ！
『雷霆葬送（ファルナス・エンフェルビア）』」

『ムスペルヘイム』に匹敵するほどの大火力と『ライトニング・ジャッジメント』と同等の出力の雷がこちらに迫ってきた。
そして俺に当たり、とんでも無い量の爆発を誘発した。俺が何もしなかった事に慌てているのが空気で分かる。

「いやあ、これはこれは。さすがにこれ位は出るか。面白いな」

「「！？」」
「おいおい、これ位で驚いてもらっちゃ困るぜ？ま、いいけどさ。そして君たちに見せてあげよう。本当の魔術という物をな」

――――汝は光。

これはまずいと肌で理解したのか、また新たな術式を練り始めた。無駄なんだけどな。

――――総てを裁きし断罪の光を持ちて

――――全てを原初の世界へ帰す。

――――全てを始まりへ。『始まり』という名の『終わり』へと導け。

――――断罪光（ジャッジメント）！

「その全てを無へと帰せ。『最終元素（ラストエレメント）』」

俺は放ちかけた術を強制的に最終元素（ラストエレメント）で解除した。危なかった。今の放ってたら、ここから三十キロ四方が吹っ飛んでたわ。おい、勝手に俺の身体を操るんじゃねえよ。いくらこんな異世界で強い子に会えたからってさ。

『まあいいではないか。お前も面白かっただろう？』

そういう問題じゃないっての。二人の方を向くと、放心したような顔で俺を見ていた。ありゃ、やっぱりちょっとやり過ぎたかな？

「二人とも、大丈夫か……」
「あ、あの！」
「へ？」
「今の、どういう術なんですか！？あんな術は生まれて初めて見ました！」
「そりゃ見てたら怖いよ」

三十キロ四方を吹っ飛ばす魔術だからな。初見の時こそ死ぬ時だろう。

「名前を教えてもらっても良いですか！？」
「構わんから落ち着け。冷静な心を失った魔術師に残されるのは死だけだぞ」
「あ、すいません。じゃ、じゃあ食堂で話してもらっても良いですか？」
「あ、ずるい！私にも教えてよ、乾さん！」

すると教室の二の舞とばかりに皆が騒ぎ出した。仕方ないので思いっきり地面に足を叩きつけた。すると皆の騒ぎがぴたりと止まった。

「俺は聖徳太子じゃねえんだから騒がれても分からん。竜美ちゃんはまた後で教えてやるよ。
どうせ後で叔父さんに会いに行くしな。それじゃ、食堂だっけ？」
「あ、はい。案内します。俺に付いてきて下さい」

そして俺達は、天条君先導の元食堂に向かって歩き始めた。

食堂での再会

「それで？何を訊きたいんだい？」

食堂にて俺達は飲み物だけを買って座っていた。まずは一番最初に話しかけてきた天条君達だ。

「あの魔術は何なんですか！？」

「俺の持っている光系統最強の魔術。俺を中心に三十キロ四方が吹っ飛ぶ末恐ろしい魔法だ。

俺がこれを最初に使った時、気づいたら周りに誰も残って無かったからな。ありゃ怖かった」

「はあ、なんでそんな魔術を使うかな？しかも神喰狼（フェンリル）に意識乗っ取られてたでしょ。駄目じゃん、ちゃんと制御してないと」

「それは申し訳ないと思ってます。はい。でも、いつの間にか制御を奪われてたんだよね」

俺が一花さんも交えて話をしていると、その声は入口から唐突に聞こえてきた。そして同時に何かが飛んできた。

「光よ」

俺はそれを視認すると同時に呟いていた。

「ジズレイル、消し飛ばせ」

俺の足元の影から狼が出てきて、飛んできた光を咆哮で消し飛ばした。まあ、もちろんその後すぐに戻っていったが。基本的に面倒くさがりだから。

「それで唐突に何の用だ？『冥王』クロムウェル」
「なんで君がこんな所にいるんだ？不法侵入者にはそれ相応の罰を。当然だろう」
「黙れよ、ガキ。五年前みたいにぼこぼこにされたいのか？」
「私だってあれから何もしていなかった訳ではない。今度は立場を逆にしてやる」
「それ、死亡フラグだぜ？『過重力（グラビティ）』」

俺は術式を作動させて、クロムウェルを地面に叩きつけた。そして俺は近づいた。もちろん一歩歩く毎に、重力は増していく。俺が魔力を流し続けているからだ。

「お前が俺の事を恨んでいるのは知っている。が、それでもお前程度じゃ到底俺には敵わないのさ。
それぐらい、いい加減理解したらどうだ？アラザルト・クロムウェル」
「黙れよ！狼風情が！貴様は山なり自然を駆け回っていればいいんだよ！どうせ貴様の家族だって同じなのだろう！」
「黙れって言ってんだろ？お前が喋る権利なんかねえよ」

空気を揺らすほどの拳打を腹に向かってぶちこんだ。なおも喋ろうとしたから、震脚の要領で足を動かし鳩尾に打ちこんだ。そして一気に意識を刈り取った。

「悪い。今日は気が削がれた。また今度でもいいかな？連絡先は後で竜美ちゃんに伝えておくから。
それじゃ、行くとしようか。こいつの傍には一秒たりとも居たくないし」

俺はそう告げると、残っていた皆に背を向けて歩き始めた。まったく苛々するな。なんでこんな感情を抱かねばならんのだ！腹立たしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3483y/

白銀の鎧と黄金の剣

2011年12月27日22時46分発行